川柳塔

創刊大正十三年　通巻八七一号

日川協加盟

No. 871

十二月号

本のことならご相談を…

●川柳・俳句・短歌集
●画集・写真集・絵本
●社史・小説・エッセー
●創業・喜寿を祝う記念誌
●故人を偲ぶ追悼誌
●郷土誌

図書出版 教育情報出版
〒557-0055 大阪市西成区千本南1-12-8
TEL 06-6658-8741㈹ FAX 06-6652-2928

自費出版
川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号
TEL・FAX (06)6372-1178

今年を顧みて

橘高　薫風

今年もはや歳晩を迎えて一年を振り返る時がきた。年が寄るとともに酸素ボンベを抱えた活動であるから、今迄の三分の一しかこなせない仕事量に、かえってそれが増えてくるので、いよいよ自分の時間の手詰りは限界にきてしまう。

三月二十日には川柳塔75周年記念川柳大会をホテルアウィーナ大阪で開催し、四百五十五名の参加者を得た。初めて四百人突破の感激を一同で喜んだ。

第23回全日本川柳秋田大会は六月十三日、大潟村のサンルーラル大潟で開かれ、波多野五楽庵氏が「招待」の選を担当された。前夜祭から終了までの運営の手際良さは見事で、実行委員長の猿田寒坊氏のご尽力に感銘した。これは十月二十四日の第14回国民文化祭・ぎふ'99の郡上八幡町の大会にも言えることだが、大阪本社からの幹部の出席が皆無であったのはいささか恥ずかしい思いがした。大きいイベントは、それに接して長所を取り入れる才覚や責任感につながる自覚、全国柳人との交歓や歴史につらなる見聞を後進に語る材料を蓄積して欲しい。

郡上八幡は曽遊の地、栞先生、大八先生や俊平さんと同行して翠柳川柳会と合同句会を開いた。立枕よし子、山田かずさんらとなつかしく旧交を温めた。

九月四日五日は麻生路郎句碑建立五十年記念、第51回西日本川柳大会へ出席、先生の五女西村梨里さんも感慨深い面持ちで、「俺に似よ」一句の力を認識し、先生の偉大さを偲んだ。

第5回川柳塔まつりは十月十日アウィーナ大阪で開催、爽やかなムードで終始した。二賞選考の方法を変更した心配もなく、今後この形で行う自信につながる。改善すべきところは広く意見を取り入れたい。

今治市の汐風川柳社の50周年記念大会は、しまなみ海道開通に因んで五月九日に開催され、「川柳からつ」は二百号を自祝して六月六日、「川柳あしなみ」は五百号記念大会を七月十一日それぞれ開催された。

各地の柳社の記念大会とともに今年の顕著な足跡は、句集の出版であった。

黒川紫香著『地球の塵』、月原宵明著『しまなみ』、奥田みつ子著『白い梅』、八木千代著『椿守』、川上大輪・富湖著『二重奏』、森井菁居著『愛すれば』、恒松叮紅著『愛たしか』、田中正坊著『ペンシル』、村田善保遺句集『鬼手仏心』等々、実り多い年であった。

最後に特筆したいのは、国民文化祭で同人中原諷人氏が「踊り」の課題の第一席、文部大臣奨励賞を獲得（一般の部）、乾優香さんが「鮎」の課題の第一席やはり文部大臣奨励賞を手にされた（ジュニアの部）。同じ町の二人が同時にビッグタイトルを獲得する空前絶後の奇跡とも言える足跡は川柳塔の誇りでもある。

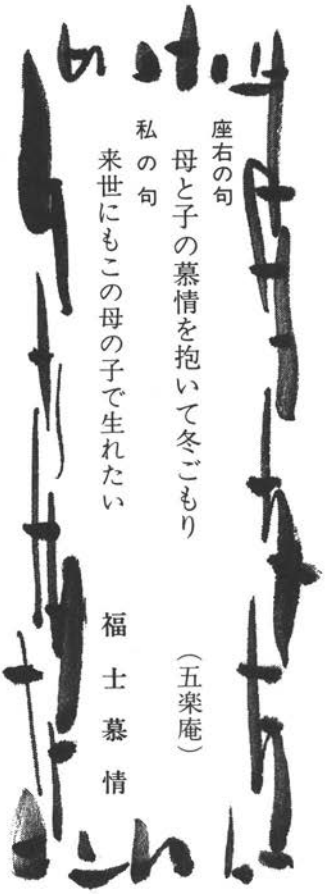
十一月十四日の第20回みか月川柳大会はいやが上にも盛り上がることであろう。

作　品

俊平に柩は狭しあわれ哉

十三夜俊平杉の子になった

木守りよ冬二俊平落ち尽くし



座右の句

母と子の慕情を抱いて冬ごもり　（五楽庵）

私の句

来世にもこの母の子で生れたい　福士慕情

川柳塔　十二月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　今年を顧みて……橘高薫風…（1）
木曽路……板尾岳人…（2）
川柳塔（同人吟）……橘高薫風選…（4）
佳句感想……橘高薫風…（54）
自選集……（55）
川柳の群像　寺尾俊平……東野大八…（58）
誹風柳多留二四篇研究　12……（60）
水煙抄……河内天笑選…（64）
大空のこころ（107）……橘高薫風…（89）
秀句鑑賞［同人吟……津守柳伸…（62）
　　水煙抄……浅田隆樹…（93）
渺湖抄……八木千代選…（90）

木曽路

板尾岳人

父の日に父は木曽路の旅にあり　柳志

20数年前に木曽路へ吟行した時の本多柳志さんの句である。確か秀句に抜けて東野大八先生から美濃焼きの茶碗が賞品として出された記憶がある。

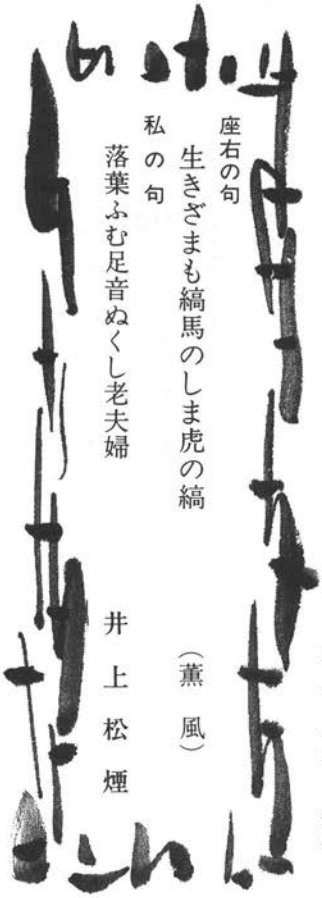
愛と言う終身刑を宣告され、家庭と言う独房に入れられて現在新婚39年。出獄を許されることも、また脱走する気もなく刑を素直に受けている。共に刑を受けた女囚（妻）と護送車（妻の運転する車）にて木曽路の旅に出た。

大阪を早朝7時に出て中央自動車道を走り中津川インターより馬籠へ。水車が回る音を聞きながら昔の旅籠の面影が残る藤村ゆかりの記念館を観て散策、中山道を経て妻籠まで約9粁三時間のハイキング。一里塚を経て諏訪神社、そして途中天保13年に地元の俳人たちの手で建立された俳聖松尾芭蕉の句碑。

送られて送りつ果ては木曽の秋　芭蕉

また、正岡子規の句碑等をカメラに撮り、馬籠城跡の登り道を馬籠峠へ（海抜80米）遠く宝

茴香の花……宮西弥生選……(94)
「間」……籠島恵子選……(96)
一路集「絆」……杉本孝男選……(96)
「とりあえず」……加島由一選……(97)
初歩教室「終り」……吐田公一……(98)
鹿野町に文部大臣奨励賞二つ……森山盛桜・中原諷人……(101)
エッセー　飛驒高山紀行……早川盛夫……(102)
寺尾俊平さんを悼む……橘高薫風・濱野奇童……(104)
諏訪柳々さんの逝去を悲しみ……波多野五楽庵……(106)
各地柳壇（佳句地十選／相馬一花）……(107)
川柳塔東大阪カルチャー教室開かれる……(121)
十一月本社句会……(122)
柳界展望……(126)
十二月各地句会案内……(128)
■編集後記……みつ子・金太……(130)



座右の句

生きざまも縞馬のしま虎の縞　（薫風）

私の句

落葉ふむ足音ぬくし老夫婦　井上松煙

暦の昔に建てられたままの古い家並が三百年の風雪に耐えて街道の両側に軒を並べ、かつては馬方や牛方の宿として賑わった処。

九州に18号台風が接近、小雨が降り出して来た。十返舎一九の句碑を過ぎると峠にさしかかり完全に雨の中。そしてついに土砂降りとなりにけり。深い木立の中に石畳が昔のまま残っていて下りに入る。

重くなった足を引きずりながら命より大切なカメラを完全防御、妻の前になり後となって杉の林を30分。雨水によって川と化した小石がごろごろ転がる山道を急いで、古いこわれかかったような丸木橋を渡ると突然目の前に滝が現われた。女滝、男滝は豪雨によって水嵩が増し、声を出して後退りする程の凄さと恐ろしさ。そして滝の豪快さは大台ヶ原の桃の木に匹敵するほどで、冷えた全身に恐怖感を与えられる。

やがて木曽川と合流する、あららぎ川の急流の轟々たる姿を左手に見ながら、寺下の町並みに到着、雨は止んだが全身ぼとぼとである。歩くことで森の空気のかすかな機微が読める楽しさが忘れられない。とくに雨上がりの晴れた日は新鮮な匂いに出合えて楽しい。

山の中、森の中は母の胎内に居る如く温かくてすてきな空間でもある。

この中山道はこれから山に登ろうとする人には絶好の道である。

橘高薫風選

弘前市　高瀬霜石

野球帽父子の距離が近くなる
マンネリを愛してやまず居酒屋へ
湯豆腐をつつきわたしを浄化する
病院を出たらでっかい雨雲だ
切符だけしっかり持って冬の駅

堺市　桑原道夫

魂がひりひりとする日本晴
待合室一天にわかにかき曇り
岩牡蠣の一つ心臓の形せり
膝抱けば涙出るほどなつかしき
石橋を曼珠沙華もて叩きのめす

鳥取市　武田帆雀

焼きするめ裂くアチチチチお留守番
菊手入れ蟷螂トンボ青蛙
可愛い子囮に連れて聖書売り
台風の目を持つ男正座する
低飛行して来る秋の蠅と飲む

黒石市　千葉風樹

床擦れの肉と蛍の話する
点滴の中をゆっくり歩く象
癌転移波打ち際で弾む鞠
落ち椿　砂糖菓子より美しく
起き上がり小法師の群の日の丸よ

大阪市　川端一歩

路地裏の名月サンマの匂いする
銀色の恋は爽やかよく眠れ
人生に待ったをしない背をのばす
陰口に小さい咳が諌めてる
雑学がいいなと思う通夜の席

枚方市　栗林光夫

掃除機を掃除したことない私
ススメススメヘイタイススメ蟻のみち
蟬しぐれ森の男声合唱団
お先にと桐の一葉が落ちました
重箱の隅においしいものがある

鳥取県　土橋はるお

交通安全タスキを掛けた案山子さん
番犬がラブレターを読んでいる
お招きにあずからなくて良かったわい
虫干しの万円札が減っている
君の頭は軽いと枕さえ言うよ

八王子市　播本充子

怖そうな人と優しい会話する
怪獣にくわしい祖母と見込まれる
迎合が嫌いな一匹の兎
当面の敵を一人に絞り込む
Gパンをスーツに替えてから無口

鳥取市　石上悦子

水蟹のスカスカきっとやさ男
ひょっとして先生ズボン後ろ前
母親のつもりが懐かないメダカ
迷惑なあいさつ毛虫からもらう
袋ぬいされて少年自爆する

豊中市　吉田あずき

さりげなく足許に咲く秋の花
がんばらぬことも無理なり戦中派
笑顔にも涙あふれる年となる
言い訳の中へ分け入る虫の声
女とは化粧で呆けが防げると

砂川市　大橋政良

波風の起きない程度馬鹿になる
馬鹿にしたような預金の利子に慣れ
借金をしてまで威張りたい背伸び
空缶の転がるジャズを聞いている
厚い胸嘘を濾過して恙ない

弘前市　須郷井蛙

病妻をリレーでつなぐ三姉妹
マナ板がコトコトわたし幸せよ
おにぎりを特上にする秋の空
豊作が決まりデッカイ秋の空
釣竿が帰り刺身になるお酒

弘前市　斉藤劦

りんご一本あり僕の現住所
金木まで「太宰らうめん」食べに来る
間引かれる運命だったなあ双葉
一枚ずついのち剝がれていく秋ぞ
足もとのごみを拾うて世紀末

弘前市　岡本花匠

掬われた金魚も家族彩添える
子の為のしるべも置かず木偶な父
豆つまむ箸のおろおろ盆の窪
われ入院妻の祈りの難転箸
生かされて笑いが戻る白い道

弘前市　蒔苗果林

知らぬ間に戸があきたがる我が家秋
栗茹でる塩の加減に亡妻が出る
秋茄子の肌健康な土の彩
土の喜怒哀楽語る草抜けぬ
能面を脱ぐにぬげない老いの恋

弘前市　一戸ツネ

明日は明日命預ける万華鏡
秋まつり仁輪加芝居の赤とんぼ
絵蠟燭　古文書の謎探す旅
時雨空柳友ひとり攫われる
淋しさにボリュームあげる津軽唄

弘前市　高橋岳水

生者必滅　招待状は順不同
少し朱に染ってからの人間味
階段の一段ごとにある踏み絵
指切りの指の哀しい記銘力
人生の今が旬だと信じたし

弘前市　佐治千加子

秋日ざし縁にぬくもる亡母がいる
猫の目が心変りを見届ける
コーヒーはブラック無口無愛想
ホラ吹きにうなずいている西の窓
結論は出ない出さない猫の顔

弘前市　小寺花峯

反対の意見がグツグツ民主主義
生煮えの男に生えてくる鼻毛
父の背に海を見ている少年期
リストラの首がぶらぶら散歩道
雑草が生き伸びてくる除草剤

弘前市　櫻庭順風

流汗淋漓　耕している与作
親しさは青葉に鎮座する蛙
身を守り野菜を守りしたり顔
手元足元狂う鍬なんて歳
病葉と農薬のどでからみあい

弘前市　福士慕情

熱燗を呑む節くれた土の指
汗滲みた土にたわわな赤林檎
コスモスとほど好い風に招かれる
ワイパーの動き激しくなる晩秋
赤とんぼハミングしてる赤トンボ

弘前市　中山雅城

十二月年賀を書いて鐘を聞く
十二月父ちゃん土産持ってくる
十二月八日ラジオの声がする
十二月帰省の子たち賑やかに
十二月津軽情っ張り未だ続く

弘前市　相馬銀波

手探りのままで今年も年の暮れ
車から車介護の足腰か
雨の日の朝はゆっくり歯をみがく
豊作のコメ酒うまく低米価
結論は年越す策の資金繰り

弘前市　今愁女

無色透明　無臭の怖さ識らされる
事故起きて大事と識った弱者なり
世のおとこセクハラの名でおとされる
うかうかとひとりのユダに危められ
大観も魁夷も一堂上野森

弘前市　小枝ふさゑ

野の花に一時心癒される
正論は吐かない後が怖いから
それなりの歴史を刻む夫婦箸
昔話僕を多弁にしてくれる
人間愛今も変らぬ〝東京物語〟

十和田市　小笠原敏人

音に聞くほどでないのも名勝地
温泉へ名所旧跡斜め読み
湧くお湯に変りはないが不老不死
クルマ旅車中で急須のお茶にする
スケジュール　アバウトだから楽しめる

十和田市　阿部進

リストラをされた主人を大事にし
何時までも輝いている子の未来
不倫でも愛には変りありません
喜寿夫婦辛い浮世の雨に濡れ
あれこれと夢で終った親孝行

黒石市　相馬一花

念入りに左官のように塗りまくる
わが社にも痴漢の卵二つ三つ
住職もやはり気になるヌード集
黒枠の中は万年青年だ
服装でお客を値踏みするホテル

八戸市　島田昭治

死のうと思っても雑念寄ってくる
四月かな病院の廊下でばたり逢い
ただただハマさんの冥福祈るのみ
親切でない看護婦さんもたまにあり
エンマから休み貰って妻帰れ

仙台市　川村映輝

手術して今ではやってよかったと
病院食栄養だけで味は別
転がったくすりが遂に見当らず
食えぬから腰掛でよし何でもよい
豊作の茸に心奪われて

大宮市　八田敏

敬老の料理自作で子ら招き
綱引きに親が子供にかえる顔
叱られて孫逃げて来る距離に住む
ダイエット腹はへこまず皺がふえ
二歳児と並んで吸入治療中

町田市　竹内紫錆

兵役とコーラスを経た良い姿勢
鹿に次ぎ徘徊さがす電波機器
先代の血液型を孫が訊く
宴後すぐ一念の人歯を磨く
老いて機敏に出す保険証

東京都　後藤早智

窓越しにみこしを担ぐ汗の声
墓守りを自認して咲くまんじゅしゃげ
老親と介護保険の渦の中
啄木の悲哀と歩く切通し
名園の池枯れてゆく街作り

横浜市　菱田満秋

診察の前に自己診断を述べ
雨女だけが用意の傘をさし
妻と来たから混浴は遠慮する
生長の記録を消した障子貼り
子供等を安心させた老いの恋

横浜市　清水潮華

まじりっけなしのジュースでうまくない
旅馴れて旅の荷物が小さくなり
鉢植えの稲で教える米のこと
介護してもらう痛みは問われない
たのしみを探す真っ赤な靴をはく

横浜市　菊地政勝

小遣いをまた削られる介護法
CMの行儀の悪さを孫が真似
鄭重な間違い電話に安堵する
気心がわかり触れてもよい話
九十の同志と唄うコンサート

横浜市　小野句多留

寝つかれず貯めた小銭を区分けする
キャッシュレス財布のお金寝ています
谷越えをボールに調子聞いて打ち
温室のみかんは旬と口合わず
金婚の夫婦に大きく二重丸

横浜市　山下省子

いい人の基準に決め手ありますか
片方に椅子をずらせて本音きく
忘れてた夢と話そうシャボン玉
しあわせをいつかじゃなくて今ほしい
しあわせなふりをしているブルーの日

静岡市　安本晃授

一日一善夏から冬へ蝶は翔ぶ
長々とあざむいてきた父の背な
四面楚歌人間臭い声を聞く
罪深い男の駄法螺天を衝く
窓明り隣の犬の世辞笑い

富士宮市　渥美弧秀

柳誌読む窓は氷雨か昼下がり
朝ドラの〝すずらん〟に刻切り換える
待合室知人もなくて読む柳誌
病む床へショパンの流れ弾む夜
フルムーン伸び延びとなる老夫婦

静岡県　薗田獏沓

次世代へ継ぐ地下水を汚すまい
娘の愚痴を聞いてるうちに陽がかげり
秋風に慌て振興券使う
福耳も難聴という今日のうつ
おしゃれして軍艦マーチ聞きに行く

富山市　酒井輝

死を賭したオペで小さな勝ち戦
上品なオナラ主治医がほめてくれ
あまつさえ生きる気を削ぐ介護料
若者に白髪が似合う進化論
定年の身に抽出しが多過ぎる

富山市　舟渡杏花

病まなければわからなかった掌を合わす
捨て身になればビクつくこともなかったに
髪も未練も絶ち切れませんあの世まで
ついに渡れなかった橋が目の前に
神さまに媚を売る日のお賽銭

富山市　島ひかる

暖冬の予報聞きつつ雪囲い
鼻歌へ覗かれている垣根越し
娘がひとり増え花束の嬉し泣き
嫁からの便りうれしく読み返す
そと孫のかたこと言っている受話器

可児市　板山まみ子

読み聞かせ子供はとうに諳んじて
結局は自分の為のボランティア
開くまで虫近づくな菊の花
お隣に聞こえぬように弾くピアノ
言い方を変えれば聞こう頼みごと

愛知県　早川盛夫

道を聞くのに子供では怪しまれ
自立してから休日も惜しくなり
失礼と思う欠伸をしてしまい
健康は六十二Kを目安とし
必ずしも夢ではない九十百

京都市　小西未佐子

青い鳥籠の扉は開いてるよ
戸惑いも待ってはくれぬジャンプ傘
相手には軽い約束だったよう
身一つで歩く軽さよ重たさよ
面白いこんな生き方あったんだ

京都市　都倉求芽

兆の税注いで外資に乗っ取られ
放射線99年9の恐怖
手を振って歩けば背中伸びてくる
土用でなくてもすぐ鰻になる手抜き
遺伝子はまごうかたなくうちの孫

京都市　山海友熙

追伸にゆっくり庭の草刈りを
気持ちよく空を見上げる十二月
奥さんと呼ばれてたたむ女傘
正月を迎える準備する叩き
十二月加茂川の水速くなる

京都府　稲葉冬葉

さざ波に子等と騒いでいる平和
夜叉の夢見て醒める古都の宿
あの時のことを思えば神おわす
上昇気流に乗らなかった雀
美しくお痩せになった喪の女人

奈良市　天正千梢

聞き上手　私の心もいやされる
親にまで言わない事をしゃべらされ
遍路道　旅の重さをつくづくと
丈六の弥陀の内陣深ぶかと
曼珠沙華棚田の畦に萌えている

奈良市　米田恭昌

神宮の杜競いあう菊花展
リストラと言う省略の寒い風
赴任先ひとり言言う淋しがり
ホームレスも故郷の台風気にかかる
ある月ある朝放射能降るこわい町

生駒市　北山悟郎

秋風に黒い顔では野暮ったくて
反骨の精神今は受けいれず
小皿をつつき合い心と心通い合う
体調に気遣いをする八十歳
汗涙無駄にはすまいひた走る

大和高田市　岸本豊平次

冷蔵庫で皿も冷やした冷や奴
掌の凹みでいのち拾いの蚊
気がつけば蟬は静まり蟋蟀が
坪庭の花を野菜に変えてネギ
日の丸が簞笥の隅で黄ばんでた

大和郡山市　坊農柳弘

罪深いわたしを誘う酒の精
紅を指す孫七歳の稚児化粧
大吟醸妻の手料理引き立てる
初霜の化粧薄すら法隆寺
フルムーン雪見障子の差し向い

香芝市　大内朝子

晩成の子の汗を見たバンザイや
出る杭が打たれ上手になってくる
きっかけは火種あおったクラス会
亡母に似た野菊の私語を聞いてやる
新しい明日を招いている夕日

和歌山市　牛尾緑良

冬に入るまでに決めたい選択肢
紳士録に載ってはいない自己主張
「初恋の日」だった妻の誕生日
ハンドルよあなただけでは走れない
一升瓶が重くなったと父の腕

和歌山市　青枝鉄治

投票はするが政治家信じない
意見ない手も含まれた多数決
ストレートに火の粉をかぶるノンキャリア
過労死のポストが空いている不況
自らの手は汚さない仕掛人

和歌山市　福本英子

女人禁制息子よ母も女だよ
歳月がポケットの石丸くする
退く日まで仮面で通す回り椅子
花時計疑うことを知らず秋
臨界へ底無し沼と言う手抜き

和歌山市　堀端三男

黒を好む女で謎を秘めている
謎を解く鍵は女が握ってる
FA宣言私の腕を売りに出す
断り方が悪いと文句付けに来る
千円均一掘り出し物は見当らぬ

和歌山市　榎原公子

身をやつす現世に誇るものがない
わたくしのポーズ斜めに生きている
崩れやすいポーズだ力みすぎている
血管を巡りユーモアひょいっと出る
逆らってきばって熱くなる西陽

和歌山市　堀畑靖子

何年ぶりだろうか姑と見る夕日
下降線たどると見えてきた景色
叩いたら壊れるそんな仲じゃない
三食昼寝付きを選んだはずなのに
やさしさに惹かれて乗った縄電車

和歌山市　古久保和子

子の名誉かけた父兄の徒競走
年金に痩せた判子で銀行へ
逆立ちのままリヤカーの眠る納屋
台風の後片付けを蟻もする
見るものはみな多色刷り子供の目

和歌山市　川上富湖

骨になる迄の哀しいセレモニー（いとこの死）
分骨や右と左に手を合わす
思いやりだろう鏡が曇るのも
胴上げという名の私刑ではないか
鍵盤の上を走ってくる女

和歌山市　川上大輪

茶髪にしてからちっとも目立たない
悪い癖だが直すつもりはありません
何も無いそれが一番美しい
そのままで大人になってゆく子ども
いっぺんに死ぬと霊柩車が足りぬ

和歌山市　楠見章子

はじめましてお名前よりも男前（川柳塔まつりから）
街路樹の下モンタンと擦れ違う
縄文の風と囁くイヤリング
破れているジーパン穿いたお坊ちゃま
ドーム球場わたしも宇宙人かしら

和歌山市　桜井千秀

庇われて助かったのが恥ずかしい
乙女の祈りピアノ弾いてるおばあさん
沈黙の非難へ肩を怒らせる
道路工事地雷掘り出すような穴
声かけられてあーら気付いた振りをする

和歌山市　木本朱夏

死者の息かそかに白し曼珠沙華
曼珠沙華の白はこの世のものならず
身の内の鬼立ち上がる曼珠沙華
曼珠沙華の朱よりも赤き恥あらん
ならやまへ行く道すじの曼珠沙華

和歌山市　福井桂香

さざ波がアンソロジーを産みつづけ
密やかな別れを庇う吾亦紅
メビュウスの帯かもしれぬ夫婦劇
流行歌のなかを彷徨う夜の貨車
いにしえのポーズ極まる石舞台

和歌山市　玉置当代

気を抜いたとたんに虫歯疼きだす
輪を抜けてふたりは燃える風の盆
夫婦共演甘辛人生漫遊記
わたくしの真似をしている影法師
親の手を離れて弾む紀州毬

和歌山市　岩本美智子

悲しみを吸いつくし澄む空の碧
すり切れた羽を知らない老いた鷹
二度童子思考は秋の闇に溶け
二世紀に跨った虹無事渡る
二十世紀の終着駅に佇みぬ

和歌山市　細川稚代

ボランティア少しお年を召している
姿見にポーズしている満五歳
とっときの顔して母の五目めし
フラッシュを浴びると誰も美男美女
謝ってすむことでなし花手桶

和歌山市　山田高夫

来世も一緒と怖いことをいう
生きて古稀だらだら坂がまだ続く
七人の敵に逃げ道塞がれる
身に覚え人の痛みがよくわかる
口惜しさの持って行き場のない拳

和歌山市　山口三千子

平穏が何時まで続く白い道
弱り目に祟り目火の粉が飛んでくる
敵に塩贈る器にはなれず
人生の今正念場かも知れぬ
二人三脚ポイントずれていく余生

和歌山市　池永正甫

ひと口に花瓶というが九谷焼
こんにゃくのうまさを知った屋台店
京ことば一言だけの舞子はん
月夜には澄んだ音色の笛が合う
ライスカレーらっきょうの付く楽しさよ

和歌山市　田中みね

しっぽりと夜露に濡れてある祈り
全快へ夫関白取り戻す
親友と言われ戸惑うひとが居る
健康で扱き使われて孫の守り
何もそこまで急いで義兄の逝き給う

和歌山市　山根めぐみ

暴れ水神はしばらく掌を放す
矢面に立ってピリピリ実山椒
人づくり黄金の汗をかきながら
念力を爪に残して蟬の殻
脇役が荒れると船が座礁する

和歌山市　垂井千寿子

名月が映す減反の哀しみも
淋しがり屋の犬を飼ってる淋しがり
出世して忘れかけてる父のバネ
カレンダー当てにしてないエルニーニョ
これも悟り今日一日を満ち足りる

海南市　三宅保州

背伸びしたらもう見えそうな二千年
開きたくないときもあろうに自動ドア
何かある何でもないと言うときは
おかねもちだからじいちゃんだーいすき
腕によりかけた夫の目玉焼

海南市　谷口義男

正論をもみ消しにする多数決
勝ち目無い時は一先ず貝になる
タダ酒を呑んで吐いてる怪気炎
憲法論議　軍閥政治忘れ果て
爺ちゃんに勝って嫁には負けて居る

和歌山県　中後清史

朗らかな木に悪の芽は育たない
禁煙にまでライバルに負けた鬱
ライバルが視野から消えた日向ぼこ
日の丸にラッパを吹かせてはならぬ
赤貧の道を辿った亡父の地図

大阪市　玉置英子

これ程に違うどちらも私の子
昼の蕎麦私は茗荷　子は大葉
木犀がほんとうの秋告げている
青春と違うやすらぎある老後
亡夫の位牌私の場所は空けてある

大阪市　川内叭笑

現役を卒業したら天下り
限界を笑う政治の数合わせ
原発の恐さ知らせるバケツかな
玉のコシ嫁いで見れば火の車
一二三軍　総替えすべしタイガース

大阪市　神夏磯典子

成長はあっただろうか十二月
一匙の砂糖といくさ続いてる
夫婦して頓智製造しています
彼岸花いくつになっても嫌いだな
二千年が来る天災を連れながら

大阪市　板東倫子

女医さんが天動説を信じてる
バツイチの甥に茶髪の嫁が来た
死にたいも生きたいも老いの繰り言か
温度差のない人間と馬鹿ばなし
ファッションに縁なき太い足と腰

大阪市　本間満津子

振子時計と昔話をする夜更け
ぶっちゃけた話が出来る友恋し
ポストに音 待っているのはビラじゃない
おかしなことが罷り通って背が寒い
思い籠めドラマ一齣五七五

大阪市　清水利武

我武者羅に生きてやっとこ早八十路
恋もした振られもしたよ喜寿すぎて
松茸を囲み家族の笑い声
誘惑に負けて借金またふえる
心変りせよと師走の灯が招く

シルクロードの旅　大阪市　西出楓楽

来てみればシルクロードはハイウエー
亡夫似のおもざし捜す兵馬俑
哲学を語り出しそうラクダの眼
鳴沙山の砂さらさらと人嫌い
死ぬことはいと自然なり砂漠葬

大阪市　渡部さと美

夫手折ってくれた野菊の誕生日
動じぬ人低い声でもよくとおり
出たがりのいつも一段高い声
憧れている鈍行にまだ乗れず
あぶなっかしい手付きで父になる次男

大阪市　津村志華子

ちっぽけなボランティアです赤い羽根
貸金庫女の見栄も預けてる
寂しさが胸になお染むチチロ虫
お喋りの怖さ忘れた軽い口
コスモスが今年も咲いた亡母の庭

大阪市　桝本蕗児

しげしげと手の静脈を見て居たり
俺も年齢胸に老斑出だしたよ
野仏が呼吸しているようにみえ
着替えたらちっとはましになったでしょう
露天風呂時間と対話楽しもう

大阪市　清水絹子

美人ではないけど妻の医者知らず
不器量も母の賜物嫌でなし
四姉妹無事を土産に墓参り
一日遅れ新幹線の落下事故
民主主義セーラー服の俺お前

大阪市　田中節子

窓あかり途切れた先の無月かな
淋しがり火蛾のごと群れ赤のれん
蓼喰った時から変る愛ひとつ
脇役は人柄なのかいぶし銀
山赤に黄にも染まりて人恋し

大阪市　中田あい子

不条理や不合理とおる世紀末
一億の人に一億人生観
炎天下親遊ばさぬ子も遊ばず
七人の敵に八つの落し穴
真剣に聞いてわからぬ介護法

大阪市　稲本凡子

わが娘でも吐いた言葉は飲みこめぬ
雑巾に今日からタオル天下り
高齢者社会年寄り甘えすぎ
反省の風呂で今夜はのぼせてる
親切かお節介かと迷いだす

大阪市　河井庸佑

実力を知っての勇気無茶はせず
立場替え人の難儀を見過ごせず
あせる気を抑え自分に言い聞かす
忙中閑ぼちぼち進む春支度
人波に揉まれて母と年の市

大阪市　杉澤汀

踏みきりの地蔵に今日は赤い花
男一人小めしおかず中ジョッキ
今世紀最後の味はおらがそば
今世紀百八つめが気にかかる
老人は死なず只施設待つのみ

大阪市　松尾柳右子

食抜いて採血に行く昼下がり
二十一世紀迎える身体きたえてる
目をおおう写真の多い世紀なり
友と撮る写真はいつも笑い顔
正直な写真だ皺が隠せない

大阪市　辻川慶子

便箋にこだわる友に出す返事
座をはずす潮時になる電話ベル
心配はひとつ片付くまたひとつ
亡母の事何も話してくれぬ月
落葉焼く朝のいら立ち忘れんと

大阪市　町田達子

芸術の秋はわたくしも忙しい
余りにも長い残暑よ虫の音が細る
怖いこと東海村臨界事故ニュース
どこやらで桜咲いたという便り
気分転換雨を出掛ける美人画展

大阪市　北勝美

踏んばって妻の介護へ米寿生き
病院食スプーンで使わぬ長寿箸
まだ夏に未練がましく百日紅
地方紙の記事を切り抜く郷土愛
住職の病んでいるのは糖尿病

大阪市　津守柳伸

夜更かしは鳴らぬ時計の罪になる
百歳の笑顔感謝を忘れない
ペシャンコになるまごころもボランティア
のんびりゆったりジパング予定表
足ることを知り一年を締めくくる

大阪市　大塚節子

姉妹が母の手を取る露天風呂
松に藤浪想う春日の山は秋
年齢かいな湯あたりかいなああしんど
立ち退きでついに堺筋見えて来た
古希すぎて義母の介護によっこらしょ

大阪市　井上白峰

人の棲む地球を人が汚してる
泥沼に落ちて気付いた自己過信
現実と理想の距離が縮まらず
鏡拭く過去の汚点が消えるまで
巻き戻し出来ぬ記憶に歳を知る

大阪市　川原章久

鈴虫の鈴ころころと秋夜長
夜冷えに柿甘くする山の風
貸せぬ身はせめて駅まで送る友
会いとうて速達切手の貼り忘れ
言うまいと思う尻からどっこいしょ

大阪市　小林周信

様子見の小火から妻が戻らない
膝の本カタリと落ちた日向ぼこ
秋空が誘いに来たよ万歩計
野良猫が似た子咥えてお引っ越し
島の子に四季の波音子守唄

大阪市　川久保睦子

脳天にひびく痛みを亡母につげ
痛い膝忘れる温い友の文
この痛み今日も誰かの責にする
イタイイタイの飛んで行けも効かない
膝が言うちょっとは痩せておくれやす

大阪市　寺井東雲

雷が味方になっておどしてる
ダイオキシン鞄につめて海外へ
慣れてくる政治不信も無関心
悔い一つ抱いて指輪も褪せてくる
満腹にすると病気が増えてくる

大阪市　鈴木トヨ子

名月にススキだんごも語りかけ
年金を差引ゼロに暮してる
秋祭りナースの語る故郷訛り
年輪がほのぼのとした人にする
喜寿祝い仕上げの一歩踏みしめる

大阪市　安達はじめ

君が代を唄えば老いの背が伸びる
恩を受け真心返す年の暮れ
鴻毛の軽い命もすでに喜寿
生きてますやんわり薬効いている
僭越と言って音頭をとっている

大阪市　岡本久峰

もうあかん知らんふりして帰宅許可
切り刻み揚句の果てに放り出し
青い目に手を上げ恬として恥じず
ぼろ纏い夫唱婦随の手押し車
半弦の月原爆詩よむ小百合

大阪市　奥田良子

たこ壺でもうのんびりは出来ません
逝きし友黄葉の幹にかくれてる
クラス会小野小町も痴呆症
酸欠の我に苦しき深呼吸
除夜の鐘聞けますように祈ってる

堺市　河内月子

鯖さんま青菜大根　秋美味し
いい月やちょっと一杯やりましょう
荷飾りもせずに娘は行きました
父ちゃんの足とお腹をきたえねば
柘榴からパワーをもらう女達

堺市　志田千代

お見合いの返事を早く言いすぎた
天婦羅をあげている時オイと呼ぶ
奥様はこのごろNOとばかり言う
畳の上で死ねたら拍手喝采だ
展覧会立ち止まらずに止まらずに

堺市　柿花紀美女

心まで夏やせしたくない読書
狂わない時計に日々を刻まれる
雨の日に葉書一枚ポストまで
人生の頁へ残したい一句
乱世相老いも試練の中にいる

堺市　神原文

偏差値を逃げてバイパス走る子ら
原子炉をあっさり止めたのは海月
狂言を神妙に聞き笑われる
誰よりも女でいたいおかめです
失言を拭うてもまた拭うても

堺市　山本半銭

頭痛膏貼ってた母の歳になり
肩のこる訳は誰にも話せない
冬の陽を味方につけて乗り切ろう
徳兵衛に太棹五張腹に鳴る
無縁塚コスモスだけが揺れている

写生する画材一パイ朝の庭
裏の顔と表の顔を持つお人
芙蓉浮べて心豊かに昼の風呂
栗御飯炊いて身近に秋を知る
亡母の味に遠い彼岸のちらし寿し

堺市　黒田真砂

燃えつきる前の華やぎそれが今
温泉に二泊三日を縛られる
他力本願甘えることも程々に
初冠雪みじかい秋よもう逝くか
まだ少し色香残して孫を抱く

高石市　浅野房子

ボールペン震えて手術承諾書（妻の入院）
ホテルのフロントみたいなナースステーション
看護婦さんあんたしなさいダイエット
銀色の涙をこぼし月光る
波の音息子は家を出たがらぬ

岸和田市　高須賀金太

長生きが哀しい国になっている
新しいページは核ゼロと書こう
意地を張り僕はひもじいまま帰る
白旗をかかげてまん中を歩く
百歳まで生きるびっしりの予定表

岸和田市　岩佐ダン吉

だんじりにはずむ鉢巻きまつり足袋
竿頭の提灯見得切るまつりの夜
宮入りに千両役者のやりまわし
いろいろの顔が並んだ花祝儀
ばあちゃんに援助をたのむ小遣い銭

岸和田市　芳地狸村

楽屋裏見せない母の苦労知る
憶測で言うから話もつれ出す
うやむやな語尾が気になる別れぎわ
絵ハガキで旅の景色をお裾分け
お喋りの周遊券も疲れはて

岸和田市　原さよ子

安らぎを壺に求める蛸に似て
与野党の意地が国政見失う
年金の暮らしに馴れて汗忘れ
バンクから安全神話消えて壺
憶測の当った妻のしたり顔

岸和田市　長谷川呂万

結論を出すには早い酒の量
過労死をものともしない蟻の列
裏入学額の順から受付ける
損得を上手にボケるおじいさん
大物が細かい事を言う不況

岸和田市　井齋一齋

岸和田市　井伊東吉

いつまでも麦茶の世話になる今年
狂ってる事件の多い世紀末
要介護温もり消える認定法
脱げた靴拾って走る運動会
綱引きのウーマンパワーがすさまじい

岸和田市　藪野けい子

今日だけの花を咲かせるわび世帯
平凡が肌の手入れに費やして
写真を写してからがダイエット
シルエットに補正下着を注文す
母は家事父は道徳教える親

岸和田市　田中文時

意気軒昂シニアクラブの空元気
窓際で解けた斜陽の社の秘密
餓死が無い代り街角命掛け
物言わぬ犬に慰められている
昼間からうとうとしてて頼りない

岸和田市　原苑子

地図と同じ形が見えた雲の上（九月北海道へ）
熊出没注意があって心待ち
摩周湖の全景に触れ霧を待つ
開拓の北見の原野父祖しのぶ
広野にてパッチワークのカーペット

泉佐野市　山本蛙城

訃報欄見る朝ごとの躁と鬱
新閣僚ご指示いただき赤い羽根
消費税もう臨界の臭いする
提灯がずらり祭だこの駅も
ベレー帽少なうなりはりましたなあ

和泉市　岡井やすお

ミサイルを向けて援助を待っている
外向いて援助も良いが内赤字
公的の支援と聞いて集り出す
必罰を忘れた甘さこの始末
とし聞けばえとで答えるお年寄り

和泉市　西岡洛酔

ケイタイにふっと目ざめた心地良さ
北便り全山真っ赤と染めた弁
七十路何を塗ろうか白い画布
精一ぱい生きる背筋が曲ってる
妻の居る朝餉の音に秋を聞く

貝塚市　池田寿美子

晩学に転ばぬ先の介護読む
秋本番地球の裏に旅の夢（ニュージーランド）
一瞬の空奪い合う花火師よ
美人型移り行く世に凋性持つ
朝ドラも一変和む京の秋

八尾市　高橋夕花

芸術の秋だ枯葉も仲間入り
コスモス枯れて熱いコーヒーと編み針と
大波をかぶってからの道しるべ
髪洗う夜ごと哀しみますばかり
とんぼりは故里わたしカニ座の女なり

八尾市　宮西弥生

秋雨前線遊び上手な傘の中
青竹を踏む老母でまだ八十歳
後進にゆずった日から若くなる
旬の秋鍋やきうどんと女たち
言い訳もウソも秋だから似合う

八尾市　生嶋ますみ

少女と乗るエレベーターに甘い風
読む度に辞書を繰ってるカタカナ語
仇討のように一途な雨が降る
美しい人ほど化粧念をいれ
十三回忌父の戒名ふと忘れ

八尾市　宮崎シマ子

新米をもらい祭りと去んだ客
地図ひろげ病夫と旅に行く話
女にも筋金入った線がある
もう少ししか居ない世界だ我を通す
今年の苦を波が持ち去る大晦日

八尾市　高杉千歩

ちっぽけな愛を捧げる赤い羽根
日の丸に空しい疼き残りおり
原点に戻るチャンスだ二千年
五十年いろいろあって老いの余暇
補聴器が離せなくなる世紀末

八尾市　内海幸生

ワープロの転換にまた辞書が要り
予の辞書に二千年問題などは無い
大掃除アルバムがまた皆呼び
堅いこと言わねば何で酒になる
来年も元気で逢おうよ秋の虫

八尾市　村上剛治

読みだすと腹の空かない本の虫
厚化粧アクセサリーで武装する
きびだんご甘く大きくしなければ
茜雲浄土の旅の道標
仕事の虫はこどもの寝顔しか知らぬ

八尾市　村上ミツ子

木犀の香りに亡母の忌がめぐり
京都裏寺墓はただただ静かなり
弟の分も水かけ南無阿弥陀
境内にコスモス乱舞する古刹
十月半ばまだ半袖が闊歩して

八尾市　吉村一風

旅からの電話用ない妻の声
鰯雲一緒に走る運動会
口達者入院しても休まない
むずかしい顔でティッシュをとれと言う
玄関の金魚にみんな愛想する

八尾市　長谷川春蘭

法螺を吹く友の話も聞くゆとり
元気かと聞けば元気で無い電話
睡魔というやさしき魔来る虫すだく
充実の一日菊花に酔いしれる
夫婦茶碗幾度替えたか喜寿米寿

八尾市　神原まさと

青いのに甘いみかんは気にいらぬ
やる気出た頃見計らい出る病気
脱サラの旗は家族に支えられ
孫消えるレジで並んでいる隙に
バランスが大事なんだと独り言

松原市　玉置重人

愕然とひとりになった夢を見る
子の家も孫の家にもない国旗
祭り笛有給休暇取ってある
四字熟語大正生まれまだ元気
暗算が早くて逃げ足が早い

松原市　小池しげお

大和三山婿も親戚嫁も親戚
信心はしない最高裁判所
極楽は地獄の向このむこの方
蘭の花パパの認知を待っている
絶景の手前の磯で育つ海苔

藤井寺市　高田美代子

相席をするなら美しいひとと
面白い人で鬼ともおともだち
現代語のところどころに註が要る
人間をやめたか靴が捨ててある
逃げているヒマなんかない世紀末

藤井寺市　鴨谷瑠美子

秋風は古い都へまだ未練
モノローグこの世の秋にあといくつ
似てないと気づいて鳶は鳶でいる
月の澄む夜に思い出振り返る
右脳のひらめき栗も爆ぜている

藤井寺市　中島志洋

酔い覚めてさっきの強気どこへやら
燃えている二人木枯らし苦にならず
蜜柑一つ分けて食べ合う仲の良さ
縄のれん素通り出来ぬ律儀者
売れ残りばかり集めた福袋

藤井寺市　楠　昭子

損をした話でみなを喜ばせ
過去ばかりなつかしがって乗りおくれ
知らぬ間に増えてしまった面の数
泣きごとは言わずひたすら汗を拭く
衣替えせんたくネームつけたまま

藤井寺市　太田　扶美代

大きい事言わなくなってきた手足
有頂天きっと誰かに狙われる
それからも失敗してる人間味
病人によく効く嘘を置いて行く
意にそまぬ人にも頭下げている

羽曳野市　吉川　寿美

温もりを失くした駅から無蓋貨車
悪人はだぁれもいない心太
割符片手に寂しきものよ自由とは
字余りのままで黄昏れてゆくか
老いるとは悲しきものよ靴すべり

羽曳野市　榎本　吐来

友情が溢れる川柳塔まつり
笑顔笑顔息子が司法書士となる
摩訶不思議今あったのが消えている
採算をもくろみ医師が薬選る
後ろ指さされていると知らぬ背な

羽曳野市　酒井　一壺

金返す約束の日を忘れられ
大切な約束出来ぬ体です
約束はないが用意はしておこう
美人ではないが私の好みです
魚屋の妻が美人でもうからず

羽曳野市　福田　満州

鉢植のこんなとこにも曼珠沙華
露草の紺に疲れ目吸い込まれ
父の忌の木犀咲かず汗を拭き
もみじ狩りテレビで足りるお父さん
迷うては出発点にまた戻り

羽曳野市　三好　専平

元気出る薬高くて手が出ない
ぐうたらな男の住める街が好き
角筆の写本が仮名の歴史変え
説明が不足でしたと嘘をつき
ブルースの声で軍部を叱りつけ

羽曳野市　徳山　みつこ

中世の風ふとよぎる薔薇の島（ギリシャ・ロードス島）
食堂はタベルナだってギリシャ語で
ひんやりと命を洗う風の道（地下都市）
東洋も西洋も知るカモメ翔ぶ（ボスポラス海峡）
殉教へマリアの頬に血の涙（チベタベキア）

富田林市　藤田泰子

吹き溜りそれが私の好きな場所
秋の海　男波女波が騒がしい
枯れてゆくカンナに秋の目が渇く
絵蠟燭灯し亡夫の誕生日
今やっと鎖が解けた七回忌

富田林市　片岡智恵子

大地震月も案じている地球
耐えてきたこと知っている足の爪
昨日より老いへ流れぬ鏡買う
ワンテンポ遅れて泳ぐ雑魚の群れ
弱音はもう吐かぬと決めた白い足袋

河内長野市　植村喜代

コマーシャル聞き流す孫踊ってる
ふる里の海が焼けつく秋まつり
駅一つ出来て夜景の視野に入る
ベランダのフトン気になる他所の雨
この平和おいしいパンが溢れてる

河内長野市　井上喜酔

雑草の足元にある力こぶ
留守番が下手で言い訳してるメモ
ぺらぺらの辞令で首が転げ落ち
バーゲンでぴったり合わす身のこなし
野村はんあんたの野球はもう古い

河内長野市　加島由一

胆のうに酒でつくった石がある
秋深し金木犀の深情け
この先も同じ時計を見て暮らす
天高くサンマが海をつれてくる
いい話ある出て来いと午後十時

吹田市　瀬戸まさよ

溜め池の鷺静止して哲学者
命日のおはぎ仏と共に食べ
縦横に乱れコスモス筋通す
見た事件小鳥ねぐらで喋り合う
希少価値官民に見る硬骨漢

吹田市　山本希久子

師走の街勝気と弱気せめぎ合い
大阪下車賑やかな大阪弁
一日を境　秋から冬の絵に
いい人をやめたら楽だ十二月
ほろほろと愛をこぼして六十路旅

吹田市　石原靖巳

すずらんの駅よドラマを有難う
あの美人ときどき手相見せに来る
大仰に生きた死んだは碁の話
自自公のどこまで続く政治劇
新幹線トンネル来たら鉄かぶと

吹田市　野下之男

日の本の自信僅かに欠けてくる
もみじの手握り返する愛がある
故郷を覗きに行くか流れ雲
野良猫が見て見ぬ振りの干し魚
句碑の山柳人の目を和ませる

交野市　山川日出子

平安も平成今も持つ扇子
サングラス　バイクに乗れば若くなる
庭の亡母着物洗って伸子張り
園児には保母の笑顔はチューリップ
個食増えマンガの皿が友となる

東大阪市　森下愛論

燃え尽きるまで盃は放しません
ほん少し愛を下さい鈴鳴らす
されば酒ならハイですよ
レモンティー落ち葉数えて黄昏れる
酒の無い時　狂い咲く花に似る

東大阪市　谷口義

兄嫁が美人で楽しみな法事
美しい人が正しいことを言い
友だちの老眼鏡を借りて読み
友だちの手紙は全部おいてある
品行方正妻は退屈しています

東大阪市　指宿千枝子

朝顔に今日の換気をしてもらい
カラスにもお早よう言うてひとり者
仏さまへメールを送る秋の風
祖父に似て祖父を知らない男の子
センチメンタルジャーニーになりリオの風

東大阪市　安永春

運動会腰をのばしてタオル振る
ほっとひと息大空青い物干場
虫の声仲間入りする薪能
月下美人競うています十二輪
月下美人料理にされて三杯酢

東大阪市　北村賢子

秋深し亡父母慕う君懐う
信頼のこころがぬくい無人店
満天の星つかみどりしてみたい
夏から秋　雲の風情も様がわり
歯を磨く八十歳で二十本

大東市　児玉蛙

進退を決めかねている椅子のゆれ
人恋しくなって外したサングラス
夜更かしの娘に玄関明るすぎ
満ち足りて心に触れぬものばかり
久し振り会うた天狗に鼻がない

守口市　結城君子

被写体のポーズ知ってる赤蜻蛉
リストラの世を短針のように生き
スーパーのくじさえカスをつかむ僕
いい姑にならぬ約束嫁とする
自信ない影法師だが励まして

枚方市　海老池　洋

春夏秋冬　雲は詩人で雲は画家
自分史のところどころに立ち泳ぎ
歳月の重み盆栽から学ぶ
粉飾の見合い写真と決算書
なりたては弱気に見えていた総理

枚方市　前　たもつ

ダンプカー日向ぼこする場所がある
星輝いて亡母は元気でいるらしい
はやり目を妻と娘がとってくれ
生き下手とも生き上手とも言われ生き
癖までが似てくるまでの五十年

枚方市　森本節子

お施餓鬼の団扇でおすしさましてる
対岸の鵜殿のヨシ原ヨシを焼く
偉大なるこの惑星に命享け
半世紀たてば地球儀どう変わる
染半纏粋な貝塚秋まつり

枚方市　寺川弘一

照明があたらぬ僕に影が無い
故郷の墓参のために宿を取る
一人旅ドラマも少し期待する
握手した中に冷たい掌がひとり
じゃんけんで運命分けて悔いはなし

枚方市　鈴木政子

カリスマが舞妓の髪を結い上げる
医師の前血圧計が急上昇
臨界事故ポチもデートに行かれない
内服薬数えてそわそわ旅支度
開け締めのチェック忘れ物五度六度

枚方市　二宮山久

秋まさに満喫あじわう栗ひろい
運動会若き体でなきを知る
持病もつおいらにうまい秋の酒
神無月感じはじめた世紀末
幸せに暮らす夫婦の秋夜長

茨木市　堀良江

よちよちと坊やリュックの荷はおしめ
病名は知らせぬと決め重荷負う
何もかも着がえて母の市場行き
軽やかに返事と腰が飛んでくる
台風接近こおろぎがおとなしい

茨木市　藤井正雄

里帰り幼名を呼ぶ庭の木々
豆ご飯たっぷり秋の風を盛る
まだ負けていないと怒鳴る兄の駒
年金でまだやめられぬ馬を追う
ワンルーム経済支援母が来る

茨木市　井上森生

自分流達者のツボが好きな風呂
古道ウォーク今は昔の蟻になる
臨界を2K(二〇〇〇年問題)も大いなる合図
核の危機賽の河原に石を積む
掛け声は控えて強く綱を引く

高槻市　傍島克治

討入りがすめば師走もあわただし
人の目が気にもなります七転び
フレデイの影見え隠れ落葉踏む
年頭の誓い越年さすと決め
鏡見ぬ日が多くなり老けてゆく

高槻市　井上照子

木枯しも春早よ来いと笛を吹く
シクラメン　ポインセチアの窓飾り
夏なれば冬　冬なれば夏がよし
ベストセラー次々積んでよく眠り
絶食の検査OK生きるんだ

高槻市　川島諷云児

一喝がほしくて父の樹をゆする
他人ごとなのに許せぬ血が騒ぐ
慶弔の時だけ出逢う薄い縁
焦点がずれないように眼鏡拭く
温泉で余命洗濯して帰る

寝屋川市　高田博泉

説教を聞いた煙草に火がつかぬ
喪明けから話題の人も消えてゆき
一輪の花に男が目を細め
入院をしてから運が向いて来る
能弁になったら嘘もよく混じる

寝屋川市　江口度

シクラメンそろそろ妻の誕生日
ジェット機を時計にしてるたこ焼屋
腹へらす為に毎朝歩いてる
朝ドラの景確かめに来た明日香
用意などするから腹が立つのです

寝屋川市　森茜

台風もものかは女の子が生まれ
ブランコがきしむ初恋もきしきし
じっと待つ盲導犬に目礼する
なかよしの雑木林が流される
しくじりは小数点の点の位置

寝屋川市　岸野あやめ

津軽三味聴いて帰って大根汁
友急死顔見合わせる風の中
クリスマスこのシャンパンは嘘っぽい
せめて花買おうか今日から七十五
思い出も宝ものだと言えますか

寝屋川市　堀江光子

虫を聞く胸に流れる月日あり
この町に年毎に減る虫の声
よろしゅうに言うてはったと聞く見舞
回想のひととき自己を甘やかし
どうしたと父の返事の温かし

寝屋川市　冨山ルイ子

淋しさがつのる兄つぎつぎと欠け
逆縁が二人　老母には辛いこと
亡父の墓参り次兄の墓参り
心からの慰めこころ癒やされる
何時までも胸中を吹きすさぶ風

寝屋川市　籠島恵子

コスモスは永住権を獲得す
エンピツの先で遊んでいるわたし
友人の恋を肴にティータイム
カギカッコ明日は外れるかも知れぬ
秋の夜半月によばれている至福

寝屋川市　柴田英壬子

躊躇なく席ゆずられるほど老いる
エンターテイメント二時間観てねむる
眼瞼下垂挙筋短縮する施術
老醜と毎日対峙つよくなる
アッサムを蒸すのに遣う砂時計

寝屋川市　酒井勇太朗

釣り書には昼寝特技と書いてない
拒食症病母が食べる熟し柿
ＯＢ会毎週訃報届く鬱
青い目に寿司と日本酒所望され
親父狩り仮面をつけた殺人鬼

寝屋川市　平松かすみ

マイカーのやさしさ巌門千枚田
ドレス着て王妃気分になりました（イナチュウ美術館）
灯台でバンザイしてる上天気（禄剛崎）
漁火に誘惑されて永見の宿
岩風呂へ赤い鼻緒の下駄はいて

寝屋川市　坂上高栄

介護法未知の怖さで五里霧中
少子化は均等法の遺産かも
彼岸花ワッと燃え立つ白己主張
熟年の磨きをかけるお人柄
臨界事故被爆国家の名が廃る

寝屋川市　太田　とし子

かみしもを着たように蛙立ち姿
音のない世界で目玉むいている
恐ろしい空気を吸うている文化
暴風雨いかにも日本狭い国
寺の鐘きいてはしゃいだことがない

寝屋川市　北岡　波留吉

法話聞き心機一転ボランティア
スポーツで心身鍛えボランティア
定年で身軽になってボランティア
被災地へ天使のようなボランティア
震災地の其の後気になるボランティア

豊中市　田中　正坊

楽しもうボクは高齢新人類
0デーと決めて一日なにもせず
音痴でも雨のブルース歌えます
原稿紙買うとファイトが湧いてくる
ホームレス寒山拾得かも知れぬ

豊中市　安藤　寿美子

どんぐりをこぼして樫は目をつぶる
もうそろそろ堪忍袋の緒を切るぞ
ネギ刻む今を大事に生きている
玉三郎よかったですよお月様
雑巾がけバケツの汚名そそごうか

豊中市　井上　直次

わが心見透かされたかプレゼント
詰めすぎて脳の検索乱れがち
ペアルック男の顔がないと爺
ゴキブリを叩く顔とは思えない
朝の節夕べに変えて生きのびる

豊中市　岸田　知香子

自営業傘寿まだまだペダル踏む
缶ビール探すトイレで乗りおくれ
ちゃりんこで八十路記念のスニーカー
アスファルトはじけ草の芽たくましく
週末の野球勝ち負けはずむ夕

豊中市　滝北　博史

まだ夏が同居している秋彼岸
親孝行何もせぬ子もベターかも
歯が抜けておはぎ食えないのも地獄
中秋の月は地球を見たくない
紫のメキシコセイジ好きな妻

豊中市　湯浅　馬洗

シンプルライフ槍玉トップわが蔵書
片隅にあって役立つ広辞苑
ケイタイ持たせ妻にんまりと猫に鈴
闇に光その先見えぬ誘蛾灯
スポーツ欄拡げてぼやく虎ファン

池田市　栗田久子

あったとは知らぬルールで裁かれる
福祉税貧しいわたしからも取る
聞かなんだことにしますよその話
カタカナ語もとの意味から脱皮する
山茶花の一輪咲いて音も無し

池田市　藤井計光

秋の水昔話を連れてくる
癌告知息を殺して言葉選る
県警はトカゲの尻尾切りそこね
ローヒールに代えて気遣うマタニティー
再会で言葉はいらぬ生みの母

池田市　岡本吉太郎

ルールとはひとり歩きをして困る
何事も喜びに変え長生きす
我が人生浮き草のよう楽しかり
我が人生羅針盤無しで突っ走る
生涯を一筋の道歩み行く

箕面市　椎江清芳

長旅へ今踏み出した呱々の声
グラス底残り少ない夢が揺れ
慰謝料で見せる女の粘り腰
五分五分の頭で夫婦仲がよい
伝統の味細腕でよく支え

箕面市　岩津ようじ

阪神ファンの息子 中日ファンの孫
こんな美女 生理用品コマーシャル
男運悪し美しすぎる人
恙なく仕事も減って酒も減る
はんなりと悲しお軽の京言葉

箕面市　出口セツ子

子の涙黙って聞いて抱き締める
幻聴か軍歌に聞えてくる国歌
おかしいな笑顔が作れないピエロ
起承転結 結が見えないから生きる
透明になるまで月とする対話

大阪府　籾山隆盛

行く年に感謝来る年にも感謝
安らぎをつかみて候秋遍路
ロダン作居眠りをする人だった
子の数へ五等分した父の愛
ハローワークに老若男女席がなし

大阪府　米澤俶子

老いてなお耳は確かな調律師
激論にいつか本筋外れてる
親の意見きかぬ息子のドナーカード
真相を知って約束反故にする
観音さま美男かずらが赤いです

神戸市　中村ゆきを

大あくびすとんと肩の力抜け
雪晴れや伯母も棺の人となり
棚卸し放ったらかして逢いに行き
一条のひかりのなかを君と居る
見てござる天の彼方の御目から

神戸市　山口美穂

十人十色頑固それぞれ友も老い
いい歳を重ねたいねと紅をひく
人災天災落ち着けるのは浄土かな
四季のない花屋も菊の香り満つ
犬よ私と一緒にしようダイエット

神戸市　木村貴代子

自慢する何もないけど足りている
インフレが来るよと高いコート買う
鉛筆はすたれシャーペン ボールペン
請求書親子でちがう電話観
子や孫につけを回して安楽に

神戸市　池田善守

泣き虫と言われた息子子を叱る
思い出を誘う亡父のベルトしめ
本人の気付かぬクセはおそろしい
遠くから口で仕事をする女房
古希となり他人のよいとこばかりほめ

尼崎市　春城武庫坊

男の胸に広くひろがる秋がある
二合徳利がことを裏からみなしゃべる
しまなみの橋はみんなで歩く道
海に生れ砂漠で咲いた郁夫の絵（平山郁夫美術館）
大山祇の機嫌そこねて雨に遭い（大三島）

尼崎市　春城年代

こんな時支え合ってる梯子だな
地震からの乱雑さ立ち上がれない
古家と命を或る日競わせる
だんまりで閉じこめておく愚痴の数
秋風やひゅるひゅる胸の笛が鳴る

尼崎市　長浜澄子

星空と積もる話をしています
アボリジニの笛去るものは追わぬ主義
独り立ちせよと言うのか彼岸花
夢ゆめユメ地下道のミュージシャン
へんてこな菓子だけ残り三次会

尼崎市　田辺鹿太

ルールなどないが上座に父が居る
粋がってみてもやっぱり影は影
冤罪に泣く蜂の巣が軒にある
被写体の妻が美人に見えてきた
さっと来てわっと泣くのも芸の内

尼崎市　的場十四郎

子育ての母の振子はとまらない
切札につかう笑顔をもち歩く
三世代顔がそろってバーベキュー
電話口下げる頭に嘘はない
秋皿にグルメ王者の味を盛る

芦屋市　黒田能子

一人でいても二人で居ても秋の風
城守る大きな靴を光らせる
似たことをするのは嫌いシャボン玉
似ていないところもあるがフィーリング
栗むきながら語り部となるふたり

伊丹市　山崎君子

歯科予約メロディー流れる午後三時
友に逢うただそれだけのまつり笛
夏戻るなつ子を叱る秋ざくら
自慢する私のバラに刺はない
三連休蟻せかせかと冬支度

伊丹市　小熊江美

振りむけばお人違いの顔だった
価値観が同じ友で長続き
迷うたら里があるよと母の文
一匹のゴキブリに老母悲鳴揚げ
コスモスの駅華やいだ旅気分

西宮市　門谷たず子

箸枕倖せごっこ嗤えるか
誰とでも気軽に話す紙コップ
おぼろ月だんだんうとくなる恋か
愛はみな過去形となる茜雲
老いの苦を母は何にも言わず逝き

西宮市　西口いわる

曼珠沙華未来を指しているような
ぽっかりと雲よわたしは病んでいる
神の森さあカラス達サミットだ
ピエロだと気がついたのは後のこと
ライバルのとても瀟洒な果し状

西宮市　奥田みつ子

秋風の匂いに遠い日がよぎる
孫自慢硬骨漢も他愛なし
人を刺す言葉ばかりが胃に溜まる
何もせぬ一日だった木槿落つ
付き合いはよいが時々顔がない

西宮市　山本義子

足して割ると姉妹はみんないい子なり
露天風呂に街のあくたを捨てて　星
棘のないバラ生きがいを無くさぬか
街中の四季は和菓子に教えられ
赤面癖でこころならずも敗けている

西宮市　亀岡哲子

旅立ちの朝のメロンが熟れている
軽井沢夫人と話すハーブティー
おい獏よ夢を返せと追いかける
気くばりが過ぎて反省酔芙蓉
仮設撤去子等へ戻ったすべり台

西宮市　牧渕富喜子

やっと父土に帰せば彼岸ばな
納骨の法要終えて後の月
林立の神戸元町募金箱
テレビまた瓦礫と化した街写す
おまつりをまた見送った神無月

西宮市　菊池トミヱ

糠床の自慢の茄子で酌むお酒
笹百合は雑草の中に輝いて
コスモスの秋をたずねて遠回り
住む人のぬくもりのある狭い路地
恵まれて居ますと言うて愚痴こぼし

西宮市　秋元てる

尊厳死カード携え入院す
手を出せぬ事が次々草を抜く
大差ない事は嫁御の指示通り
我慢強くなったが少うし意地悪に
見えて居て歩けば遠い生家の灯

西宮市　井上信子

電話口よく似た声はもう大人
秋風に浮かれこおろぎ家の中
几帳面の評価くずれゆく日本
秋が来てスポーツシューズ忙しい
秋風に夏のまんまの生活ぶり

西宮市　井上松煙

常日頃尊敬をしてどこか似る
立ちばなし話したがりと聞きたがり
母と娘の趣味をあわせて茶の話
欠席にときどき嘘の言い訳し
秋風に三界流転の夢をみる

西宮市　緒方美津子

大家族流されがちに生きた母
急ぐまい下り坂とて花はある
地下街は入りたくなる出たくなる
リストラの身の重たさを知るベンチ
デパートのおせちは晦日には飲めぬ

西宮市　長谷川淳

賞味期限タライ回しのうちに切れ
世話焼きはうるさがられてるを知らず
交差点赤で渡って得意顔
犬よりもあなたは芸が無さ過ぎる
今日は傘持っている雨降って欲し

西宮市　刈田泰司

こんな日もわたしを刻む砂時計
人柄を大切にする父の酒
泣き虫の私を泣かす良い知らせ
鈴虫に何を楯突くくつわ虫
秋風が長い話をして帰る

三田市　北野哲男

しまいおくれた風鈴と虫が鳴く
じっと佇つ食う手段なり鷺早し
招き猫バイバイしてるかも知れぬ
露座仏の要るや要らぬの手つきなり
朝夕の新聞を見てぼやくだけ

宝塚市　嵯峨根保子

清冽に生きた姿で子持ちあゆ
サイレイ　サイリョウ　鞍馬は竹の火のまつり
撫子のかご片隅がよく似合う
有髪べに引けばと思う尼にあい
火葬場へ来てくれそうな友がいる

宝塚市　黒台伊佐武

秋深し遊びの恋の幕引きか
隙間風心の秋に入り込み
陶然として落鮎に舌鼓
本気なら口説き落して連れて来い
子や孫にたかられてよし賀の祝い

川西市　松本ただし

善悪の境界線に雲がある
進軍ラッパ背中の方で鳴っている
疲れたと口にしないが旨い水
おみくじに祈り託した松の枝
小波が怒涛に変わる裏表

加古川市　吐田公一

志　果たせぬままに老いてゆき
兎小屋上下左右が壁一重
トンボリの灯がなつかしい都落ち
古稀迎えはじめてわかる亡父の古稀
働ける場所あり古稀の坂楽し

相生市　中塚礎石

ありがとう男の籠は豆腐買う
運命線古希になっても気にかかる
職のない首を探している悪魔
つまずいて生きてることを確かめる
どん底の土を溜めてる足の爪

姫路市　古川奮水

体重計朝の機嫌を針が指す
テナントの彩に町並み脱皮する
アドリブで観客沸かす新喜劇
年金で眼鏡を変えて明日が出来
マリッジブルー成田が決断場所になる

刺のないバラなどあろう筈がない
向日葵も雨の降る日は濡れて泣く
厚化粧お地蔵様が美しい
敵の敵　味方と思う浅はかさ
晩成を期して小才を争わぬ

兵庫県　大谷幸次郎

平凡にこと無く過ぎた今日が去る
あの時は気付かずにいた愛の鞭
川柳のおかげ楽しい旅ができ
手の震え馴染の理髪店閉じる
爽秋へ残暑ときどき戻る日も

岡山市　井上柳五郎

あたたかい夢を無利子で子に分ける
亭主関白許し続けて水になる
最後には血縁と言う窓が開く
地図にない湖が女のてのひらに
子を捨てた日を忘れないカレンダー

倉敷市　小野克枝

黄昏の老体淋し洗い駒
手に享けた情けが重い枷となり
追憶にずしんと重い暗い過去
柳界も已むなし提携社の強化
肩組んで寄せる老化の防波堤

倉敷市　田辺灸六

揉め事が飯より好きな村雀
緩急の間合も知っている茶筅
老友の舌には死語が住んでいる
美容師の櫛から盗むプロの技
良薬に出合って虹の出たベッド

倉敷市　井上富子

先細る明日へ思慮が枯れてゆく
ごめんネの殺し文句にまた負ける
空爆の話孫達漫画めき
あの雲にのぼれば亡夫のもとに行く
塩鯖の目玉にほれて身受けする

岡山県　富坂志重

生々流転石もまあるくなって来た
歳月や似た者同士の数え歌
夕あかね過去は絵になる詩になる
是々非々を正して沁みる四面楚歌
まっ白い地図を片手に始発駅

岡山県　矢内寿恵子

結び目の堅さは愛かまた刑か
寡婦でいる想いの厚さ悲の重さ
昔語りのつづきを秘めし花栞
夢を追う素足のままの昨日今日
果てしない想いを抱いて崖っぷち

岡山県　山本玉恵

岡山県　大石あすなろ

ライバルの内緒へ耳がしのび足
時々は軋む日もある老父の貨車
肩書きに遊び上手と書いておく
陽は昇る昨日の謎は解けぬまま
どの彩も秋の夕陽にかなうまい

岡山県　小林妻子

遠花火のように見ているクーデター
頷いて男同士の歩が揃う
草刈鎌もう手に余るなと思う
どの子にも母の重石が利いている
漬物石老母が置いてた通りです

岡山県　二宗吟平

長老と言うて少うし酔うている
寿限無　限無　近頃吟の手が上がり
二十歳違う若さと敬老会
町の壇　先住民の跡と聞く
少子化の未来気になる住居跡

岡山県　福原辰江

初めての我が子抱く手の力みよう
栄冠へ長いなあがい道だった
煽てられつい吃水線を見失う
極楽がそこに見えてる楽天家
よろこびを編み込むおんな花むしろ
土壇場で心の助手となる妻で
想い出は煙にむせて焚いた風呂
近道は父の地図に書いてない
泣き笑い心育む家族いる
喜びも悲しみも知る老夫婦

岡山県　福原悦子

行き先は妻に任せた旅暦
歯科医師と冗談を言う保険の歯
北鮮の匂いを運ぶ佐渡の風
お互いの呆けを夫婦で笑い合い
病院に来れば何時もの人に逢う

広島市　森田文

解るほどに臨界事故の恐ろしさ
コスモスや豪雨が去って咲きほこる
運動会まわりの店は暇らしい
時として停車もあるよ長い道
夕刊のくる頃ぶらり御曹子

呉市　槇田英詩

スケジュール組む太陽と雨雲と
可笑しさを隠し傘売る雨女
わたくしの余生は神の意のままに
夫婦して頂くメロン格別だ
招かざる客にも同じお献立

竹原市　岩本笑子

走り続けて人情という落し物
父よ父よと土砂降りの中歩く
傘の咲く町にも救急車のしきり
大中小のビールが待っている夕餉
彼岸花運動会が無事に済み

竹原市　森井菁居

ふるさとに僕の安楽椅子がある
人材を生かせとセミナーが言った
吹き替えの洋画へ眠くなる僕で
キャンペーン中とかやあんまり安くなし
五右衛門風呂と冬の記憶に祖父が棲む

竹原市　小島蘭幸

秋の蚊の羽音よ一機二機と来る
頭から煙を吐いていた父よ
マイカーが欲しくてハガキ書いている
美人姉妹と世間が言ったことはない
お寺さんと饅頭ひとつずつ食べた

竹原市　石原淑子

良い子だと鋳型をはめた賢母なり
世紀末人災天災核恐怖
落葉踏み愛の讃歌にふるえます
食洗も風呂も自動になりました
慈しむ今一刻を五七五

竹原市　古谷節夫

かくし味じっくり煮込み夫婦鍋
宴終り祭りの役目やっと済み
真ん中に笑い上戸が居て酒場
無党派がきっと何時かは攻めて出る
ボロボロの辞書に発破を掛けられる

竹原市　三宅不朽

鎌を研ぐ水美しく村が痩せ
水清きここら地を匍う鐘の音
灯明のほかはいろなき少女の死
酒呷る男よ下戸の眼に甘し
富士の藍ぼけてもきっと藍を溶く

竹原市　時広一路

お似合いを盛られて皿がほっとする
掛け心地良かった椅子はさて幾つ
かがみこみ黒子拍手を背で聞く
二度と来ぬ今日を小人閑居する
言いかけてこれも差別か言葉選る

広島県　藤解静風

99年9月9日のモーニング
「ぽっぽや」も「すずらん」駅もある昔
紙バッグやわい男が多すぎる
生きてゆく業をいくつもみた寡母
おしっこの出がわるくなり秋がくる

宇部市　平田実男

定年はないが退職金もない
ついて来るかいと言ってるのは女
骨までは愛せないけど共白髪
マニュアルに裏と表がある不思議
主義主張より数合わせ数合わせ

美祢市　安平次弘道

告白をするには酒がちと足らぬ
結核の亡父が聖書を持っていた
恋かしらガラスの靴をはきたがる
核心を突くと逃げ足早くなる
大皿に盛ってあるのは妻の愚痴

下関市　石川侃流洞

演歌より民謡年代古い父
妻の留守めざしを猫と分けて飲む
悪友の一升妻は気に入らず
終着駅エッチな本は置き忘れ
回生へ香具師の黒焼までためし

柳井市　弘津柳慶

先生もあだ名がついていたんだよ
老人会懐かし歌が次々と
旅先から孫が土産を送って来
共稼ぎ今日は僕が炊事する
十七回忌妻の好物仏壇へ

鳥取市　福田登美

自尊心冷めて見直す歳になる
心の彩他人の視線に磨かれる
明日のこと解らぬままに爪を切る
寛いだ嫁の素顔が母になる
振り向かぬ意地をほんとは悔いている

鳥取市　杉本孝男

老骨の苦言じんわり効いてきた
原点に還ると先もよく見える
甘い汁覚えてからは汗かかぬ
背かれた親父ぐらぐら夜も寝れぬ
仰向けば愚痴も怒りも呑む青さ

鳥取市　谷口次男

若者よ死語にすまいぞ半分コ
町長がどじょうすくいを披露する
消しゴムが失業するぞワープロ君
ありがとう恩師がむせぶ米寿かな
芸のない父が唸った高砂や

鳥取市　植田一京

遊ぶのも仕事も好きで元気です
乱筆の父の手紙に愛あふれ
過去形にしましょう少し疲れたな
胸のうち風と語っている枯野
夢芝居醒めないように舞っている

鳥取市　倉益一瑶

自己暗示かけて脱皮をしています
リハーサル通りに花は開かない
バラ百本届いて悩み深くなり
メールでの出合いにぬくいものがない
目に肥やしして来る秋の美術館

鳥取市　近藤佳子

貧しいが花は四季さく住居です
約束の日記焼いたよとり急ぎ
威張ってもやがて楢山ゆきが待つ
救急車近くでとまり眠れない
白無垢に愛を山盛り嫁ぎます

鳥取市　徳田ひろこ

太陽と一緒に夢が移動する
子等みんな真ん中におく森になる
存分にマリオネットの晴れ舞台
みんな眠って梟は輝くよ
翔べるのは家の後押しだと思う

鳥取市　美田旋風

妥協して存在感がまた消える
親が来てくれない子らの運動会
衣食足り住を一生追いかける
民が代になぜ君が代にこだわるの
やがて来る最終場所の墓掃除

鳥取市　岸本宏章

あれこれと聞かれて記事は五六行
ボトル一本人質に置く僕の城
落葉焚き昔ばなしになってきた
学校に近い子ばかり遅刻する
長生きを叱られそうな介護法

鳥取市　岸本孝子

若者が光ると街が光りだす
日本の真ん中辺が病んでいる
ホームレス家より自由ほしいのか
気がつけば六十路をころげ落ちていた
法話聞く耳をもらった年の功

鳥取市　上田宣子

俎板に載せてもらってありがとう
傍らに六尺棒が居てくれる
窓を射抜いて机に月が落ちている
手のひらに違う重さとなるレモン
バンジージャンプ百回も竹とんぼ

鳥取市　西村黙光

芋蔓が何より楽し畑作り
実らない豆が明かした不勉強
義理固く蒔いた菜種が礼を言う
天気予報畑時々顔傾げ
汗流す月を眺めてしまい風呂

鳥取市　冨山　檳榔樹

たどり来た道を眺めて老い綴る
落葉舞い鳴く木枯しに詩もらう
明日咲く花の笑顔を夢に見る
湯煙に映える乙女のシルエット
日の丸が日本を忘れもめている

鳥取市　岩原　喬水

皺の肌それでも高い化粧する
この財布豊かさあった時もある
煩悩は老いず女の罠に落ち
しみじみと教えてくれた人の道
俄雨夫婦喧嘩は小休止

鳥取市　両川　洋々

いま一度勇気をくれたのは虹か
難民の声が神には届かない
野良猫の浮気を人が笑えるか
神へ向く僕を神様気が付かぬ
散骨はもしもし私いやですよ

鳥取市　坂田　和歌子

明日ひらく薄よ夢は無限なり
鮮血の下には白い白い骨
微笑みが棺の中の花に溶け
彼岸花描いて黒猫かき添える
痛くない足を引きずる友の前

鳥取市　春木　圭一郎

うちの犬ミーコという名つけている
うちの犬飼い主に似ず温和です
雑種だがうちの犬には情がある
一食で健康体のうちの犬
来客の善し悪し知らすうちの犬

鳥取市　前田　一枝

久し振り通夜にはむかぬ顔してる
良くわらう嫁で茶の間あかるくする
靴ぬげば砂丘もホッともえてくる
山間のかねつき忘れひるさがり
こたつにはみかんの山が良く似合う

倉吉市　淡路　ゆり子

天界へ届けと祈るけむり一筋
老母を起そう粥もぼつぼつ煮えて来た
手押し車老母の背中に鳩止まる
父の側父の良いとこ見えて来る
パンの匂いに素通り出来ぬダイエット

倉吉市　山本　玲子

思い切り捨てれば広いワンルーム
ラッキーだ今日は三段飛びしよう
金太郎飴いま風ならばクローンだ
本棚で深い眠りのベストセラー
北風に煽られ山は色かえる

倉吉市　野口節子

しきたりを破って伸びる竹の節
三枝の礼知らぬ世代が伸びて来た
善人を貫き通す肩のこり
童顔のまんまで古希の門くぐる
不整脈　死は突然に訪れる

倉吉市　松本よしえ

らくだの瞳住めばみやこと言うけれど
風紋はどこから来たの風の詩
移り気な蝶がびっしり卵産む
公園のぶらんこやがて冬になる
ビール券と一緒に子猫もらわれる

倉吉市　米田幸子

夢に出る住所は幼いときのまま
女房が素直になると物足りぬ
貫いた愛にときどき蹴躓く
冷めた目で夫婦喧嘩を子が見てる
渋ちんが特に味にはやかましい

倉吉市　最上和枝

嵐呼ぶ気配素早く身をかわす
船頭が多くまごつく羅針盤
大臣を産んだ里です橋架かる
村外れ兵を送った橋も朽ち
雲の下喜怒哀楽が渦を巻く

米子市　白根ふみ

明け方の露ほろほろと萩になる
山門を出てから誹謗などできぬ
みやげ話に留守居の苦労言いそびれ
今朝を掃くのちの落葉に言いきかす
蟋蟀がなかなくなった死の納戸

米子市　茂理高代

浮草は何を考え揺れている
この花が枯れてもならず愛そそぐ
この花が幸せならば土になる
窓のない部屋を自力で開けて見る
白い雲心移して叫びたい

米子市　木村富美子

孫たちの輝く姿見てからに
あの雀姿をかえたあの子かも
白だんご木葉に盛って鳥の墓
罪深く神の仕置きがまだ続く
住所氏名いつわり書いた事がない

米子市　鷲見正子

買う方が店員へ言うすみません
難しい話は止そうロゼワイン
お父さんがこわくない子が増えて来る
夫婦の会話狸と狐ほど違う
月昇り庭にオーケストラが来る

米子市　澤田千春

北の旅受けた情けを掌のひらに
近すぎて気づかぬ山の美しさ
折鶴に祈りを吹けば翔ぶだろう
捨てられぬクラスメートの住所録
コスモスとしばらく踊る青い空

米子市　光井玲子

恙なくユウユウ育ちますように
マイホーム私と共に老いてくる
旅の道連れ住所氏名を交わし合う
約束をしっかり包み船出した
胃カメラを通した喉に礼を言う

米子市　林瑞枝

日々安泰忘れかけてた嫁の恩
快活な嫁に救われ生きてきた
クモ膜下癒えたな義姉は優等生
背が曲らないよう仰ぐ青い空
夕映えの渚を親友と手を繋ぎ

米子市　永井三津子

大事より小事に母はよく騒ぎ
満月の下で小さな夢を見る
クラシック亡夫の恋しき秋夜長
秋の趣もみじ数枚風呂にいれ
飛んで弾けて鮎になりたい思慕ひとつ

米子市　野坂なみ

近い輪で一人の老姉を支え合う
わたしにも迷い子札をつけておく
野火かまど遠いけむりの温かさ
退役の後の芝居が揉めている
青い鳥わたしと共に消えてゆく

米子市　神庭詩郎

木枯らしが吹いて年齢感じてる
自分では生きて行けない水中花
認定が見る目で違う要介護
聞くだけは聞いて意見はちゃんと述べ
風紋を変えて砂丘に冬が来る

米子市　青戸田鶴

セビリアのジャカランタの花忘れまじ
伸び縮みして新風を受け入れる
リストラ地獄かつて企業の鬼だった
大地震おこらぬように仏さま
意のままにならぬ帽子をもて余す

米子市　本吉宗光

紅葉山カメラ向ければ亡妻の顔
洋裁にひと筋妻の五十年
あと十年余生と善をかみしめる
再婚もたまに考え九年過ぎ
力こそ政治なりとて危ういな

米子市　中井ゆき

あたたかいものが欲しくて北へむく
兄ねむる金沢雪の早いこと
私と蟻の一日くらべたら
狂い咲き花だからこそはかなげに
背のびして恋の一つが消えました

米子市　門脇晶子

子育てを終って気づく秋の彩
朝ぐもり靴もうかない顔をする
死ぬ日まで希望の花は咲いている
体の中に北指す時計置いている
先祖代々変らぬ場所に猫と住む

米子市　木村春枝

久びさに針を持つ手がとまらない
幾度の傷を包んで母の愛
病室に退屈な夜がまだつづく
ストレスの塊風も吹き荒れる
北からの便り淋しい色で来る

鳥取県　岩崎みさ江

お終いの頁は伏せたままで生き
かまきりの悟り開いた貌で座す
萩すすき　よくぞ日本に生れける
なんとなく座りたくなる木のベンチ
青空に向かう心が透けるまで

鳥取県　奥谷彩子

満身創痍情けに触れていやされる
新世紀跳ぶ余力ならまだ少し
荒れた子に母の港は風いで待ち
冬帽子去年の鬱を溜めたまま
釣り棚に昨日の私ぶら下げる

鳥取県　羽津川公乃

アナウンサーの声心地よい深夜二時
早寝早起きこれは加齢のリズムかな
笑い声泣き声カレー煮る匂い
親の目にそれでも光る子の未来
日の丸も君が代も好き変ですか

鳥取県　村上信子

銭湯で嫁入り話実を結び
視力検査からだが前に前に出る
孫の嫁エプロン似合う娘を探す
秋刀魚焼く旬を先どりした気分
勝ちばかり求める顔が四角張る

鳥取県　黒田くに子

ネクタイは卒業肩のこり消える
阿呆な事言うて漫才良く稼ぐ
憎めない顔で小遣いせびられる
人相はともかく家の息子です
たそがれたわたしを誰もふり向かぬ

鳥取県　田村きみ子

誇ることなんにもないが同居です
いとしいと思って洗う夏帽子
思いきり鳴いたのかしら蟬の恋
ささやかな趣味です菊を売りに出す
くるくると傘をまわして母を待つ

鳥取県　土橋螢

ああと起きああと眠りにつくところ
半纏に包んだ石鹸の匂い
港から消えたおんなと夕千鳥
笑いたく候　意地わるお爺さん
臭が騒ぐその恋ちょっと待て

鳥取県　新家完司

囀りに目覚めぼんやり鳥気分
秋の光に秋の体を包ませる
茄子がある人参がある妻がいる
妻の実家の妻の名儀の家に住む
夢はもう生まれて来ない現住所

鳥取県　原みさを

煮ても焼いても食えぬ男を鳥葬に
休耕田ひとめぐりして羽抜鳥
善人ばかり続き家系の無味無臭
三枚目の笑いに深い影がある
それからを影があれこれ指図する

鳥取県　さえきやえ

子らを待つ日々

けんたごんたが明るい話もってくる
落ちぐりをみんな二人に拾わせる
近頃は漢字教えてくれという
あせらない薬をのんでこの子らと
畑をすき終えて笑った栗ごはん

鳥取県　乾喜与志

少子国ながら八人孫ひ孫
えんぴつを削る爺ちゃん肥後守
リストラに柵田作りや蕎麦つくり
首都圏の黒い煙が大嫌い
嫁さんの郷が近くて届く花

鳥取県　土橋睦子

がらくたに貧乏神が紛れこむ
先代の住家とおもう曼珠沙華
原点にもどり貫くことを知る
借金も骨も貫って後を継ぐ
粟ごはんのんのん様も召し上がれ

鳥取県　橋本多哥由

言い訳は嘘一ついれうまくなる
恋人と愛を語れば風止まぬ
喜びも嘆きも憂さも詩になる
頂点に立って己を見失う
ゴミ置場やはり豊かな里にいる

鳥取県　石谷　美恵子

シナリオを揃えやがてを待っている
青い空どこにも嘘が隠せない
超音波肚の黒さは見抜けない
笑い袋の底へ沈めている涙
住所録ひとりを消して冬となり

鳥取県　西原　艶子

山峡の道端に立つ鬼の像（大江山探訪）
角と牙取れば普通の人に見え
さまざまな鬼さまざまな味がある
平成の鬼が紙面を賑わす
鬼という者に民話の里で会う

鳥取県　林　露杖

朝の窓疾風の如く鬼やんま
猫の眼になり魚屋の店覗く
老い達者エンゲル系数上を向く
墓地買った扨てその次を急がねば
肝心なとこで辻褄合わぬ夢

鳥取県　垰　寛子

一打毎笑いはじけて秋のどか（グランドゴルフ　2句）
距離感は無用余生の球遊び
失せものに刻うばわれて秋深む
村史編む辞書に亡父の日記解く
亡父を読む草書人生半生記

鳥取県　上田　俊路

揺れる台湾KDDがつながらず
あの懐かしい日月潭が震源地
ニュース速報　地震の島に住む不安
震動も煙も立てず被ばく事故
笑おうと泣こうと世紀末近い

鳥取県　西川　和子

ばあちゃんの煽て通用しなくなり
繕ってまだしばらくは暮す家
あの人に一番近い席にする
隣から何かを焼いている煙
年賀状住所録からまた消える

鳥取県　乾　隆風

氏素性言わぬどんぐり仲間なり
両輪があってポンコツまだ動く
住職の衣に蠅の罪あらず
弔いのけむり他人事と思えず
白鳥の仲間ようこそいらっしゃい

鳥取県　吉田　孔美子

新しい味に飛びつくおばあさん
捨てるのに洗って畳むその姿勢
家族には内緒で財布受取りに
巨峰キウイ亡父と一緒に枯れちゃった
果実酒は年代順に欠伸している

鳥取県　太田幸枝

恥かいて恥と思わぬ年となり
つばくろが愛の巣造り娘も嫁ぐ
逢いに行く私に影がついて来る
愛情に包まれ不足ばかり言う
線香のけむりが部屋を和ませる

鳥取県　権代康女

望郷の心ゆさぶる梨の味
別天地だったにビルの影になり
故郷の砂丘は梨もカニも盛る
三党で太い絆の帆をあげる
人情のある人犬も猫も知る

鳥取県　石尾かつ乃

見解の違いあっさり負けておく
秋の句を飾る誰かを待つように
良心の呵責か寝言まで洩らす
嬉しくて今日の日記は花マーク
念仏か小言か老母の独り言

鳥取県　近藤春恵

むずかしい話は置いてお茶にする
出来心からエリートの道ふみはずす
良心と出来心とが葛藤し
とっておきの話大風呂敷になる
しばらくは会えぬ貴方と酒を酌む

鳥取県　津村八重子

山彦の応えに今日もはげまされ
いつくしむ心をさとる幼孫
小銭でも財布ふくれりゃ気も温い
あたたかく心をつなぐソバの町
雨音も淋しく亡夫の忌がめぐり

鳥取県　山本正光

酒二合飲めて仲間にしてもらう
幸福な心でいつも明日がある
何事も願っていますと陛下様
缶ビールカパッと開けた飲むだけだ
天たかし何かはあろう山に入る

鳥取県　國森武子

衣ずれのしない着物で茶をたてる
坂のない人生なしと独り言
思い出は山ほど胸に年よせる
頭かき恥を覚えた孫いとし
白髪でもまだいささかの「ほこり」持ち

鳥取県　幸家単車

海底に沈んだ船に亡父眠る
野次馬が傍聴席を占めて居る
追加した料理半分無駄になる
晴姿遺影の父に見て貰う
サービスで一か八かの勝負する

松江市　舟木与根一

反射神経老いたりと知る流れ星
度の合わぬ眼鏡となりて好々爺
豊作を是とし柘榴の高笑い
薬漬けなれども二十一世紀
犬の糞済むまで待っている短気

松江市　川本畔

白萩がこぼれるほどの笑み見せぬ
ペン立てのペンが立派に怒っている
尊厳に近い弔問客の列
濁声に心の箱がこわされる
骨董品好きにはなれぬ瘤がある

松江市　佐野木みえ

あの日から少し無口になる人形
人形の麦藁帽子よさようなら
椿の実楽しい出合い待っている
嬉しくて真紅のバラを生けてみる
新家庭記念樹庭に植えました

松江市　安食友子

たわ言が不快指数を煽ってる
モヒカン刈り花火をよそに弾んでる
靴と鞄がマッチしているリズミック
年下のエリートに添っている鞄
やっとこさ終えた学資へ自画自賛

出雲市　小白金房子

ご祝儀の墨まろやかな筆の跡
休耕田荒れて先祖の声がする
彼岸花咲いて人恋う土手の風
残照と戻る農婦の一輪車
金利価値　牛暴落の世をなげく

出雲市　板垣草丘

なす焼くと不思議な程に水が出る
どんぐりが椀に座ったまま育ち
弁当を洗う時間がある職場
飛んで出た妻が集団演技中
新聞を読んで二度寝をしています

出雲市　竹治ちかし

ほどほどの器に小さな幸を盛る
ルアー釣り女房が上手だと知らず
一年余あるのに騒ぐ新世紀
今一度タペストリーに生きる古布
手術する人は知らない承諾書

出雲市　吉岡きみえ

仏さま新米炊けましたどうぞ
部屋中の花が息する水を替え
こころには鬼も住ませて婆ひとり
ひょっとこのお面外せば修羅がある
追い風が逢いたいこころつのらせる

出雲市　久谷まこと

四捨五入したけどやはり捨てられぬ
ちぐはぐな意見束ねて来た夫婦
意地通し北風寒い下り坂
耳立ててひそひそ話聴きたがる
茜雲明日の夢もバラ色に

出雲市　園山多賀子

見はるかす山脈夫にも四季の貌
以心伝心言葉を省く老いふたり
跳ね返る言葉が欲しい葦である
曼珠沙華間抜けの花火音がない
髪型を変えれば挽回出来ますか

出雲市　富田蘭水

黒松は男の意地をしかとみせ
芯のあるコスモス風をうけ流す
読む秋に親鸞道元生きている
台風の凄さは神の怒りかも
ダイエット稔りの秋が手をたたく

出雲市　板垣夢酔

ソロバンは合わず電卓ならピタリ
年金に税とはこれも世の寒さ
スラスラと嘘はたやすく輪をくぐり
貧乏は嫌だが降ってこぬお金
鶏は餌をつついて家の番

出雲市　石倉芙佐子

何時しかに羽をたたんで冬の蝶
初霞どこまで転んでいくつもり
ときめきの後の空しい言葉数
彼岸花に案山子切ないラブコール
吹けば飛ぶ命なれども花芒

出雲市　小玉満江

悲しみが続いて墨絵ばかり画く
錠剤がこぼれて秋の風淋し
お手玉が縁で園児と遊ぶ午後
大時雨去んで犬もほっとする
世話をしてされて仲良し福寿会

出雲市　岸桂子

平凡が良いとしみじみ梅漬ける
峠を越して明るくなって来た余生
諦めることにも慣れたふくらはぎ
控え目に咲けば惹かれる花の彩
子の彩に染まると決めた日の安堵

島根県　伊藤寿美

定退の夫みのもんたにはまってる
喧嘩した夫の肌着干している
元栓をまた確かめる夫と住む
玄関に見知らぬ靴が脱いである
料理番組見て湯豆腐に凝っている

島根県　森　茂美

金動き人と自然が変えられる
虫の音がふっと止ってやりすごす
仰向けの死骸弔う蟬しぐれ
台風一過島の岬に馬肥える
運転手ひとりのバスが来て止まる

島根県　松本文子

静かな雨だともだちは帰って行った
栗の実弾ける何がそんなに嬉しいか
石に字を刻んで人に拝まれる
大阪は優しみんなでおいでやす
バリアフリー花も小鳥もともだちに

島根県　堀江正朗

春を待つ蝶やとんぼの心地して
遊園地ぶらんこ熊さん鹿さんと
秋の陽に手を引かれつつ夢の道
歩み来た道振り返る正座して
水炊きのぐつぐつ煮えて酒うまし

島根県　堀江芳子

ほっとして夫の寝顔の中に幸
満月に窓立ち去れぬ思い出よ
散歩道野菊は汚れ知らぬ色
まめだったか同窓固く手を握る
お茶にするか優しい声で折れてくる

島根県　西村早苗

矢印を破って風に乗ってやる
冷害の苦い思い出割子そば
二人旅このひと好きな雨らしい
逢うまでは確かに浮いた鰯雲
ふところに響く話も秋灯下

島根県　小砂白汀

雪が来る色つきそめしななかまど
またしても団栗たちで船を出し
若い娘の叱言は鳴りもの入りで来る
炎えぬ筈冷えたカマドへななかまど
遠耳へそんな小声で話すなよ

島根県　榊原秀子

欠けてゆく月を惜しんでいる夜毎
白萩がまた咲き出してしのぶ友
久々の和服しとやかそうにする
現実に戻り今朝から草をひく
ひたすらに残り時間をふくらます

香川県　山地マツヱ

じわじわと外濠埋めに来る絆
巣立つ子へ愛の鎖を切り放す
翔べそうな街で方向見失う
故里捨てた覚悟がゆらぐ遠明り
旧姓に戻る女の花ばさみ

香川県　木村あきら

八十五年地球散策して飽きず
霊長の驕り男の戦好き
笹舟を卒寿目指して漕いでゆく
スピードを落とそう人生の曲り角
子育てを終えるとドッと老けてくる

香川県　工藤吟笑

躾なら伸びる芽を摘む事もある
嫁の肩持つ子育てたのは誰だ
孝行を知らない子供育ちくる
幽谷のせせらぎ寂し亡母の声
理だ生者必滅桜散る（平家滅ぶ）

香川県　池内かおり

一目散冷えたビールが呼んでいる
点滴のそばで腰痛よく喋る
人情がある兄嫁のよもぎ餅
ひょいと角曲がって亡父が来るようで
腕立て伏せ一回も出来ません

香川県　川崎ひかり

私だけ祝う私の誕生日
まあまあの処が私の妥協点
人ひとり許せず見てる丸い月
青春を重ね合わせるひばり展
風に散る花にもあった主義主張

香川県　神保坊太郎

雑念を断つ結界に石を置く
どの神がきこし召したか合格し
天網が疎にして漏らすから怖い
ミサイルをひけらかしたら飯になり
いく谷を越えた生命が黄昏れる

松山市　宮尾みのり

先手必勝大事なものを取りこぼし
あくせくは止そうよ細い雨が降る
カラオケに夫唱婦随が生きていた
青い目へ笑顔を返す独り旅
芸の無い人だ同じエピソード

松山市　丹下美津子

庭木切った株へお神酒を二三滴
株を掘る力抜くなと叱られる
一二三　株と相撲を取る夫婦
まだ若い本気で喧嘩する夫婦
古里はもう秋萩に吾亦紅

今治市　越智一水

香を焚いて凡夫ひととき無に返る
深山幽谷ああ黄山は水墨画（中国にて　4句）
蘇州とは史よし風よし柳よし
鐘一つ突き若返る寒山寺
寒山拾得微笑で人生説いている

今治市　野村京子

ドナーカード性善説を信じてる
子を想うひとりよがりのカラスかな
賞味期限切れた男と満月と
底辺にいて底辺の良さを知る
夕焼けのブランコゆらり秋桜

高知市　北川竹萌

青い空自然姿の里帰り
休刊日今朝のリズムはテレビから
台風に龍馬はじっと桂浜
酒供養桂月和歌に憧れる
桐一葉大地打つ音帰郷路次

高知県　赤川菊野

編棒が支えた亡夫の闘病記
追風にのってそのまま行ったきり
一期一会ウイグル族の高い鼻
砂埃舞うブドウ並木の庫車(クチャ)の町
太陽をひとり占めしてラクダの背

高知県　小澤幸泉

ちちろ虫古里消えて老い二人
悲しみのいよいよ深まる秋独り
夫独り置き去りにして妻と娘が
空部屋がまた二つ増え秋深し
夢うつつ気づかず通過新世紀

北九州市　梅田宣司

衣食住淡白になる老い二人
台風の我が儘神も手に負えず
以下同文拍手次第に小さくなる
無灯火に二人乗りして塾帰り
それでよし心の奥へ言いきかせ

唐津市　宗水笑

老病も手加減しない土砂崩れ
神の名が違うと人は憎み合う
ロボットに義理人情を言い聞かす
惚れられた昔話は嘘でよし
変わり者居ってご近所丸くなる

唐津市　仁部四郎

青春の間延び家庭をつくらない
青春の空白デモも知らぬまま
青春のカオスノートを回した日
役名で呼ばれ私も振り向いた
階級で呼び人間を消している

唐津市　山門幸夫

車椅子項の細き老妻を押す
一万一千雲の生態老妻に説き
いたつきの老兵語り部静かなり
テイクオフ訣れの千歳雨だった
紅鮭を捌く漁婦の太い腰

唐津市　山門タミ

老いたりと二人六脚天高く
紅つけてまだ百合の花あこがれる
雲の峰あれは父雲母の雲
親獅子の心わかるか子獅子どの
親も子もさし替えきかぬ絆なり

唐津市　井上勝視

晩酌にアサリのように砂を吐く
旬の味崩れて人の世も乱れ
防犯灯影が前です安堵です
関白は単細胞であるらしい
可も不可もなくてゆっくり除夜の鐘

唐津市　久保正剣

ビーチパラソル濁流と逝く地獄絵図
左遷地の辞令に潮時告げられる
敬老の視野に崩れてゆくモラル
権力とメディアが競う破廉恥度
斎場からダイレクトメールまだ来ない

唐津市　山口高明

壁を這う守宮見つめる寡婦の夜
玉子生むマシン一列餌をつつく
恍惚の恋の奴隷は鞭のした
豆腐一丁買えば二日もある暮し
蠟燭の炎の中に視たあなた

唐津市　樋口輝失

世が世なら嫁にゃ裸は見せはせぬ
歯ぎしりに負けじと隣大鼾
お尻から割込むんだとママ教え
ひと呼吸おいて出した手ひっこめる
古希の宴竹馬の友が待つ屋台

唐津市　田口虹汀

お供日は丁度親父の祥月で
腹の中から聞いて覚えた曳山笠囃子
佐用姫へ登るは止して蕎麦の花
島買うて涼をとるのは主幹の句
舟借りて涼をとるのは私の句

唐津市　市丸晴翠

マンションの屋根は越せないシャボン玉
ネジ一つ落としてからの忘れ癖
乗り切った単身赴任の電話代
共稼ぎ阿吽の息で走り抜き
拍手して私を明日に送り出す

熊本市　永田俊子

上段にメロン序列があるらしい
顔いろを読みなれている古時計
逆さまにバラを干してる下剋上
序　破　急で鳴くつくつくしの恋
露の身につゆけき草がまといつく

うっかりと喋るプライド傷つけて　熊本県　高野宵草

冷えている朝の便座に秋が居た

時間から手錠を受ける腕時計

長寿祈願ポックリ寺もセットして

地震 洪水 ノストラダムスの切れっ端　熊本県　岩切康子

渋滞や青信号を幾つ待つ

再会の恩師に何を話そうか

台風の最強時には眠ってた

イガ栗の台風落ちは口固い

鬼瓦落ちて割れない意地があり

水煙抄（つづき）

十五階下界眺めてビール抜く　高槻市　生田義一

法制化したが我が家に旗がない　高槻市　江原秀夫

心の目開き仲間の輪がはずむ

聞かせたいことは小さい声で言う　交野市　森本益弘

葉の陰で蕾が一つ出番待つ

ご馳走が敵に見えてる休肝日

津山市芸術祭
第20回新春市民川柳大会

と　き　平成12年**1月9日**（日）
開場午前10時半　開会午後1時
締切午前11時半　閉会午後4時半

ところ　津山市総合福祉会館4階大ホール
津山市山北520 ☎0868－23－5130
（津山駅から徒歩20分・バスあり）

会　費　1000円（発表誌呈）
当日弁当・柳誌の販売コーナーあり

題と選者（各題2句・欠席投句拝辞）

「いのち」	田中　蛙鳴（津山市）
「　朝　」	長迫ひろ子（久世町）
「　髪　」	山本　玉恵（大原町）
「　顔　」	池田　孝平（落合町）
「人　生」	西山　晴々（美作町）
「　雲　」	下山　蛙柳（津山市）
「城下町」	岡田　千茶（岡山市）
「スタート」	灰原　泰子（久米南町）
特別席題	松本　藍（津山市）

主　催　津山市教育委員会

川柳天守閣創立65周年 同人吉田湯北米寿を祝う 記念誌上大会

みなさまの力強いご支援により、川柳天守閣も創立65周年を迎えることになりました。同人吉田湯北も、この度米寿を迎え、ここに記念誌上大会を催すこととなりました。みなさま多数のご参加をお願い致します。

題と選者（いろは順）共選・すべて清記選

「　壺　」	瓢　呑舟	小山　紀乃
「惑　う」	富貫　理安	高田美代子
「　朝　」	久保田元紀	北川　弘子
「ひねる」	波部　白洋	田頭　良子

応募方法

各題2句を400字詰原稿用紙に題と作品・地区名・雅号を記入、下記へお送りください。
537-0021 大阪市東成区東中本3－10－29
高橋　定男

締　切　**平成11年12月20日**までに到着のこと

投句料　1000円　**発表**　平成12年3月号

賞　各題特選・準特選に呈賞

主　催　川柳天守閣
川柳まどか

佳句感想

橘高薫風

新年号から始めた佳句感想も歳晩を迎える。いろいろな見方での、いささかこじつけの鑑賞であったかも知れないが、今回は何の制約もない感想で、このシリーズの幕としたい。

兄ねむる金沢雪の早いこと　中井　ゆき

この句の情緒に溢れたたずまいは、金沢という固有名詞の作用によるもの。また句の上半、下半の内容と措辞もまことにやさしい情感に満ちている。作者のお人柄であろう。

相手には軽い約束だったよう　小西未佐子

私にとっては命がけの思いの約束だったのに、相手はそれほど真剣に受け入れてくれたのではなかった。それが今日の破綻の姿だ。さり気なく言ってはいるが、リズムは重い。

ブランコがきしむ初恋もきしきし　森　茜

この句8・9の変型十七音での構成。結語が独得なので、余程風変りに感じられる。内容は目に立てて見るべきものではないが、リズムの上での工夫に惚れた。五・七・五型のみかたくなに遵守する定型の固執者は、この句を不定型だと言うに違いない。

焼きするめ裂くアチチチチお留守番　武田　帆雀

焼いたするめが網の上で反り返っている。素手でつまみ上げて、これはほとんど火傷の指を耳に持っていく、そんな素振りが目に見える。下五のまとめが瓢逸だ。

このあと、するめだけをかじるわけはない。

京ことば一言だけの舞子はん　池永　正匍

NHK大河ドラマの「元禄繚乱」で、お軽の役の娘が可愛いイントネーションで京言葉を喋る。あの伝で舞妓さんも短い言葉で応対する。それが色気だ。舞妓さんが多言を弄すると卑しくなる。

どうしたと父の返事の温かし　堀江　光子

父親もまた多言を弄さない。「どうした」の一言が重くもあり、軽きにも通じる。小遣いをせびったときも、婚家を飛び出して帰ったときも「どうした」であった。

壁のような父は、毬に対して大きくも小さくも対応する容量を持ち合わせる。

君の頭は軽いと枕さえ言うよ　土橋はるお

ユーモア作家は、川柳塔では須崎豆秋さん、土居耕花さんと続き、今では江口度さん、相馬一花さん、土橋はるおさんらが本領を発揮され、女性のユーモア作家も育っている。

枕よ、「固い」ぐらいに言っておいてくれ。

人間をやめたか靴が捨ててある　高田美代子

靴が揃えて脱いであればギョッとするところだが、捨ててあるのは何処にでも見出たる。普通何ともなしに見過すものが、その時の感性を刺激して異常に映ることがあるのだ。

それが作者の個性につながる。

彼岸花運動会が無事に済み　岩本　笑子

身の内の鬼立ち上がる曼珠沙華　木本　朱夏

曼珠沙華間抜けの花火音がない　園山多賀子

彼岸花描いて黒猫かき添える　坂田和歌子

種々の曼珠沙華、あなたのお気に入りは…。

自選集

都会の旅 体調にふれ歳に触れ
ふたり歩けばさすが格好つく都会
とし寄りの楽しみ温泉で土産選る
若者と話すとあわぬまま終る
のぞみも叶い生かされて感謝

藤井明朗

寂聴のテープ途中で切れたまま
一人部屋終日を寝て過ごす
ボンベにも優しい運ちゃん居てくれて
自画像を少うし丸く画いてみる
看護婦の親切病院もいいところ

故 松川杜的

初対面想像をした顔に会う
寝る前のくすりを飲んで日課終え
明日があるあると毎日思うてる
家だけは建てても眠る墓がない
ぴったりと口を合わせる悪だくみ

小林由多香

自分対自分で悩む曇り空
先ずまずの暮しに矢張りある不満
善人の駄法螺は高が知れたもの
貧乏性とかく理屈をこねまわし
物知りのようだが抜けたとこもあり

阿萬萬的

悩みある男ブランコやけに揺る
新聞を拡げて足の爪を出し
台風も富士の偉容に道を変え
カタカナ語覚えて一句すぐ作る
秋風に風鈴思い出したよう

月原宵明

男子厨房に入るべしと世が変り
知らぬ所でリストラ予定組んである
室内も安心でない老いの事故
老いの不便言うとやっぱり愚痴になる
黄泉の旅帰りの切符くれへんで

金井文秋

冗談を言って笑わす酒になる
お隣の窓から秋を焼く匂い
幸せを祈る乾杯高らかに
手紙書くのが面倒という電話
喜寿健在上撰一献秋夜長

恒松町紅

コンバイン軽快秋の音をたて
収穫の秋が終った田の広さ
どの家も木犀香り秋晴れる
渋柿の赤さ短い秋の天
枯葉一枚いちまい秋の色で散る

宮口笛生

まんじゅしゃげ此処だけ秋の風になる
ふるさとの秋にいなごが消えている
芋づるよ昔の恩は忘れない
長男が貧しく背負う青い空
失った水のうまさがいまわかり

遠山可住

結局ははじめの案にもどってき
一本気の人だと笑ろて済ましとく
散るもよし散らぬもよしと言えること
短めのズボンを選って出かける気
泣きながら自分の意志はまげていず

正本水客

もう七十まだ七十の誕生日
独り飲むコーヒーの味気なさ
体罰を受けるほど孫成長す
閉店の恋が生まれた喫茶店
これ以上冷えては困る後遺症

野田素身郎

寄ってたかって温い両掌に労られ
退院日激しく火種燃え上がり
杖を忘れてうれしい吐息退院日
嬉しさにライターの火が逃げまわり
予定表びっしり吐息出るばかり

野村太茂津

夢ですか辛夷の花の花狂い
その母もそのまた母も雪まみれ
淋しさを忘れはしない椿道
縦縞の悩みを抱いて古里に
わしづかみされた時から蟹の足

波多野五楽庵

四世代住んで主役がまた変わり
欠点は鼻くそほじる癖を持つ
お歳には見えぬとお世辞言われても
おしぼりをくれてしばらく待たされる
駅までを走って行くも日課です

黒川紫香

自戒するゆとりの海へ舟を漕ぐ
ポケットにやがて眠らす赤い夢
記念樹にゆとりを持てと言われそう
影絵にも尻尾をかくす苦労する
温もりを菊に伝えて受賞した

小西雄々

一歩また一歩自信をつけた試歩
ライバルへ急所外しておく情け
男へのセクハラ女の露出過度
神域の音　玉砂利を踏みしめる
平和呆け臨界事故が活を入れ

西田柳宏子

酌ぎまわるだけで結構目立つ人
バス止まり温泉のある村と知れ
よい仕事ないか職安当てにする
釣れそうな池と散歩して解り
温泉に誘われナイターばかり見る

辻白渓子

落葉の布団風が着せてる無縁仏
北風をじっと抱いてる渋い柿
ロケットに月の兎は追い出され
天命に感謝し今日も生きている
幸せを自分に聞かせ葱きざむ

藤村〆女

靴下が破れています十二月
大原も寂光院も十二月
借金がなくて淋しい十二月
朝も昼も妻もわたしも十二月
タコ焼もふぐも美味しい十二月

板尾岳人

ひとひらの木の葉に冬の季節なり
歯車が閃点をする夢にいる
ふくらんだ紙風船の弾け飛ぶ
カリスマが独房で見る世紀末
阪急の地下でうろうろする男

高杉鬼遊

津軽塗りの箱に納めてある宝
お宝がこんなに思い出の手紙
一枚の紙　宝とも命とも
束縛を嫌う箱の中の宝
等身大の箱にもお伴する宝

八木千代

不死鳥が極楽鳥となり給う（弔　寺尾俊平さん）
風通しよくする喧嘩しています
保母さんをして一まわり頑丈に
淋しさを包む多弁な酒となり
月へ行ってしまう長女のウエディングドレス

河内天笑

川柳太平記（259）

川柳の群像

寺尾俊平

東野大八

「―どちらかと申しますと八方美人の俊平は、現在でもあちらこちらでカンカンガクガクの駄ぼらを吹かせて頂いているわけですがその私が川柳をはじめましたのは、昭和29年のことで、私の町より三*。はなれた一幸社からはじまりました。よい成績で賞められて有頂天になり現在に至りました。その間、無責任に会があればどこにでも出かけ八方美人として調子よくしゃべり満足しております。

私の父の麻吉さんと母のあきのさんは、晩年には川柳を友として楽しんでおりました。そしてその句が記事になることの喜びを素直に申しておりました」

右は俊平の処女句集『葦川』発刊記念句会（昭和61年11月2日）の会場である岡山ロイヤルホテルの賑やかな祝賀会場での挨拶の抄録である。彼の父麻吉さんは、当時の社会党のトップ江田三郎氏の一家とは親交のあった政客だったらしい。しかしその頃の俊平さん一家は貧窮の極にあったとか。

「―当時、わが家は貧乏のどん底で子供に本を買ってくれるほど裕福ではなかった。母が〝うちは鳥の雛と一緒でいつもピイピイだった〟と自嘲気味に笑っていたが、まさにその通りであったのである。とにかく極貧なので本を買うことができない。そこで私はいつも古本屋の板の間で、タダで本を読み漁っていた。そこの小母さんは優しい人で、そんな私を微笑で黙って許してくれていた。

なにしろどんな本でもよかった。手当り次第に本の紙魚みたいに本を食べていった。子供の癖に、思想的な本を読んだり、翻訳ものなど読んでは満足感に浸っていた。そして本を読んでいる時だけは、貧乏も親兄弟もみな忘却の彼方へと飛んでいた。（以下略）」（『川柳新京都』No.115・招待作品）その折の新作

永劫の愛を信じるのだ君も　俊平
曼荼羅の迷路で捨てられた心　〃
風鐸は砂の嵐にある叙情　〃

などの八句が添えられている。

寺尾俊平は大正14年5月20日東京生れで、小学一年生の折、父母の転任で岡山市西大寺中三丁目で晩年まで過した。大蔵省印刷局の現場課長を最後に、昭和62年2月に病みつきとなった川柳のトリコとなって『川柳・塾』（B六版二ツ折6頁）を同志12人ほどで刊行し、各地の句会や集会にせっせと足を運んだ。〝俊平さん〟の名で現代川柳の無頼派を自任する彼の人柄は彼を識る人々から愛された。平成11年10月19日肺炎で死去。享年74。

「川柳はそれぞれの人生の中の哀歓をうたうことと同時に、失いつつある日本語の美しさを継承する一つの系体であろうかと考えます。われわれはやはりお互いの認識の上に立って川柳というものを謀体としてお互い人間同士がたのしく美しく生きていくことがよろしいかと思います」（句集発刊会場での挨拶より抄録）

彼の無二の川柳友達は大勢居たが、なかでも室田千尋（故人）や橘高薫風・田中好啓（故

人）とは特に親しく〝川柳三羽烏〟と呼ばれていたらしい。彼の処女出版の『葦川』に添えられた三枚の糸付栞の中の一枚で、橘高薫風はつぎのような〝私のことば〟を添えている。

「友だち…橘高薫風

俊平さんと私は、まるで弥次さん、喜多さんである。秋祭の太鼓と笛のようだともいえる。二人が会えば、前句と附け句さながら自然の調和が出来上がる。私は俊平さんから、川柳はやさしさであることを教えられる。

秋が来て笛は太鼓を恋しがる　薫風」

無二のこの柳友を失ったこの人は、さぞ冷たさを増した秋風が、ひとしお身に沁むことであろう。

筆者も俊平さんとは心ひそかに畏敬する相手であって、その博覧強記の言語の冴えにはいつも敬服するものの、持前の口の悪さから

「お前さんの作句の底意から、いつも中国の漢詩のこころを感じとって仕方がない」

と言ったことがある。その故か、何か知らぬが、彼が『葦川』を出す前の頃に、某日いきなり玄関へどすんと宅急便が来た。みると彼からの贈り物で、でかいカートン一杯にわんさと書籍が詰め込まれていたのには仰天した。なんの目的で、なんの打算でこんな大仰な宅急便となって示されたのか、今もってわからない。早速、そのまま返却したものの、寺尾俊平とは何をする男か、と今だに首をかしげている次第である。

一九九五年秋、俊平ファンの一人である佐藤岳俊（岩手県胆沢町）が発刊している『北緯39度』No.15に「寺尾俊平特集号」が組まれている。その表紙裏の印刷もの。

『あのな、おれはな、もうグリーン車にな乗らなくても、いいのだよ、わかるだろう、これを見たなら……』

盛岡発青森行の田沢湖線の車窓で放った声が耳に残る。一九九五年の春から秋まで、秋田、五城目町、郡山市、仙台市と東北の川柳へ休みなく歩いた俊平さん。その川柳観をゆっくり、落葉の中にかみしめている」

そしてこの一冊は、杉野草兵主宰のZ賞選衡の言葉ですべて飾られている。その始めの彼らしい選評の一つを拾ってみよう。

「選後に乾坤一擲・寺尾俊平（以下抄録）

去年のZ賞候補作品の選衡を終了したとき今回で一時終了したい云々のとあり、なにかしらの解放感と一抹の寂しさが同時に襲ってきたのを記憶している。そしてまたこのZ賞が復活したとき、真成に一擲して乾坤（天と地）を賭ける—という言葉を思い出した。これは韓愈の詩の一節であるが、とにかく大バクチをやるということらしい。李白の詩にもこんな言葉がある。天地一擲に賭す。いずれも大げさな詩であるが、このZ賞を再開した草兵君の気持を思うとき、ふとそんな気がしてならなかった。とにかく続けてくれてうれしい。したがって今回の選はなにかしら、辛夷の白い花が咲きこぼれるような風景の感慨で選を始めそして終了した。（以下略）」

このほか10篇の選後感が掲載されているがいずれも彼らしい、淡白で重厚な筆致が懐かしく、また床しく匂ってくるように思えた。

以下は余白があるので、書きたいことは山ほどあるが、割愛して『葦川』から拝借する。

高い橋僕には捨てるものがない　俊平

霧の中黒いページに僕が消える　〃

連作・巷説「吉井川」の四季より

藪うぐいすは卑わいな祭り唄に似る　〃

桜ちりぢり水に浮かぶは片思い　〃

情死があった夏の川原のぎんぎらぎん　〃

すすきすすき　子捨て野仏笑ってらあ　〃

芋を食らう榎の下の枯れふぐり　〃

橋の上の馬車に冬の実在があった　〃

川はゆっくり拒絶もせずに凍らずに

▼前号の予告を変更して寺尾俊平氏の急逝を悼む。次号が「**直原七面山**」

誹風柳多留二四篇研究 12

伊吹和男・大野秀二
小栗清吾・橋本秀信
粕谷長生・山田昭夫
清　博美・佐藤要人

81　**くがいとハ月雪花も入レるなり**

伊吹　遊女達がつらい客勤めをする遊里ではあるが、ここにも世間一般と同様に、月雪花の季節の移り変わりがあり、またそれに伴う紋日、夜桜などもある。

つき花もその内に有ル一トかまへ　二三7
苦界とハ見へぬ廓の夕気しき　七二22

大野　賛。遊女にとっては月雪花の紋日がたいへんである。

中の丁月雪花にことかかず　一六35

小栗　賛。紋日の句。

橋本　同右。仲之丁の桜（三月）、八朔と両月見（八月・九月）。

清　苦界とはいうが、月雪花の紋日が加えられて、更に遊女の苦労は増大する。

佐藤　同右。

82　**燈籠のあしたまばゆき仲の町**

伊吹　燈籠は、大酒のため二十五歳の若さで、享保十一年三月に亡くなった吉原角町中万字屋の遊女玉菊を追善するため、七月中吉原の茶屋の軒毎に吊される玉菊燈籠。

七月晦日にその燈籠が消えた翌日は八朔。遊女が着る白無垢のため、中の町は雪景色のように眩い白一色となる。

をもしろやとうろう化して雪となり　二四10

清・佐藤　賛。

83　**主シの手て御箸紙と書キなんし**

伊吹　吉原で登楼三会目の馴染客になると、遊女に床花、遣り手に一分の祝儀を出したりしなければならないが、自分の定紋などが書かれた客専用の箸が用意された。遊女から「ぬしさんの手で『御箸紙』と書きなんし」などと言われて有頂天になっているところ。

面白さ箸一膳のぬしとなり　宮一35

清　賛。これもまた遊女の手管。

佐藤　同。

84　**手拭てつらをぬぐつて無心なり**

伊吹　例えどんなに親しい間柄であっても、金を貸してくれとは言いにくいものである。従って、自分にとっても、相手にとっても、それなりの間が必要となる。腰にぶら下げた手拭いを取り、面を拭っておもむろに「実は金を貸してほしいのだが……」となるのである。無心される側から見た句である。

余の儀ハでないとハいやなかゝり他　拾一〇27

大野　無心は言い出しにくく冷や汗でもかいているか。

橋本　礎解なら借りる方が自然に聞こえるが。

山田　賛。本句、俚諺「面押し拭う」（恥を忍ぶ）を下地にしていよう。
清　借りる男の動作である。
佐藤　賛。

85　**百人の内て明ヶ方壱人リ聞き**

伊吹　百人一首八一、後徳大寺左大臣の、
ほととぎす鳴きつる方をながむれば
ただありあけの月ぞ残れる
（『千載集』夏「暁に郭公を聞くといへる心をよみ侍りける）
からの句。
百人一首に時鳥を詠んだ歌はこの一首だけなので、「百人のうちで……一人」。ありあけの月ぞ残れるで「明方」。鳴きつる方をで「聞き」。
ちなみに、京都は時鳥の少ない土地とされている。
百人の中へ一声ほと、きす　九11
清・佐藤　賛。

86　**いつち日二ヶ国斗りこいで居る**

伊吹　「二ヶ国」は武蔵国と下総国、即ち両国。本所中之郷竹町と浅草材木町とを結ぶ竹町の渡し舟は、一日中武蔵国と下総国を行ったり来たり漕いでいる、というのである。
しかし、この竹町の渡しに近い小梅三囲鳥居下と金竜山下瓦町とを結ぶ竹屋の渡しにも、この句をあてはめることが出来るかも知れない。
二ヶこくのはしのふそくをわたし守　二二27
橋本　安永三年十月十日、この場所に大川橋（吾妻橋）が架けられたが、舟渡しも残した（『増補半日閑話』）という。が、だんだんすたれたらしいので、天明六年の主題句の頃なら、竹町にこだわらず、他の隅田の渡しでもよいのでは。
清　同。
佐藤　橋本説を取りたい。

87　**いづくの浦でもにくまれる男**

伊吹　この「男」が誰かわかれば問題はないのだが、難物です。
①女衒。「浦」を津々浦々の浦として一般句。
②肥前国松浦に来た白楽天。住吉の浦へ来たかも知れぬという句がある。楽天は嫌われる男であるかも知れないが、憎まれるという程のものではない。
住の江の岸に楽天寄る気なり　四一36
③梶原景時。摂津国渡辺、福山では逆櫓のことで、壇ノ浦では建礼門院のことで頼朝に讒言。
③の梶原景時を採る。
大野　はっきりしないが、③梶原景時か、または藤原時平か。
小栗　やはり梶原景時か。
橋本　「浦」とあるので景時と思う。
清　やはり景時か。よくわからぬ。
佐藤　景時でしょう。

88　**どっさりと降ると初雪げびる也**

伊吹　空から白いものがちらちらと降ってくる。そうだ、もう雪が降ってもおかしくない季節になったのかと思う。前年の雪の日々のさまざまな事を思い出す。そうあってこそ風情があるというもので、いきなり大雪の初雪では風情もなにもあったものではない。
初雪のたつた弐尺ハ越後なり　三40
初雪を少ト貰ふ手の美しさ　宝十礼3
橋本　賛。
雪を見る物ともしらず越の冬　七二4
粕谷　賛。雪は薄化粧に限る。
清・佐藤　同。

秀句鑑賞

同人吟津守柳伸
—11月号から

二千年へカウントダウンの師走。またとない重大責任の作業が舞い込みました。

いつも漠然と佳句を眺める身に「選評」とは晴天の霹靂ですが、真剣に取り組みました。先ず川柳的と言われる所以、人間陶冶に欠かせない、ユーモア・穿ち、そしてリズム感。二ヶ月遅れに掲載される季節感なども一考して戴きたいものです。

先生が欠伸をすると皆なごむ
福本英子

君が代問題・不登校生徒に悩まされる昨今先生も、生身である以上、家庭事情もあるでしょうし、うっかり出た欠伸を「皆なごむ」の下五にほっとさせられました。明るいおだやかな教室の雰囲気が伝わってまいります。

杖ついて街の匂いを嗅ぎに出る
麻生アート

書物やテレビでは味わえない街の様子世相に触れる為に、杖を頼りに出掛けるファイト、匂いだけではない収穫を期待致します。

疑えば出されるお茶も恐ろしい
早川盛夫

ダイオキシン・臨界事故・トンネル老化・セクハラ疑惑、お偉いさんは市民安全を願い疑いを晴らす食事、臨界事故現場視察、公務優先のためセクハラを認める行動に出たり、落し穴はどこで待っているか判りません。お互いに信じる神は救われる昨今です。

戦列を離れて肩が丸くなる
小寺花峯

平成氷河期に戦列を離れる止むなきに至ったのでしょうか。それとも自発的に二代目にバトンタッチして悠悠自適を謳歌され、肩書のない名刺の気軽さ肩の丸さに乾杯です。

松茸を買って慎ましやかな幸
出口セツ子

平凡な毎日に家族を驚かす冒険心、松茸を奮発して悦に入りながら、慎ましやかな幸、と控え目に、どびんむし・松茸御飯、否、焼松茸かも知れない。女ならではの楽しいお献立が目に浮かび優しいお人柄が窺えます。

ネクタイを外しただけで変わる視野
岸本宏章

男性の象徴は白いYシャツへキリリと結ぶネクタイに闘志と活力が漲ります。それを外されたのは、たぶん停年のせいでしょうか。マイホームで寛ぐだけでは飽き足らず、カルチャーに料理、カラオケにと、楽しく明るい方向に、変った視野を期待してやみません。

深呼吸もう迷うまい秋の天
大内朝子

何をお迷いなのか計り兼ねますが、深呼吸と秋の天は素晴らしい見付けだと思います。移ろい多い時世に短い秋の底知れぬ青、きっと好い事が待ち受けている事を信じましょう。

年寄りよそこのけそこのけ車がとおる
小砂白汀

一茶の感がしないでもありませんが、ますますの高齢化社会現象に慌てる事はない。交通事故日本一の大阪そこのけそこのけのゆとりでルールを守り自己管理に徹したいものだ。

道の駅うちの間引き菜売れている
松本よしえ

近年流行の道の駅、村おこし対策に村民が一丸となり協力しておられる様だ。精魂込めた出来ばえの野菜が売り切れる。何物にも替えがたい喜びが窺えてとても嬉しい。

親切のつもり　迷惑かも知れぬ

奥田　みつ子

人間長くやっていると生活経験も培われ、安住する感がある。何事にも相手かまわずつい助言や手助けをしたくなるものだ。例えば術後の患者をしげしげ見舞う他人等ひょっとしてお邪魔虫かも知れない。相手の身になって行動する事も理屈では判るが難しいものだ。

養うてはくれぬ勲章持っている

古川　喜美子

市川右太衛門さんは養護ホームで幕を降ろされた。喜怒哀楽を積み重ね昭和大戦から、平成バブル時代を耐え抜いた私達。口で言い表せない勲章。有森裕子さんも自分自身に勲章をあげたいと申されました。沢山の勲章を糧として心豊かに過される事を祈ります。

無関心よそおい耳を傾ける

土橋　睦子

母さんに聞くとなんでも知っている、と言われる程老女?は博識なのである。控え目で物静かな女性に度肝も鼻毛も抜かれる事がある。壁に耳ありの例えもあり発言には要注意。

自惚れを一杯つめた化粧箱

高橋　岳水

自惚れと化粧箱に圧倒された。男女を問わず年齢に関係なく、かくありたいものだ。

バスクリン誰が入れたか白根山（お釜見学）

松本　今日子

鬼押し出し、草津・白根山、酸素の薄い坂道へ突如エメラルド色した神秘の湯釜、自然の雄大さを噛みしめるのが精一杯の旅で、明るい即吟に接し再度旅気分を味わいました。

仰向けば愚痴も怒りも呑む青さ

杉本　孝男

青空は母の懐のように何もかも包み込んでくれる清清しさがあります。草に寝て思うことなし秋の空、少子化を呼びノッポビル乱立騒音の街で、青い空に安らぎを貰うひと刻。愚痴も怒りも消却し心機一転して下さい。

嫁が来て五穀豊穣過疎の村

北岡　波留吉

最近は過疎の村にもコンビニが出現して、豊作物を栽培する事なくマイカーでお買物に行くそうです。この時世に農家へ嫁がれた娘さん、まさに金の卵で喜ばしい限りです。親戚一同のお喜びが五穀豊穣に表れています。

何もかも不問に付した凪の海

山田　高夫

不況風吹き荒れる師走、背に腹は変えられぬ虚偽の社会、いくら踏ん張っても流れを変える事は不可能と悟った時、大海原の泰然とした凪にちっぽけな争いは不問に一歩前進。

鳩笛を吹けば津軽の夕茜

佐治　千加子

暗いニュースの続く明け暮れ、昔縁日で買った幼い日の鳩笛、両親と楽しかった笛が今は郷愁を誘う淋しい哀しい音色になってしまった。津軽のリンゴも毎年色づくのに、茜雲だけはときに私を優しく包んでくれる。

蓮の葉に泰然自若たる蛙

森　茜

一見変哲もない句に思えたが読む程に面白くなり微笑ましくなった。蛙をご主人様に見立てるいわゆる擬人法なのです。蓮の葉の上で泰然と座している旦那、よほど尽くして下さる奥様がおありなのか、ご自分では何も出来ないので床柱を背にアグラを組んで蓮の葉即ち奥様の掌の上で安住しておられるのでしょう。隣の花に飛ばないように頼みます。

お酌する手つきで変わる酒の味

長谷川　淳

最高の穿ちの句と受け止める。作句に行きづまると、酒か女に逃げればよいと聞いた事がある。ごまんとある酒の句に同一がないのも不思議だ。演歌も然り酒と女に別れを組み込むと一曲になるとか。百円で飲める居酒屋も出現、銘柄は同じでもお酌次第で味が変るのだ。忘年会新年会へ夢と希望の酔い心地を。

河内天笑選

横浜市　巖田かず枝

夫より先に呆けたらどうしよう
主婦だってたまに有休使いたい
虫食いは野菜に限り許される
切り詰めているのにケチと言われてる
赤い靴　外反拇趾が憎らしい

鳥取市　山口水楊

二〇〇〇年備える事は何も無い
夫婦でも貸借表はゼロにする
温暖化までは歳時記予想せず
付き合いはほどほどに悪者でいる
神からの愛が私のエネルギー

綾部市　藤田芳郎

スニーカー四季ある国の花の寺
騙したの謀られたのと仲の良い
十五分探したキーが鍵穴に
勉強になったと言ってから来ない
不戦勝という手があって逆らわず

堺市　和田つづや

裏切りに秋を感じることのほか
この度はたくらみのない指輪買う
新米と秋刀魚で守る腹八分
安い肉でも変らない塩胡椒
秋深し虫と耳鳴り入り混じり

堺市　喜多美波

立ち読みで拾い集めて知ったふり
やめたのに屋号で呼ばれはいまいど
ストレッチ　ボキボキ返事するからだ
年金の暮らしを楯に寄付値切り
駅前の地べたも舞台茶髪の子

倉吉市　牧野芳光

今日生きた垢をゴシゴシとっている
曲り角亡父ならどれを選んだか
言い訳の出来ない人が好きになる
聖書では僕は紛れもなく罪人
娘の前で気の利いた言葉をさがす

鳥取市　有沢　せつ子

墓前ではいつも優しい顔になる
嬢ちゃんか坊やか名前そっと聞く
呼び鈴を押し緊張の顔になる
運動会青空駆ける子らは鳥
五歳児の好奇心にはうろたえる

鳥取市　福永　ひかり

傷がつくまでは大事にした車
文庫本になるまで待てずまたはたく
学歴が何かと言えば顔を出す
被告席のように座った医者の前
大喧嘩してから無二の友になる

鳥取市　田村　邦昭

安ものに飛びつくくせがなおらない
終電が男の縮図運ばせる
レパートリー一つ増やした冷や奴
墓石を買って長寿の守り札
跳んでいる男の貌に影をみる

鳥取市　録沢　風花

列島が流されそうな台風禍
名水の恩をわさびは忘れない
名月やふる里恋し亡母恋し
ジンクスは本当だった三りんぼう
煩悩はけむりが包み旅立った

米子市　猪森　スミヱ

席ゆずる娘の横顔が美しい
そろそろと振子時計も狂いだす
住みよくて此処へどっかり根を下ろす
暴れん坊なだめて今日の北斗星
ブルースが聞きたく西の窓開ける

鳥取県　平井　栄翁

ゆっくりと姿似て来る血の流れ
ウインドーに映る姿に背を伸ばす
車座で話せば角もとれてくる
隠居して自由に飛べる鳥になる
国境の無い白鳥は喧嘩せぬ

鳥取県　山岡　久枝

花植えて心の穴を埋めている
参加賞もらって汗を拭いている
慈しむ親子が絆強くする
嵐にも耐える囲いを組んでいる
趣味に生き穴にはまらぬ努力する

鳥取県　加藤　公子

捨て生えのかぼちゃごろりと昼下がり
規格外の果実を一盛りでさばく
羽衣を掛けたい松が枯れている
ツーショットちょっと派手目な衣替え
これからは恥も個性と認められ

鳥取県　鳥羽直市

一ランク下げて気楽に生きてゆく
迷惑をかける長生きしたくない
喜寿の坂　余力たくわえ春を待つ
長生きもふたり達者で味がある
銭もった人ほど出さず腹が立つ

鳥取県　鳥羽玲子

歯並びもよくて美人に見えてくる
いやなこと忘れて好きな花を買う
一匹が弱り水槽気がもめる
言い過ぎた重い心をもてあます
喧嘩したあとはすっきり茜色

鳥取県　西垣美知子

感謝して美しく歳かさねたい
各論に言葉を濁しもつれだす
散る美学愛の視線を注ぎたい
あれこれと枕の中に詰め過ぎる
逃げ道の最後は母のひざがいい

鳥取県　澤裕子

豊かさの中で幸せ見失う
プライドが両のこぶしを固くする
わが子でも心の動き読みとれぬ
孫三人活気を連れてやって来る
軽い嘘ついて良心痛み出す

今治市　野村清美

早とちり一人芝居でべそをかき
亡き夫の桐下駄軽くあたたかい
相性はいいが渡ってならぬ橋
やさしさに心を開く貝の口
勉強を褒めればマンガ読んでいた

愛媛県　宮本末子

崖の花自然に咲いてこそ魅力
育てよい少し多めに播いた種
また逢える別れはいつもいさぎよい
男より女が強いのも寿命
のど自慢ゲストの鐘も鳴ってよし

愛媛県　黒田茂代

迷いこおろぎ部屋を四角に飛び回る
道路鏡の中から覗く小さい秋
わたしは古時計いつでも遅れがち
おのが身を持て余してるどでカボチャ
モチーフに魅せられてゆくレース針

高知県　百田幸

とっつきは悪いが心温かい
ぼんやりと雲を見ている一休み
怠け癖頭もたげる雨の音
平和だな妬くほど魅力ない夫婦
さからってどうにもならぬ妥協する

北九州市　岡田幸生

要らぬこと言うなと妻の指が言う
辛抱の尺度が親と子で違い
ハミングの幸せ弾むフライパン
やり遂げてまがりなりにも持つ自信
近道は書いてなかった父の地図

福岡県　岩崎和女

缶ビール開けてひとりの誕生日
リストラの煽りを受けて店を閉じ
一輪の花が癒やしてくれる傷
内科歯科眼科と増えるスケジュール
倖せは曲り角まで来てわかり

島根県　菅田かつ子

菜園の青虫 毒味をしてくれる
手相見の誤算かわたしまだ元気
稲はでのそばで のどかに生きてます
炎えつきてカンナもやがて同じ土
さんざんにいたずらしたがねずみ死に

島根県　武島ちよえ

口コミで患者の多い医者へ行く
考える人になってる秋深し
介護保険その日の為にかけておく
野良猫め魚くわえて振り向いた
少しずつ欲を離して枯れてゆく

島根県　福間博利

黒揚羽 網戸の外へ出してやり
投げられた撒き餌しっかり食べておく
立ち話で鍛えた妻に叶わない
シベリヤを生きてきたのに風邪を引く
新団地こころを結ぶ秋まつり

出雲市　城多喜

一夏の麦わら帽子捨てて秋
秋が来てわたしの枯葉ふり落す
何事もなかった今日も秋刀魚焼く
二枚目の舌はしっかり巻いてある
小窓には小さな耳がつけてある

松江市　銭山昌枝

どんぐりの仲間はお腹から笑う
笑わなかった父が笑っている遺影
笑い皺伸ばすテープを貼って寝る
笑ったら許してくれた軽い罪
辛い過去笑い上戸は語らない

松江市　山根邦代

この年で見習うことの多いこと
休日は少し楽しむことにする
決めかねた言葉 笑顔に負けました
幸せは家族の中に居る安堵
愚かさも愛嬌ですと慰める

倉敷市　森本文子

一味を足して余生を丸く生き
検診が無事通過したまだ元気
手を繋ぎ老いが飛び越す水溜まり
ありがとう沢山言うて逝くつもり
木犀に深呼吸して農へ出る

岡山県　国米きくゑ

赤い紐細くなっても耐えている
人妻の飛べる時代へ亡母のこと
夢を追う少女のままに老いている
シェーバーの今朝は弾んだ音で剃る
心音に母の喜びかみしめる

尼崎市　森安夢之助

縄跳びにまた引っ掛かる僕の足
塀を壊して世間を広く生きている
ひたすらに風に向って跳ぶ若さ
リラックスして演歌など風呂の中
新人が育ちチームの風となる

川西市　西内朋月

身に覚え医者の言葉がひっかかり
心配を忘れるために飲んでいる
お隣の笑い声聞く午前二時
お人好しべんちゃら言われまた幹事
実力は五分五分運に見放され

川西市　田中喜俊

留守番で孫の言い分聞くゆとり
懐かしいお顔ですけど名が出ない
買物は重さでえらぶ年となる
柿の実の色づき見える垣根ごし
朝顔の種がはじいて秋走る

篠山市　仲井素水

一か八　一命賭けた大手術
むっとする病院食は喉越さず
草紅葉　大の字に寝て空は青
秋半ばあけびは腹を割っている
浄土まで川柳連れてゆく積り

兵庫県　黒崎美紗子

福引きの発表待つ間ひと呼吸
笛剣(ふえつるぎ)厄を払って獅子帰る
宵宮を打ち消すようなにわか雨
熱こもり雨もかまわず舞う神楽
のんびりと気ままな暮らし目方増え

和歌山市　吉村さち子

皆俯いている病院の昇降機
話し中ばかり元気でいるらしい
傍目には幸せそうに見せる派手
嘘言わぬ花と明日の話する
血の絆　頑固で親子妥協せず

和歌山市　木村親蹄

不景気のぐちだけ夫婦一致する
三食をたらふく食っていて不況
わが妻に敬語を使う紙オムツ
サンタクロースに煙突のない家ばかり
女性アナ目下恋愛中の声

和歌山市　武本碧

淋しさがまぎれるフリル付けておく
わたくしのそっくりさんは見たくない
運命の歯車　神の手を離れ
手を放ししばし世間の風に当て
秀才が増えて学校病んでいる

和歌山市　上地忍

いい人と言われて急に肩がこる
コスモスに夏の痛手を癒される
年かいな何をするにも気合入れ
夕焼けの蜻蛉追う子を久々に
過疎の町嫁さん話駆け巡る

和歌山県　坂東和代

作るたび味の異なる迷コック
飽き性がこの人に添い五十年
よい方へ解釈をして床につく
損しても自尊心にはかえられぬ
のり易いタイプで日日が忙がしい

和歌山県　杉山精子

夫婦とやひとつのパンを半分こ
いい予感電話のベルが呼んでいる
深呼吸十回元気取り戻す
なに彩をたしたら私らしくなる
一本の松茸今日のメインです

和歌山県　中村君枝

組み換えの食品前に出る吐息
ほろ酔いへ祭囃子が心地よい
まだ腕は落ちていないと痩せ我慢
感動の吐息詩画展から洩れる
埋み火を抱いて未だまだ翔ぶつもり

川崎市　和泉あかり

一軒が売れて三軒家が建ち
オルゴール鴉も聴いて巣に帰る
たとう紙を拡げて母の香に浸り
たまに着る和服どこかに隙が出る
病んでから待つことだけに慣れた耳

横浜市　田中笑子

蛇の目傘　踊りの所作を真似てさし
傘立てに立たされている忘れ物
あれこれと喋りたくなる披露宴
車間距離こころえ夫婦らしくなる
凪いだ海　母のふところ想わせる

横浜市　北沢街湖

捨てられず三ＤＫに開かずの間
先頭を切ってスピード違反金
黒髪に手間暇かけてする茶髪
凝った肩ほぐしてもらう仕舞風呂
衣きせぬ言い様今朝の一波乱

横浜市　福田由美子

虫のねと寝息とけあう秋の夜
残業は手当つかないボランティア
糸通しついに老眼うけ入れる
検診は異常なしだときめている
アドバイスなどは聞こえぬわが家流

横浜市　川島良子

アナタ撃つ輪ゴムいつでも持っている
楽な方選んでからの下り坂
社長という肩書もらい左遷され
頑張れといわれだんだん萎えてくる
夏無事に越した卒寿へ冬がくる

横浜市　生坂サト子

世紀末念押すように怖がらせ
事故ニュースやはり人災悔まれる
怖過ぎる雨に地震に放射能
お早うとわたしが折れてチョンにする
別れ道案内板も疑われ

横浜市　秋元和可

梳き鋏貸してあげよか夾竹桃
秋日和花を相手の独り言
猛暑去りやさしい風と秋の花
骨密度測る明日へ目刺買う
鍬シャベル親しくなって実る秋

三重県　尾崎勤

坂道の荷物ジャンケンしたくなる
あなたとは橋を架けないお友達
左端を選び食事のサウスポー
ミスをした後のフォローで株上げる
早引きの電車のんびり旅気分

京都府　前上英一

コンビニを上手に使い生きている
迷ってるうちに返事を出し忘れ
ふる里はいいな笑顔に嘘がない
玄関に厄介そうな靴がある
秋空を二つに割って応援歌

日立市　加藤権悟

種を蒔く丁度頃よい彼岸花
なる程とおもう事情の舞台裏
現役で鳴りますウチのクロ電話
二代目の苦労知らずの頭が高い
豊穣の案山子米価を見ていたら

静岡市　大村正雄

登り坂老いに手を貸す紅葉狩り
もぎたての秋茄子貰う垣根越し
峠よりダム湖見下ろす女郎花
つれそいを空気と思う仲の良さ
ゆっくりと切符売ってる過疎の駅

新潟県　高野不二

政治家の本音が社説からわかり
広辞苑　結局見ないまま終る
銀行がつぶれる記事は縁がなし
去年のを読んで三年日記書く
パン食を子にせがまれる米作り

野田市　那賀島雅子

荒れた手でつかんだ運は美しい
戻らない記憶の中の青リンゴ
胸に溜むストレス目玉焼こがす
我がままを通した後の灯のまぶし
楢山が頭をよぎる傘寿です

千葉県　大川晩翠

棚田ブームマニアのカメラ駆け回る
ポイ捨ての傍若無人大手振る
畦は手塗りモグラの穴が塞がれる
少子化の我慢出来ない子が増える
鉛筆を削らずナイフ振り翳す

堺市　荻野正雄

仏壇にキープ亡父と酌み交わす
嫌われたタバコ吸ってる換気扇
お浄土はこうだとばかり花の寺
初恋の人の名そっと娘に付ける
赤鉛筆耳に挟んで夢を買う

堺市　梶本哲平

世間騒がせた割には軽い刑
猶予つきさては刑務所満員だ
耳痛いことは聞こえぬふりしとく
脳味噌を百グラムほど買い足そう
夢を売る易者をやって見ようかな

堺市　村上玄也

年金も利子も頼れぬ定年後
冬宿は雪見温泉囲炉裏端
助手席のナビは時々眠ってる
妻の愚痴テレビ音量上げて聞く
喧噪を避けてホテルで除夜の鐘

堺市　矢倉五月

無縁さん拝む線香残しとく
暫くはこの新刊がパラダイス
いろいろのカードで財布重くする
堂々と生きる童子に戻っても
反故にした方の手紙が忘られず

大阪市　中澤伽羅

心配を好きでしている訳でない
お隣は早起き少し気が引ける
スタミナを遊びのために溜めておく
服と場所変われば思い出せぬ人
並んでるわたしの前でチョン切られ

大阪市　榎本日の出

嫁と姑ほどよい距離でよく遊び
開いたり閉じたり旅の準備中
手みやげの代りにいつも失敗談
なんとなく頼りにしてる両どなり
平成の産めよ増やせがもうそこに

大阪市　亀井円女

守らねばいい日本語が死んでゆく
やさしい時間をくれるお陽さま青い空
取替えの出来ぬ部品がまた傷む
知っていて知らん振りする聞き上手
鏡が笑うあんたは嘘のつけぬ顔

大阪市　大川道子

赤ちょうちん狸が愚痴を聞いている
人以外みんな本音で生きている
欠点が私に似てて嫌な人
使わなきゃわからぬ金の有り難さ
ハハハハと笑う真似して元気出す

大阪市　小泉ひさ乃

編物のひと目ひと目にある願い
五十年お互い杖にして生きる
一呼吸おけばぼった血も下がり
良い娘見付けてこいとはっぱかけ
盛り場でジベタリアンが群れている

大阪市　熊代美智子

振りむくな昨日は明日に消せるはず
若い娘のパワーに負けぬ老いの意地
鈍行のせかない旅や老夫婦
お人柄よくて出世の出来ぬ人
公園にはぐれた鳩が仲間よぶ

高槻市　左右田泰雄

義理ひとつすませてからの飲みなおし
背のびしてやっとポストへとどいた手
愛犬に顔なめられた旅帰り
カードキー　パリのホテルで初体験
形より中身で勝負割れおかき

高槻市　執行稲子

山頭火の気分うろうろ清水飲む
食欲旺盛　悩みつきない血糖値
わがままなとこが一番似るコピー
地蔵こけし孫の数だけ抱いて来る
つかず離れず私の視野の思慕の星

吹田市　須磨活恵

有情無情ほろほろこぼす萩の寺
背のびせず飾らず続くおつき合い
今日が駄目ならば明日の風を待つ
ひと時を命の限り曼珠沙華
虫の音に疼くものあり秋深む

八尾市　中島春江

グルメには縁無き暮らし茄子漬ける
雑作なくこぼたれて行く我が生家
我が余命なりゆきまかせ彼岸花
丁寧に電話受けてる下着にて
菊人形風邪をひきそな足袋の濡れ

松原市　和気慶一

ふるさとのネガから響く祭り笛
名月を独り占めする露天風呂
名月もダイオキシンにしかめ面
銀行のモラルを歎く西鶴忌
少子化へ歯止め　がんばる若夫婦

藤井寺市　岸本寿代

じわじわと嫌味な言葉胸をさす
似合わない金銀パール身につけて
澄みきった月見の宴　如意輪寺（吉野山にて）
栗焼いて秋の夜長をのんびりと
扇風機長かった夏御苦労さん

羽曳野市　山本たけし

懐や時間気にせずしたい旅
綻びを結び直して老い二人
源流を辿れば樹の香風みどり
義理絡み何とか続くお付き合い
守備範囲ひたすら守り生きて来た

羽曳野市　西村りつえ

焼き芋に体重計はそっぽ向き
古新聞二ヶ月ためて三十円
けちん坊が急にお金をまきだした
とんちんかんな話ですます共白髪
懲りもせず昼寝していた兎どし

富田林市　大橋鐘造

少子化のブランコ風が来て揺らす
原色で生きるこの世の真ん中で
手も金も出さぬ身内が口を出す
百歳になっても女忘れない
断わりの電話は妻がする平和

富田林市　中井アキ

失恋のまつ毛に風が触れたがる
厚底の靴がこけてる負のページ
屋根瓦欠けて眠りが浅くなる
蠍座の女で毒消し探してる
先達の句碑脈々と思惟の海

河内長野市　大西文次

拍子木が昔の音で火の注意
世紀末戦友会も風化する
敬老日ちやほやされて草臥れる
葱提げた友に新婚襲われる
新米で松茸飯の誕生日

河内長野市　木太久正一

少年の何故かさみしいつくつくぼうし
老人に優しい住居かんがえる
のど自慢移住百年インペルー
朝夕の涼しさ計り芝を刈る
上上の味噌汁つくる具沢山

岸和田市　不破仁緑

腹割って話せば優しい鬼でした
抗菌の俎板に蠅止まってる
酸欠の街で呼んでる赤い羽根
国産の松茸だけが見栄を張る
不適切でしたと頭下げて済み

岸和田市　亀井皎月

酒呑み会　力士の役位授け合い
何処見ても絵になりそうな美術館
頑張れと言う励ましを聞く安堵
顔を見ておあいそ決める小料理屋
生き残り集う七十路のクラス会

大阪狭山市　矢野梓

あの人はいつも波風立てて去り
あざやかに在りし日戻る走馬灯
新米にえいと松茸奮発す
くれたから着るブラウスの派手な柄
若い日の姿見えますクラス会

和泉市　横山捷也

中心にいつも居ないと済まぬ女
良い方の占い信じる事にする
晩酌を割勘にする嫁と住む
灰皿に肩身の狭い二三人
離婚して脱皮したよにはねる女

泉佐野市　備後三代子

旅疲れの夫迎える栗御飯
ひと言をのみ込み締める博多帯
足の蚊を足で払って電話中
会釈され見当つかぬサングラス
人の居た気配の残る墓参り

泉佐野市　稲葉洋

また一つ知らぬ単位の核の事故
絶対は無いのよ油断召されるな
公的の持参金つけバンク売り
愚かなり後の祭をしてる国
腕組んで見るカレンダーもう師走

胸襟を開けば美味い酒となり
大それた望みなどないマイペース
自分史に悔し涙の染みがある
いろいろな記念日作り飲んでいる
花好きな妻に花買う誕生日

札幌市　三浦強一

まなうらに亡父の太鼓が響く秋
けものにもなれる心がひとつある
死者となり僕の喜劇に下りる幕
生きねばならぬ百の仮面をふところに
破れ太鼓の私が吠えるはしご酒

三重県　佐々木森哉

あちこちで箍が弛んだボロが出る
ＪＲ神話コンクリから崩れ
お家芸復活柔道お目出度う
患って人の痛みが良くわかり
亡妻逝って自問自答が多くなる

高槻市　乙倉武史

棚ぼたの運をお供えしています
舞茸の食べ放題を早とちり
じじばばが達者で叔母と同い年
つるはしをこなす男の汗に酔う
ボランティア出来る身分に手を合わす

尼崎市　清水久美子

台風で湾賑やかに避難船
遺言は何時書けば良い八十路前
八十路前何か生き甲斐見付けねば
栗拾い初体験は墓地の下

大阪市　筒島文枝

母親の袖をしっかと小さな手
おかしさが大きくなって腹が立つ
語り合う二人に時間有りません
捨てるのに買わなきゃならぬごみ袋

大阪市　榎本舞夢

二度三度同じ間違いするわたし
間違ったふりをじょうずにしておこう
順番を大事にしてるしきたりだ
白いエプロンかけてしきたり守ってる

大阪市　立蔵信子

度忘れの夫婦がセットで生きている
生きるとは寂しいものよ嘘一つ
どん底で母の語録を思い出す
透明度高くて雑魚は寄りにくい

大阪市　一本勇太

人間の顔していない議員席
赤旗が消えて赤紙来そうな世
愛犬が逝ってぬずみがこんばんは
残るはふたり戦友会は五十回

大阪市　尾崎黄紅

大阪市　平井露芳

出身は龍野と言った赤トンボ
ソーランによさこい混ぜて北が沸き
日本丸国債積んで沈みそう
マスコミの火事見物はヘリ使い

大阪市　中井正秀

愛妻よ隠居宣言赦してね
優しそうこの人に道尋ねよう
こうなれば病気しないが金儲け
大阪もアフリカ並のこの暑さ

堺市　見本ちゃ子

風涼しじっとしてないスニーカー
瞬きが多くなりそう新世紀
建て前と本音を引き分けさせる風
ありがたい御札戴き持て余す

堺市　丹後屋　肇（池端正改め）

ちぐはぐの男女結んだ赤い糸
脱稿にそっとペンだこ撫でている
わだかまり解けて夜半のうまい酒
新発見ばかり終日辞典繰る

羽曳野市　川口信子

親までも見事にだますアデランス
置き忘れ仕舞い忘れて生きている
逢いたいと鏡に書いてひと恋し
金婚を迎え懐古の泣き笑い

羽曳野市　安芸田泰子

長生きしたいが年はとりたくない
秋詰めて老母の温みの宅急便
予定などないが毎日忙しい
どんぐりの中の一つが背伸びする

羽曳野市　森田四三郎

親切な方言も聞く旅の宿
二度三度話が戻る老いの愚痴
ごみ袋両手に提げてパパ出勤
毒舌を吐いても人気あるキャスター

羽曳野市　川田晋

軽率に誓い一生棒に振る
豊作を農家芯から喜べず
リストラを狙う就職詐欺に遭う
駅前だ用はないかと電話する

高槻市　西谷治三郎

ボケてない電話十桁覚えてる
酒の量減った減ったと注いでいる
親父養毛剤娘は脱毛剤
主夫という言葉は辞書に載ってない

豊中市　みきわきみ

何とまあ地球の身震い多い年
自らを年寄りと言う年になり
分秒に追われるアナを聞きとれず
倒産か住宅街の主かわる

朝焼けでビルの林が今日へ燃え　枚方市　大昇隆広

美人見たそれから少し元気出た
ひっそりと生きて死ねたら肩凝らず
水がある郡上八幡雅が流れ　枚方市　二宮紫鳳

コスモスが揺れて娘へ想い馳せ
ジョギングの足元で聞く虫の声
人柄がにじみ出ている筆さばき
おすそ分け配り近所の輪がなごむ　門真市　矢阪英雄

縫い包み体に合わぬ熊になる
イベントの熊声出せず気が揉める
胎内の温度に負けぬ和の熱気
出会いの和満足ですと老樹木　寝屋川市　岡本勲

都合のわるい話になると耳に栓
小春日和お隣さんも留守らしい
夫婦喧嘩あとに突然くる白け
ぼけ封じ寺が気になる歳になり　寝屋川市　井上すみれ

シャッターのつづく不況の街を行く
古川柳さすがサスガと手をたたく
けせらせら口では言ってみたものの
川柳に処世術まで教えられ

助けられ自分の弱さ思い知る
やめてくれ手垢まみれの甘え声
知っているつもりが知らぬ事ばかり
都市砂漠おぼれてみたい時もある　八尾市　井尻民子

血糖値腹八分目と言いきかす
あって邪魔無くて不便な一円玉
古稀の子が卒寿の母に祝い膳
気を利かし先を読みすぎ嫌われる　八尾市　山本宏

片ちびの靴から冬が沁みてくる
平凡な日々で余白の出る日記
足元を覗かれ照れる菊人形
浮き沈みする湯豆腐に見る余生　八尾市　田中トシエ

幸福の脆さを知った事故ニュース
脳味噌がひっくり返る歯の痛み
おだいじにナースが横をむいて言う
老骨に鞭の打てない粗鬆症　八尾市　與田明

今以上やせたら生きていられない
大ばあちゃん絵本読めるを不思議がる
平等の愛で育てる難かしさ
喜びの顔を浮べて郵パック　河内長野市　杉谷カズエ

河内長野市　印藤智子

全盲の友へ電話の昼下がり
療養の友へ川柳だよりする
介護保険　大声の癖まず直す
秋風に髪くり色に染めてみる

河内長野市　水谷正子

来る人の足丈見える喫茶店
軽四のように小まめな娘婿
人柄のよいのが一寸玉に傷
泣き虫の子が嫁貰い宮参り

岸和田市　木村正剛

お湯のなか指一本の軽さかな
一枚の葉書とどめの一発に
ほろ酔いのまま二三日寝ていたい
定年後油断できない夫の座

岸和田市　村垣鹿太郎

数えながら登る石段まだ元気
朝刊の匂い手にしてご機嫌で
人情の絆へ生きた金使う
片言で家中沸かす初誕生

大阪府　澤田和重

栄転も左遷も酒がついてくる
荷物持つ夫を家来にして歩く
流れ星とっさに願い出てこない
年毎に喪中はがきが増えてくる

滋賀県　中宗明

バス停に藪入りの孫待つ老母
人気呼ぶボンネットバス過疎の村
親の背を見ようともせぬ現代っ子
寒い夜は隣も鍋の匂いさせ

京都市　高島啓子

遠くから見るだけ星もあの人も
時代劇スターの名ならすっと出る
気まぐれな美人のような京の雨
一人居のひとりの枕干してある

京都市　勝山美千代

衣替えまた捨てられず仕舞い込み
娘のお古勿体ないと着る老いで
飛行機雲みだれて明日は雨らしい
ばあちゃんの気配りいつも生きている

京都市　高村吉之助

一寸だけ疑って見たが乗っている
控え目にしてた老人力全開し
先生のメガネ何でも見えるらし
趣味に生き兎も亀も道づれに

京都市　三宅満子

毎朝のホームはみんな顔なじみ
秋の虫長い残暑に鳴き疲れ
薬草は医者に内緒で飲んでおく
病院の待合室はサロンめく

厨房に定年無しの共白髪
記念日を記憶させてるキャッシュカード
底辺に縁が無さそう二千円
百薬の記事に晩酌はずみつき

横浜市　金森徳三

健康によいと聴いたらすぐに買い
新築のキッチン秋刀魚焼かせない
この町の歴史を学びボランティア
寄せ植えを教えて花屋ハーブ売る

横浜市　山梨雅子

クローンには神様だって騙される
海荒れて貝がらたちの葬送曲
口止めをぽろりこぼした軽さ悔い
ほんとうの悔しさ時間経ってから

横浜市　近藤道子

暑いから寒いからとてゴロ寝する
言わなけりゃ良いのになどと第三者
混んだとて盆は故郷と決めている
変な咳する座席から離れとく

横浜市　長島亜希子

足の裏だけに美白の名残りあり
言訳を決めて足音高くなる
リンゴ剝くことも出来ない娘も母に
病床も衣替えする秋の顔

横浜市　芦田鈴美

同室の気質うかがう入院日
耳学問つけて迎えた退院日
一人居る日は脳みその休養日
体重計狂ってるわと妻の声

横浜市　鈴江純子

籤運は無いが車に当てられる
ムチ打ちの治療に老化思い知る
加害者を吾子と思って許そうか
登山道森の香りに甦る

横浜市　保田絹子

背を伸ばそ腰も伸ばそうふり出しだ
春の鬱抜けて気づけば秋の彩
病院の緑で癒す待ち時間
ドナーカード持つほどパーツ元気なし

横浜市　豊田羊子

残り火を確かめている秋の旅
席ゆずり今日はいい事ある予感
落日にせかされながら栗を剝き
硬直のマグロが陸で整列す

横浜市　三村八重子

捨子花などと疎まれ曼珠沙華
男子みな厨房に入る食文化
半袖もコートも乗って来る初秋
反対の挙手はこぶしを突き上げる

八王子市　井上京一郎

東京都　井上つよし

仙人に少し似て来た病み上がり
咲き匂う萩の簾に妻若く
星達のパントマイムに夜が更ける
やあやあの後であの人誰だっけ

静岡市　中西雅

もずの声秋先どりの散歩道
回覧板とどけて花と長話
さらさらと小川の歌にあうめだか
ちちろ虫声弱々し冬を呼ぶ

浜松市　岡本まち

塩加減　甘さかげんのさしすせそ
おばあちゃん小さくなったね孫のいう
指輪には縁の少ない女なり
六十路すぎ　あ　うんの息も冴えて来た

静岡市　増田扶美

隣組今も続いて円く住む
隣との距離近づける嫁の笑み
酷使する片眼に詫びを言いながら
真似してもまだまだ遠い母の味

島根県　毛利幸

折り込みは車と家が独占し
機内食しっかり食べて旅気分
新世紀女性が主役長寿の輪
秋風とサンマ一緒にやって来る

松江市　松浦登志子

効用を知って薬がしみわたる
頂上でおてんとさまと見る景色
大鍋で芋が踊るよ秋祭り
読みながら忘れながらの秋夜長

出雲市　佐藤治代

嫌いでも好きでもないが夫婦箸
おかしくて悲しくなって又笑う
かけっこは嫌いお尻が重いから
ほっこりと母を偲ばすふかし芋

宇部市　高山清子

ハンサムに魅せられ乗った口車
ごめんなさい最初に言えば済むものを
老い一人気楽の陰にある孤独
上役の音痴へ拍手また歌い

和歌山市　水田秀男

原発の恐さを叫べマスメディア
原発は地球破壊機かも知れぬ
税務署は弱い僕等に強すぎる
そのうちに魚もメードインジャパン

和歌山市　上地登美代

いちじくを食べて読書の秋に入る
ご自慢を女の口はよく喋る
5パーセントのおまけに財布笑い出す
引き算に追われて今日も陽が沈む

甘い夢でした夕陽が沈みだす
甘い酒注ぐグラスにあった罠
不揃いの器に同じ夢を盛る
これからも脇役でよし唐辛子

和歌山市　土屋起世子

風尖り風穏やかに夫婦かな
おっさんと呼ばれはらわたほろにがし
一蓮托生 弔い花に落ちて逢う
恋しくて詩につらなる望郷よ

田辺市　大峠可動

古手紙焼いて区切りをつけたはず
美辞麗句そろそろ本音出しなさい
真直ぐでないきゅうり売る老農夫
胸の奥許していない生返事

和歌山県　村中悦男

再出馬猪口に託して回る席
水割りですからと焼酎量がふえ
若貴の綱のゆるみが気にかかり
子育てを知らぬボインがゆれている

高知県　近森功

コンピューター日本は除夜の鐘がある
新世紀やっぱり同じ朝だろう
煩悩と未練そのまま新世紀
江戸っ子の友に送ってやる訛

高知県　桑名孝雄

地平線どこまで続く片思い
近所では良い人で居る犯罪者
蝶番外れたような定年後
仏壇の花も国際色豊か

鳴門市　八木芳水

貧相になって喜ぶダイエット
あどけない顔した女に子が二人
自尊心あっちこっちで頭打ち
口下手にみんなが耳を欹てる

香川県　瀧井勝

言い勝った口先までが尖りだす
聞いたふりして聞き流す生き上手
テポドンで大国威し飢えしのぐ
柳誌待つ郵便バイクは通りすぎ

香川県　原賢

軍歴が静かに匂う顔の皺
早起きへファイトをくれるラベンダー
親の意見もう届かないイヤリング
どこまでも泳がせておくいい噂

今治市　塩路よしみ

買うときはみな当る気の宝くじ
暖冬の予報寒がりほっとする
膝病んでから自転車が友となる
彼岸花咲いて還らぬ子をおもう

今治市　中村好恵

また一人取り巻きが去る柚子に刺
ええこええこすると子犬が嬉しそう
雲行きが悪い冗談でも言おう
いい酒を揃えているに誰も来ぬ

愛媛県　中居善信

秋晴れや大工の槌が響くなり
逝く秋の床へ未練が残る朝
ぼんやりとくゆる煙草を眺めおり
最善を尽した後の神頼み

愛媛県　安野案山子

男はん向こうへ姑のおムツ替え
茶目気めく嫁の握手が温かい
羨ましハイ切れました乾電池
美女の名で美味さを煽る故郷の米

尼崎市　尾宮弘治

病状を言えば薬がひとつ増え
孫の記事一行を買うスポーツ紙
百人に百の処世をみる柳誌
賀状予約まとめ買いにも値引なし

尼崎市　軸丸勝巳

十五夜をズームインする池の鯉
空耳か亡夫の声する秋の朝
野の花へ道をたずねる蝸牛
やがて冬せかされている秋の恋

尼崎市　内田美也子

肝っ玉母さんに見る処世術
豊作の案山子琥珀の月に映え
案山子にも世相を写すニュールック
心地良く五臓六腑に岩清水

尼崎市　河津正治

古書を食う紙魚もタテヨコ好きな道
町衆の顔で地酒を酌む祭り
窓際のリストラの顔ひとつ消え
虫干しへ過去帳ならぶ寺の庭

伊丹市　延寿庵野鶴

世論には機微の通じぬ事もある
亡夫の墓前とくとく注いで新酒の香
言過ぎの刺がささって痛む夜
三猿がささえてるのか母ひとり

伊丹市　樫谷郁子

豪邸など欲しくはないと かたつむり
鍼灸のせんせと朝の散歩する
無情風 順序不同で連れていき
壁のよな父の背中も丸くなり

宝塚市　飯西ミサヲ

お月さまが道づれだから怖くない
文句一つ言えぬ時代を生きて来た
門あけて母は何時でも待っている
足もとのもつれ気になる老いに入る

篠山市　円増純子

篠山市　西山八重子

やるだけはやった積りの背を伸ばす
大往生できるお寺の法話聞く
なるようになるさゆっくり飯を食う
栗拾い親子の絆たぐり寄せ

兵庫県　徳平毬子

鈴虫の澄んだ音色に母想う
栗餅が届き今年も秋の音
競い鳴く虫の音楽し秋の宵
胸の内明かしすっきり雲晴れる

兵庫県　広瀬房江

本当の事言うてから隙間風
顔ぶれを見てから酒の燗をする
お父ちゃん清く正しく見栄も張る
弱虫のまま弟が先に逝く

姫路市　服部一典

他人ごとがうちにもあった救急車
誕生日待てずに妻が逝きました
妻の声テープで聞かす百か日
薬飲めのめと案じた方が逝く

鳥取市　山本益子

無農薬信じてますが良く洗う
地酒酌み世紀見納め月見する
世紀末の歳末募金弾みます
新聞のチラシあれこれ目を肥やす

鳥取市　谷岡清子

杖頼り用足す夫と笑み交わす
難聴とて大事な夫の耳となる
幸せにみんな許して風清か
胸に止まる誇らしそうな赤い羽根

鳥取市　西尾敬之介

満天の星　花火には帽子脱ぐ
景品が欲しくて並ぶ老いた妻
おとぼけが堂にいってる老紳士
敬老の祝宴楽し下手な芸

鳥取市　近藤秋星

瀬戸　明石　しまなみ橋はみな渡り
四国旅行雨が歓迎してくれる
旅行が済んだら好天気が続き
熱燗で一杯欲しいこんな夜は

鳥取県　高尾京

移住百年苦労見せずにのど自慢
献体に医学部主催の慰霊祭
明日生きる為に血液検査する
石楠花のひと鉢枯れて悔む秋

鳥取県　竹森富久江

風のうた鈴も一役買って出る
穴を出て雲に乗りたい魔女の夢
競い合う日々に疲れた五十肩
木枯らしの吹くたび母牛を偲う

身に迫る借金もなく財もなく
しみじみと語って良さが見えて来た
転んでも手出しはしない親心
保存しているが出番のない古銭

鳥取県　山内芳江

嫁の座にいる現役が長すぎる
嫁の座を明け渡してから呆けてきた
惚けている姑と付き合う日の長さ
しきたりを見直す過疎の村おこし

安来市　原煩悩児

旅を行く日本人の急ぎ足
神様に誓った僕の青い鳥
二つ三つ猿が残した栗拾う
舞い終えた姫が飲んでるコップ酒

倉吉市　大下智子

旅先で我が家の天気気にしてる
旅先の写真うつりは澄まし顔
名所よりグルメの旅を思い出す
巡礼の旅を楽しむ歳となる

米子市　小塩智加恵

十円を入れた坊やに赤い羽根
運動会　先生借り物揃えてる
長生きで遺族年金もらいます
暑い夏　秋の山菜不作なり

横浜市　伊藤ふみ

達磨絵の前でしばらくにらめっこ
全自動女の腕を弱らせる
ラスベガス奇跡を狙う目と出会う

岡山県　土居ひでの

いたずらな風に火種の炎えたがり
ファッションが一足早い風に乗り
ひと皿によろこびを盛る母の知恵

米子市　森脇麗

美しい顔していても鬼を飼う
自惚れの強い薔薇には気を遣う
飾らない素直な嫁に和まされ

米子市　足立由美子

住所録めくると友の声がする
計画を立ててくずして日が暮れる
外出の時はいつでも弾む靴

鳥取市　夏目健一

損得の知恵が生み出す妥協案
真っ直ぐに伸びて伐られる竹もある
忍び寄る寒さ知っても逃げられず

島根県　松本聖子

コスモスにそっとストレス話しかけ
相談を亡夫に聞いてはみたけれど
老いたれど仕事のできるありがたさ

人生のバランスシート借り目立つ　鳥取県　西沖彰雄

頂点の人袖の下なぜか好き
好きだから畠耕す細い腕　島根県　多々納テル子

自自公の呉越同舟する握手
川柳と生きてく余生日々新た
投函をすませたあとのうまいお茶　出雲市　川島和歌子

百態の地蔵に百のよだれかけ
文化祭大輪菊の勢ぞろい
忍び来る襖の軋む夜半の風　出雲市　岡あきら

振り返り私の影を確かめる
雨上り真っ正直な畑もの
毎日を忙しくして無職　出雲市　加藤スズコ

農一路我慢の父母を見て育つ
桔梗一輪思い出秘める盆の月
台風でおくれましたと丸い月　松江市　小川注湖

四兆円という税金で破たん処理
十冊ののらくろ漫画青春譜
相槌を打つとこの友調子出る　益田市　岡田たけを

子のくるまで湯の町へ行く敬老日
田舎のバス途中で乗せる川の道
次世紀が近づき生きる欲がでる　倉敷市　撰喜子

無農薬虫と根気をくらべ合う
ストレスと無縁な暮し魅力ない
広い背ストレスも倍肩をもむ　倉敷市　家守政子

賑やかな父子の会話風呂の中
栗を剝ぐ母の背まるく秋夜長
太鼓判押した会社がリストラに　香川県　清川玲子

青空がこんなにきれい三分粥
わが城もじわじわ嫁の占領地
親離れしていない子が親になり　香川県　向山治延

バアさんは五日前から旅支度
過疎に住み人と猿との知恵くらべ
わたくしの余命は神にまかしとく　香川県　松村輝夫

鬼になり育てた馬子に敬われ
角つけた鬼が怖いと限らない
頬打たれ人に痛みを加減する

のろのろと渋滞に遇う盆がえり　松山市　山之内　八重美

虫の声なるほど秋だなと思う
Uターン立派な家が建つ田舎　今治市　渡　邊　伊津志

おかしさの中に涙が溢れ出る
人物　銭そんな順序で生きている
ペダル漕ぐ大橋秋の風になる　和歌山市　和　田　美寿子

平凡が幸せと知る夕ご飯
真っすぐに歩いていたとよっぱらい
昨日は元気で笑い今日は逝く　和歌山市　前　岡　健三郎

斬られ役バネに何時かは大スター
四季の贅滝は顔変え媚を売る
泣き顔は見せずピエロで翔んでいる　和歌山市　福　重　美　子

酒煙草自問自答で許してる
根気よく夢を買ってる宝籤
眠る森起こされそうな話合い　兵庫県　山　本　泰　子

ときめきを失くして女忘れそう
もう一度主婦と書きたい職業欄
胸張ってまかしときとは言えぬ歳

二日酔い妻の判決重過ぎる
ホントなら辞めるがましよノックさん
おてごろなバケツで作る原子力　秋田県　湊　修　水

美しい基準は無いと画人去り
米軍も日本を守る予算食い
遠足の園児が褒めて画を囲み　奈良市　田　中　賢　治

古希すぎてばあさんいやに華美になり
カラオケになじめず隅でビール飲む
今昔の時代のずれに迷う老父　奈良県　上　村　季世恵

本屋さんにくれば立ち読みしたくなる
川柳が心癒してくれる友
九ちゃんが何時もわたしの胸に生き　青森県　福　士　トキ

戦中派勿体ないが直ぐに出る
勿体ない勿体ないと貯めて死に
モーションを掛けては女迷わせる　東京都　吉　田　土　風

好きな趣味させてもらえる妻と居る
遣り繰りで簿外債務をひねり出し
せっかちな脳へ歯止めの深呼吸　横浜市　荒　井　広　和

横浜市　布山嘉信

オブラートに包む祝辞の美辞麗句
華の過去再就職の邪魔をする
ヘルメット脱げば意外や乙女なり

浜松市　田中知行

とぼけては妻に銭乞う秋の風
かくれんぼ寺のまわりは菊だらけ
河豚ばかり釣れて話になりません

吹田市　大谷篤子

髪洗う明日はきっと逢えるはず
孫を抱く胸に昔が蘇る
佳いことがありそうな朝シャワー浴び

守口市　井上桂

防波堤仲良く並ぶ太公望
秋日和魚つるより海の青
あな嬉し喫煙フリー防波堤

八尾市　鷲見章

秋冷えに毛布を肩に深くかけ
秋雨のそぼふる窓に灯をともす
台風の余波カーテンをもてあそぶ

大阪市　奥村五月

同窓会リストラ前の名刺出し
捨ぜりふ言った娘が孫見せに
黄昏に俺を呼んでる縄のれん

大阪市　三浦千津子

曼珠沙華のほてりに埋まる道祖神
再出発妻の明るさありがとう
条件が良すぎて別の不安湧く

大阪市　中村叡子

ご近所に告げず出かける一夜旅
老いの腹直ぐ満腹に空腹に
風邪薬とろりと甘い夢を見る

大阪市　伊藤博仁

持ってると思われたのか袖引かれ
退院の夫に携帯鈴がわり
包帯がずれて傷の治癒教え

八尾市　平川幸枝

熱帯夜アメリカザリガニ脱皮中
裏方に回りチャンスを物にする
ひとり身の家訓を作る旗印

八尾市　高橋明子

米余り瑞穂の日本どこへ行く
被告等はたやすく億と言うけれど
こつこつと働く者に税高い

羽曳野市　永田章司

月見酒すすきの用意つい忘れ
自自公に波瀾が見える批判票
日の丸と君が代急に威張りだし

泉佐野市　大工静子

ポックリ寺四十年過ぎ未だ死ねぬ
敬老日欠席をして折貰う
生き過ぎた生き過ぎました仏様

富田林市　山原昭水

同窓会二次会誘う女たち
開運を頼み賽銭忘れてた
まだ亡父の温もり残る将棋盤

兵庫県　安達厚

吾が城はたった六畳夢無限
外で出す男気妻に叱られる
窓開ける緑の風がほしいから

鳥取市　福島庸二

信頼を取り戻すのに厚い壁
目を閉じて瞼の中の姿追う
振り返る金木犀の香る路

鳥取市　松本つね子

生きて行く少々見栄も張りながら
介護保険情報走り色見えず
木枯らしに負けじと燃える老いの坂

鳥取県　藤山弘子

母からの梨の便りが届く頃
ダイエット厚い脂肪へ強い意志
稲刈りのおやつはいつもうまい梨

鳥取市　岡田信恵

被ばく事故汚染拡大食べられぬ
神無月薄着のままで油断風邪

鳥取市　中村金祥

細々と暮らす庶民に買えと言う
政党のカメレオンには舌を巻く

鳥取市　河田のり代

清流に鮎の数ほど子等はしゃぎ
駅弁に季節もとめて旅に出る

鳥取市　山口千代子

生かされて今宵名月仰ぎ見る
長生きをしたくない日としたい日と

高知市　澤村哲史

対象が違えば姉妹仲が好い
貧乏はプライベートな厚い殻

橿原市　西本保夫

落ちぶれても足の車は手放せぬ
昔なら悠々自適の生活かな

岡山市　清水金太郎

曽孫子の運動会見る望みもち
次々と悩みがあってボケられず

篠山市　谷田多美子

朝ドラもあすかになって柿みのる
月見会調子はずれのマイクもつ

（生田義一・江原秀夫・森本益弘三氏の句は53ページに掲載してあります）

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (107)

橘高薫風

昭和十一年三月号の路郎先生の巻頭言から。

第六十八議会は解散し、一手販売のような総選挙が行われた。雷が鳴り、地震があった。無闇と雪が降った。そして二・二六事変勃発である。

春寒し拾い手のない首二つ
我が世とぞ思う春にはならざりし
身代りの緋縅しぐらい着てて欲し
飜える文字は帰順の外になし
呼びかくる声は赤子よ兄弟よ

事変は数日で平静になり、野中四郎大尉は自決した。

勅命に抗して悲し雪と散る
二・二六事件忠義の裏表
建直し綾部でなくて興津の手

元老西園寺公爵は杖を大内山に運ばれた。この事変でその無気力さをはっきり曝露したものに、新聞とラジオがある。飼犬がお預けを食った形はあまり見っともいいものではなかった。（筆者註―こういう筋道は昨今の世相と似たところがある。この句この記事が三月一日発行の『川柳雑誌』三月号に掲載）

今からでも遅くはないと酒のこと
選挙違反あの料理屋の灯を思い

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のない日なり
聖書一冊菊一輪の二階也
勅題は何でしたかなと十二月
父のずぼらがいっそ目立つも十二月

句会吟

襟垢をためて恋でもあるまいか
歩行器の孫は芦屋で育てられ
桜かねと落ついている年になり
金があればうれしき春の雪なるに
あの頃は本を売っても逢いにゆき
洗面器女の客は譲り合い
洗面器さて勘定が気にかかり
煉瓦の下のみみずの如く生きるのみ

昭和十二年の句

お年玉位ならある暮の父
友達に別れた時がお元日
元日も二階二日三日も二階に居
ビルの窓誰を呼んでるのでもなし
闘病のそこにも春はさんさんと
春の日はねまきのままで暮れてゆく
夫婦あらそえり旅をしながらも
同情の最後の品に米俵
子が死んで葱や菜ッ葉の乳母車
とろろ昆布しおこぶ闘志衰えず
情痴の果てのひとり飯炊く
父・植木・小鳥・娘はうちにいず
千人針胡瓜抱えた手でも縫い

玉出駅踏切にて

日ぐるまも兵を見送る如く也
銃後々々飲まずに辻で別れたり
言うだけは言え言え若さ失うな
銀行のお世辞も気の腐るものの一つ

句会吟

大胆に男の顔を見直した
総辞職犬も一緒に引き揚げる
総辞職再び松の風を聴き
本復に庭の手入れを思いつき
本復をして辛竦な口をきき
包紙に鰻図案化されている
借着して今更僕は背が高し
菊一輪間借りの留守に匂うなり
間借りして無口いよ〳〵無口也

渺渺抄

八木千代選

プラトニックラブだったからおじぎする　寝屋川市　森　茜
もう誰も沈んだ舟を語らない　八王子市　播本　充子
一週間に一度は爪をつんでいる　枚方市　森本　節子
記憶装置をいじると溢れだすなみだ　富田林市　池　森子
いま目をつむればわたしも共犯者　同
侵食が始まる私のテリトリー　和歌山市　川上　富湖
愛もどきならコンビニの棚にある　同
白菜ザクザク絆を切るは易くなし　吹田市　山本希久子
おかしくないようにイメージトレーニング　出雲市　竹治ちかし
句読点大きな息をするところ　富田林市　大橋　鐘造
自己暗示わたしに勝る者はなし　和歌山市　玉置　当代
菊花展の黄色まわりに気を遣う　松原市　小池しげお
履かぬなら捨ててしまおう赤い靴　大宮市　新井　朋子
萩すすき　もっと大事な事がある　松江市　川本　畔
片方を外せばすだれ秋にする　西宮市　牧渕富喜子
秋たべて冬までたべる好奇心　大和高田市　鍛原　千里
鬼と神の間に出来たハーフです　鳥取県　新家　完司
わがままが何時まで通るシャボン玉　藤井寺市　高田美代子
プライドの欠片をハンカチに拾う　鳥取市　徳田ひろこ
手の上で豆腐に裁き言い渡す　和歌山市　古久保和子

方角に東西南北　順があり　横浜市　菱田　満秋
同穴を契りし日から好敵手　綾部市　藤田　芳郎
今日の事　今日に済ませる老い支度　箕面市　出口セツ子
石仏の首の安堵は何だろう　和歌山市　牛尾　緑良
火傷せぬ距離まで逃げて　あかんべぇー　羽曳野市　吉川　寿美
鈴虫を闇に放してから無口　和歌山市　木本　朱夏
今日生きる物を近くに置いている　米子市　足立由美子
理由あって泣いているんやほっといて　堺　市　河内　月子
勝てる物なんにも持たず旅に出る　兵庫県　大谷幸次郎
脱帽と囃す仲間に溺れとく　和歌山市　桜井　千秀
意地をはるのはよそう　うどんに腰がある　あきる野市　佐藤　季穎
私をしぼるとすこし水がある　八尾市　高橋　夕花
セロテープで貼りつけられている善意　島根県　松本　文子
革命を忘れ洗濯機を回す　横浜市　清水　潮華
生涯を躓きどおし吐く煙　鳥取県　土橋　螢
洗面器　歪んだままの顔洗う　弘前市　福士　慕情
ただいまのトーンがいつもより高い　横浜市　保田　絹子
がらんがらんで歩き疲れた骨の音　倉吉市　野口　節子
胸の真ん中に咲かせる沙羅の花　鳥取市　上田　宣子
没個性ビニールハウスのほうれん草　富田林市　藤田　泰子
お日さまをやすませてから考える　八尾市　村上ミツ子
瞬発力高めるすべを教わりぬ　尼崎市　春城　年代
無駄飯は課外授業の一つかも　宇部市　平田　実男
占いが吉と出たなら手を打とう　米子市　光井　玲子
みんな走る時は走って欲しいのです　堺　市　志田　千代
歯応えが欲しくてギネスブック読む　海南市　三宅　保州

制服を着て金太郎飴になる　和歌山市　川上　大輪
はるか彼方呼ぶ声のあり耳すます　西宮市　奥田みつ子
十六夜の月よ姉には負けばかり　西宮市　門谷たず子
嬉し涙の止め方がわからない　藤井寺市　太田扶美代
生え抜きと言う貌で咲くあわだち草　鳥取県　岩崎みさ江
頑なに守りに入る老いている　唐津市　井上　勝視
裏切るな　影はわたしの命なり　米子市　茂理　高代
看病へ夫の玩具になってあげ　大阪市　神夏磯典子
もう一度転べる余裕　起き上がる　羽曳野市　川田　晋
モナリザの前歯一本抜けおちた　大阪府　籾山　隆盛
老妻がしあわせと言う　有難う　大阪市　桝本　蕗児
コンビニへ朝一番の客となる　八尾市　高杉　千歩
頼りないのでまん中に座ってる　羽曳野市　徳山みつこ
眼を病んで秋の香りを持つ女　尼崎市　春城武庫坊
燃え尽きることを拒んでいる紅葉　鳥取市　夏目　健一
病葉を摘んでいのちの話など　弘前市　斉藤　劦
体臭が強くて少年のピアス　今治市　野村　京子
子が育ちやがて私の振り出しに　米子市　門脇　晶子
リフレッシュ磨けるものはみな磨く　貝塚市　池田寿美子
大屋根に包まれ出るに出られない　米子市　野坂　なみ
顔にパックもう時効です　笑っちゃお　今治市　塩路よしみ
逃亡記　止まらない時計に追われ　富田林市　片岡智恵子
傷口にまた手を当てている迂闊　堺　市　矢倉　五月
白い眼の林の中をニュールック　和歌山市　山根めぐみ
木霊の森がだんだん深くなる　砂川市　大橋　政良
曼珠沙華お地蔵さんの前うしろ　鳥取県　土橋　睦子

石段でポーズをとろう雨あがり　和歌山市　楠見　章子
もう待てぬまてよ来るかとバスを待ち　川崎市　和泉あかり
両親の骨を拾わにゃ逝かれない　倉吉市　米田　幸子
呑む打つの穴を家計に開けるのか　鳥取県　土橋はるお
罪びとの煙も白く同じだ　鳥取県　石谷美恵子
モノクロのメモリー宝ものになる　富田林市　中井　アキ
宝もの持たずひらひら身軽です　寝屋川市　岸野あやめ
綾取りの記憶をたぐる日暮時　横浜市　三村八重子
本心は湖底とことん澄みわたる　米子市　白根　ふみ
流れに逆らい私の舟が沈む　大阪市　川久保睦子
散策の靴が知ってる水たまり　弘前市　相馬　銀波
小春日のよう　うっとりさせるお人柄　大阪市　本間満津子
りんご落ちるまだ失恋もせぬうちに　和歌山市　福井　桂香
アラジンのランプ磨いている期待　島根県　伊藤　寿美
閉店のビラは秋雨より寒し　唐津市　宗　水笑
好きなのを一つ選ぶという試練　鳥取県　西原　艶子
肥えているだけで重い荷持たされる　寝屋川市　江口　度
近々に土に還るときりぎりす　米子市　青戸　田鶴
これ以上言うと私が小さくなる　鳥取市　春木圭一郎
さみしくて心の花を摘んでます　岡山県　富坂　志重
そこぬけに明るくさせている悩み　香芝市　大内　朝子
シナリオもテキストもなし定年後　豊中市　田中　正坊
上段を下段に変えてみた余生　高知県　桑名　孝雄
静かですソナタのリズム　水琴窟　弘前市　一戸　ツネ
だんだんにちゃらんぽらんに鳴る時計　堺　市　桜沢　千世
つり堀の魚は釣らぬ可哀相　愛媛県　中居　善信

築港まで泳いで見せたちちの愛　米子市　林　瑞枝
ドア開けて話す噂が恐いから　和歌山市　福本　英子
プリズムの上で踊っている二人　美祢市　安平次弘道
耳寄りの話持ち寄る吹きだまり　岡山県　山本　玉恵
木犀のかおりの中で立ち話　西宮市　西口いわゑ
それぞれに行くとこのあり日曜日　鳥取市　植田　一京
柘榴爆ぜまた一年が通り過ぎ　尼崎市　長浜　澄子
楽しんだ分はネジ巻くオルゴール　三重県　尾崎　勤
パッチワークのような御議論纏らず　唐津市　樋口　輝夫
世の隅で埋没される生き仏　和歌山市　山田　高夫
元気だと聞けば電話の用が足り　倉敷市　田辺　灸六
この先の家にはエンマさんが居る　鳥取県　乾　喜代志
一枚の鱗にいのち覚悟する　倉吉市　淡路ゆり子
灼熱の恋もそろそろ要介護　唐津市　久保　正剣
花はみな咲き切ってから愛を知る　枚方市　前　たもつ
茜雲　浄土の使者に違いない　八尾市　村上　剛治
一年分稼いで浜はおとなしい　和歌山市　榎原　公子
坐して掌を組めば己が見えてくる　今治市　越智　一水
病室の壁も聞き耳立てている　岡山県　小林　妻子
リストラの海に漂う首無数　日立市　加藤　権悟
傘のないわたしに声がかけられる　横浜市　長島亜希子
遮眼帯つけて走った青春期　泉佐野市　稲葉　洋
にんげんに賞味期限がついてない　鳥取県　林　露杖
風吹いて忘れ上手な歳となる　横浜市　近藤　道子
夫ちょっと煙に巻こう神無月　大阪市　渡部さと美
祭り笛　胸の奥から鳴っている　鳥取市　岸本　孝子

ヒゲを剃る男決断したらしい　横浜市　川島　良子
目的の駅でメークも出来上がり　尼崎市　内田美也子
気になって気にはならない日記かく　鳥取市　坂田和歌子
地球儀の隣同士がよくもめる　唐津市　市丸　晴翠
死んだふり覚え傷口癒えてくる　和泉市　中川　楓
重い荷があるから命張っている　鳥取市　福田　登美
表札に息子の名前ちゃんとある　鳥取県　田村きみ子
正攻法しか知らない友へお説教　大阪市　板東　倫子
小笠原流でラーメン食べられず　和歌山市　山口三千子
じんわりと地球の歪み忍び寄る　岡山県　土居ひでの
万葉の里で詩人の真似をする　倉吉市　松本よしえ
保身術するため秘書がいるみたい　和歌山市　福重　美子
弁解は男がすたる以下余白　吹田市　石原　靖巳
歳月や家の周りに錆びた釘　横浜市　金森　徳三
ストレスの胃がトントンと壁を打ち　横浜市　豊田　羊子
喝采に浮かれ足元すくわれる　札幌市　三浦　強一
童謡のカラスを知らぬ都会の子　青森市　漆戸凡々子
鶴千羽　地頭の声聞きにゆく　唐津市　相葉　あき

森茜さんのプラトニックが好きです。お辞儀をされた相手には、あの頃の胸がちぎれるほどの想いは伝わってはいないけれど、長い間ずっと心を支えて貰えたプラトニックラブ。一瞬の会釈にしても長い深い時間がありそうです。第一、好きになった責任があります。**播本充子**さんが淋しいと思われる沈んだ舟。秋の終わりでもあってひとしお切々として響きます。このところ私の周辺にも訃報が続くのです。脳天を割られるようなショックですが、いずれ自分も沈む舟。あとはどうにか回るものなんですね。容赦のないものですね。**森本節子**さんの爪切りは凄いです。何事も億劫になりがちの日常の中にこれほど意識を持って暮らすなんて。教えてくださって有難う。

—水煙抄

秀句鑑賞

—11月号から

浅田隆樹

どれ丈の物を捨てたら楽になる

中村叡子

物あまり、新品でもゴミになる。もったいない。ついでにプライドや煩悩も捨ててしまおう。きっと楽になる。

猛暑でもひねると水が出てくれる

和泉あかり

便利な世の中に人は次第にわがままになってはいないか。暑い夏であったが干ばつの被害までにはいたらなかった。ありがたい。

送ります言うた写真がぶれている

高島啓子

写真に限らず、このようなことがよくあります。最近はぶれた写真に価値があるとか。

貧乏で人の涙をすぐ貰う

有沢せつ子

むしろお金持ちほど冷たそうで。為政者のなかにもこのような人が多くいてほしい。

妻は留守カレーの匂い満ちている

巌田かず枝

妻の外出は長くなるのだろう。食事の用意がしてある。妻のいない家も少しほっとするが。カレーの匂いは幸せの匂い。

二次会の酒がなだめた肚の虫

三浦強一

腹の虫治めて帰る千鳥足

三浦千津子

腹の立つことは多いが、ストレスは酒に溶かすに限る。酒をやめれば元気もなくなる。そして明日の仕事はくそまじめ。

丸い人どっちに転ぶか判らない

瀧井勝

人格が丸いことは良いことではあるが、八方美人では困りもの。悪口の全然ない人というのも問題なのか。なるほどと思う句。

かごめの輪いつしか抜けてはばたく子

川島和歌子

子の成長は早い。あの可愛かった子とこの子とは同一人物かと思うことも。しかし別れを悲しむなかれ、またかごめの輪に新入生。

子沢山小走りぐせの母の下駄

土屋起世子

小路から子供らの喧騒が聞こえてきそう。塾なんか行かせないでください、お母さん。

くす玉が割れると森が消えてゆく

田辺鹿太

開発もそろそろ人が住みよくなるためのものではなくなった。鎮守の森の役割とは。

結び目を確かめてみる夫婦旅

近森功

縁があって結ばれた、その結び目は解こうにも解けない。いいなぁ、ゆっくり二人旅。

此の家は揺れぬ漬物石がある

猪森スミエ

いつごろからの漬物石だろうか。この家でしかできない漬物の味。建物はやがて壊れるであろうが、家族の絆は揺れることはない。

自己流の手話で通じる老い二人

坂東和代

これ、あれ、で意味がわかった熟年時代。今、手の動きひとつで意志が通じ合う。

摺り鉢を押さえてくれた手が恋し

平川幸枝

亡夫は愚痴をいいながら摺り鉢を押さえてくれた。男ひとりと女ひとりがいて夫婦なのではない。何万人分の手であった。

残ったらもらう約束皆売れた

榎本舞夢

謙虚さも時によりけりか。欲しいものは少し強引でも手にいれることにしよう。

女性コーナー

首香の丘

宮西弥生選

美人にはなれぬが笑顔にはなれる　熊本市　永田　俊子
生命線右と左の差を憂い　八尾市　高杉　千歩
自動車もバイクもおもちゃではないぞ　米子市　鷲見　正子
雑念を捨てたら見える針の穴　大和高田市　鍛原　千里
越えられぬ友達という太い縄　倉敷市　小野　克枝
新世紀しっかり踏んでから死のう　米子市　木村富美子
裏切りはわたしにもあるあなたにも　池田市　栗田　久子
橋一つ渡る思案がまとまらず　西宮市　門谷たず子
良い紅に染まる脱色するわたし　東京都　後藤　早智
この線を越えたら恥と心得る　堺　市　志田　千代
傷かくす嘘はことさら華やかに　西宮市　奥田みつ子
プライドという厄介を切り刻む　和歌山市　川上　富湖
ほんものの顔が欲しくて本を読む　鳥取県　西原　艶子
こぼれ萩父も時計も電池切れ　和歌山市　木本　朱夏
なまけ癖すっかりついてキャベツの葉　和歌山市　福井　桂香
片付けた部屋が寂しい貌をする　川崎市　和泉あかり
恐い顔で立っているのも仁王の情　八尾市　宮崎シマ子
彷徨うた分だけ丸くなる答え　富田林市　池　森子

乗り替えの切符が一枚おちている　富田林市　中井　アキ
すっかりは悟れぬままの命なり　鳥取市　植田　一京
ちんまりと座るいよいよ丸い母　和歌山市　福本　英子
夏枯れを朱に染め替える秋の風　富田林市　藤田　泰子
許すことできて自縄自縛が解けました　八尾市　高橋　夕花
想い出をひっくり返して天に干す　鳥取市　福田　登美
やがて散る淋しさ見せぬ蕎麦の花　鳥取県　土橋　睦子
肩軽くしてくれました聞き上手　羽曳野市　徳山みつこ
老人になっていたことつい忘れ　寝屋川市　森　茜
お茶お花少し息抜きしませんか　大阪市　津守　柳伸
正解でないとわかっている答え　藤井寺市　高田美代子
結論が出ず知恵袋振ってみる　鳥取県　石谷美恵子
故里の山にはたんと恩がある　岡山県　矢内寿恵子
賑やかに来て淋しさを置いて去り　吹田市　山本希久子
金魚のようにひとり遊びが上手くなる　和歌山市　吉村さち子
わたくしの後ろ姿をみるビデオ　寝屋川市　平松かすみ
昨日とは歩幅が違う月曜日　大阪市　神夏磯典子
つけ爪で足の先まで主張させ　横浜市　清水　潮華
背く日があるやも知れぬ娘の手毬　羽曳野市　吉川　寿美
渡る世間の鬼を数えたことはない　今治市　塩路よしみ
冷蔵庫の無駄を解決するあした　貝塚市　池田寿美子
どっかりと座って恐いものがない　倉吉市　野口　節子
逢う距離がやさしい女にしてくれる　松江市　川本　畔
太りすぎ骨はさぞかし脆かろう　鳥取市　坂田和歌子
スイスイと童謡ならばうたえます　堺　市　河内　月子

包丁とわたし時々研かねば　芦屋市　黒田　能子
せまいからまだくるなよと亡夫が言う　鳥取県　さえきやえ
弁解もせぬ親友を頼りきる　八尾市　生嶋ますみ
四季の流れ加速度つけて攻めてくる　鳥取市　録沢　風花
されど川柳足踏みばかり夕焼ける　西宮市　牧渕富喜子
ベール被って明日へ呼吸整える　和歌山市　桜井　千秀
地に還るまで命と舞いつづけ　岡山県　山本　玉恵
古里の風は柿の木から生まれ　西宮市　緒方美津子
木枯らしが遠い日の傷吹き起こす　寝屋川市　岸野あやめ
不揃いなりんごにも有る自己主張　横浜市　鈴江　純子
身の程を知れば怒りも風いでくる　香芝市　大内　朝子
銀河にもかけて上げたい虹の橋　寝屋川市　坂上　高栄
誰も知らぬ家族のクセを知っている　香川県　川崎ひかり
古希熟女思惑なんか気にしない　横浜市　保田　絹子
あげ羽蝶露地へ安堵の羽根休め　横浜市　豊田　羊子
訳知らんけどマニュアル通りしたら出来　大阪市　本間満津子
同じもの見ても十人十色なり　西宮市　西口いわゑ
友と呼ぶにはうすい縁の人なりし　尼崎市　春城　年代
二〇〇〇年への期待に鬼が笑うかな　大阪市　板東　倫子
饒舌な風とたわむれ元気です　横浜市　近藤　道子
何があろうと心に花は絶やせない　横浜市　秋元　和可
荒っぽい言葉こころの傷洗う　八尾市　村上ミツ子
天井のしみは神の足跡か　堺　市　桜沢　千世
痩せた猫わが身の周り徘徊す　米子市　林　瑞枝
意に添わぬ事には動かない木馬　尼崎市　長浜　澄子

深い傷許すに長い刻をもつ　米子市　小塩智加恵
本当のわたしに還る無の時間　出雲市　城　多喜
シナリオが変る男と女の間　富田林市　前田　登子
病葉はらり確と見ておく命かな　寝屋川市　籠島　恵子
思春期の投げるボールは刺激的　和歌山市　榎原　公子
足跡を拭いて置こうか鰯雲　和歌山市　上地　忍
少年に心和ます海が無い　倉吉市　米田　幸子
悲しみを越えて筋金入りとなる　鳥取県　山内　芳江
喫茶店の椅子から伸びる暇な耳　和歌山市　古久保和子
つながれた菜箸離婚ふと思う　今治市　野村　京子
鈍行に土の匂いと陽の匂い　横浜市　三村八重子
ハウスミカンころりと軽い愛告げる　弘前市　佐治千加子

俊子さんの句―「美人には……云々」「笑顔にはなれる」という作者の可能性が私は心から好きである。昔から美人は無愛想で冷たいと言う、然りである。笑顔のある人生ならば、自他ともに気持のよいものである。**千歩さんの句**―面白い句。思わず両手を眺めると成程成程。左右の違いに大発見。さすがに絵ごころのある人である。千歩さん生命のある間は生きられます。気にしない。気にしない。**正子さんの句**―下句の「おもちゃではないぞ」と大きくドライバーに叫ぶ声が聞えるよう。果してドライバーの耳に入ってるか、どうか。あまりにもマナーが無さすぎる車が多い昨今です。**千里さんの句**―全体の句の流れが実感性あって共鳴する。「雑念を捨てたら」は解決の可能性を意味してるかも。下五の「針の穴」は作者のこれまでの歳月への達観かも知れない。如何にして雑念を捨てるのか、千里さん教えて下さい。

間

籠島恵子選

一間から二間へ汗の跡がある　慕情
束の間の幸せだった揚げ花火　(海)洋
つかの間の命をかけて虫すだく　松煙
黄昏れて間尺に合わぬことばかり　(高)美代子
間のびした顔がスパイス待っている　とし子
床の間に飾れば僕の書も映える　恭昌
目線下げて間合いを保つ思いやり　玉恵
落語家の羽織ゆっくりおろされる　一壺
善人は隙間だらけと言う詐欺師　克治
平行線越せぬスタンス神と僕　弘一
行間に庶民が泣いている歴史　俊子
間を置かぬ人が時どき切れている　(松)輝夫
間の抜けた私をひとり置き去りに　南花
束の間を炎やして果てる絵蠟燭　たず子
間欠泉　地球の悩む溜息か　高栄
メリットはないが気のいい仲間たち　靖巳
束の間の幸せ虹が美しい　(塩)よしみ
間を置いて妻の助言が効いてくる　岳水
お隣との間に見えぬ垣根あり　たもつ
会えば酒そんな男の間柄　周信
昂りを抑え間をおく煙草の輪　勝視
息つく間欲しくて握る花鋏　ただし

合掌の指からポロリ落ちた欲　(川)ひかり
妻は旅茶の間にでかい穴が空く　清史
現役の間に趣味をためている　圭一郎
間をおいて言い訳の嘘組みたてる　時弘
隙間だらけの心で愛を膨らます　大輪
辛口で世間斜めに切るジョーク　彩子
同じ事何度聞いてもよい間　扶美代
間のうまさ思わぬ福を連れてくる　伊津志
おことばを返す時間を下さいな　きみ子
迷うてる間に輪から外される　アキ
やまびこの響く空間大切に　劫
行間にはせた想いの真っ赤っか　朝子
間を盗む目が光ってる舞台袖　重人
たかぶりに少し間をおく深呼吸　勝美
私も背伸びしている孔雀の間　充子
佳
行間の謎とけぬまま焼く手紙　鉄治
悪が生まれる人差し指の間から　勇太
腹が立つのか仏間から出てこない　螢
瞬間が被爆の母にまだ消えず　遠野
鈍行に間のとり方を教えられ　保州
人
そのあいだ　後ろ向いててあげましょう　しげお
地
間延びした埴輪の顔にある宇宙　あずき
天
あなたとの間にせせらぎを流す　徳山みつこ
軸
車間距離詰めてきそうな定年後

絆

杉本孝男選

過信した絆に煮え湯飲まされる　みね
虹の橋渡る二人にある絆　章久
振り返る未練を叱るのも絆　正雄
きっちりと男結びをした絆　妻子
友情の絆倒れて身にしみる　圭一郎
友情の絆奢りに釘を打つ　権悟
美しい嘘にとぼけている絆　良知
幾たびも結び直してきた絆　寿恵子
人間の絆は刃では切れぬ　宵明
丸太橋かけて絆を渡らせる　はるお
鈴振って神との絆確かめる　仁緑
目に見えぬ固い絆で結ぶ恋　宗明
争えぬ親子の証団子鼻　満秋
手話一つ覚えて絆深くなる　劫
親と子の絆が揺れている介護　勝巳
盲導犬親より強い絆です　美子
人と言う絆がつなぐボランティア　哲男
絆とは切り取り線のことらしい　緑良
遺産分けやがて絆の切れる音　正剣
家系図に消したい絆二つ三つ　潮華
自閉の娘夫婦の絆太くする　ミツ子
遺言書開き絆が揺れてくる　旋風

焼香の順が決っている絆　寿美
好き嫌い言えぬ絆にある悲劇　ちかし
鉄格子切れぬ絆が泣いている　喬水
翔んだ娘が隠れて墓参する絆　恭昌
花でいる時だけだった蝶との絆　正子
結論は愛が結んでいる絆　(川)ひかり
初恋はガラスの絆だが一途　健一
とても平凡とても物足りない絆　扶美代
盤石の絆横揺れにも強い　帆雀
臍の緒がいちばん知っている絆　しげお
纜(ともづな)を涙で外す別れ船　幸夫
ジャンケンポン絆深めていくあそび　日枝子
他人から見ると肩入れする絆　善信
ナースとの絆が生きる試歩の杖　狸村
百舌鳥が鳴く今日こそ絆断ち切ろう　英子

佳

化かされて絆あじさい色になる　雄々
楢山でまだ引き摺っている絆　大輪
百歳を持てあましてる絆たち　典子
妻の後真っ直ぐ追うて逝く絆　たもつ
獄窓のいのち絆へ詫びている　アキ

人

お浄土へ行ける親子という絆　螢

地

離れると真っすぐ見える血の絆　勇太

人

一本のザイルを握り合う絆　三宅保州

軸

ひと言が導火線にもなる絆

とりあえず

加島由一選

とりあえずお湯をたっぷり沸かせとく　しげお
とりあえずイエスのサイン出しておく　鐘造
とりあえず預金通帳たしかめる　扶美代
とりあえず合格したと言う電話　妻子
とりあえず通させておく横車　勇太
とりあえず先に油を入れてくる　帆雀
とりあえず参加に丸をするハガキ　慕情
愛の巣は暫時一室だけで足り　凡々子
入学をしてから進路考える　充子
とりあえず過去は自分で消しておく　日枝子
とりあえずはいと返事をしておこう　ミツ子
とりあえず赤チンつけるかすり傷　潮華
とりあえず黒いネクタイ持って出る　あずき
大学院出てとりあえずフリーター　晴翠
とりあえず電話あとから長い文　タミ
とりあえず頭を下げる捜査ミス　水笑
無心話濃い目のお茶を出しておく　勝視
とりあえず飯はたっぷり食っておく　朝子
とりあえずビニールシートかぶせねば　(志)千代
とりあえず昨日の傘は干しておく　たず子
とりあえず土に預ける豆の種　あやめ
とりあえず無事だとだけは電話する　一風
騒ぐ血がありとりあえず朝を待ち　吉之助
とりあえず出る釘しかと打っておく　靖巳
とりあえず至急現場に参ります　権悟
とりあえず嵐をさける策を練る　隆風
とりあえず好き好き好きと言うておく　重人
同棲をして結婚を考える　靖雄
とりあえず君の心に住んでみる　健一
とりあえず柳にジャンプくり返す　アキ
とりあえず会って見たらと母乗り気　清芳
とりあえず別居しますと譲らない　時弘
介護保険見切り発車でないように　保州
とりあえず白旗だけは持っておく　大輪
対策の遅れで配るにぎりめし　満秋
とりあえず嫁の立場で剝くりんご　ツネ
とりあえず息子に家事を教え込む　正子

佳

とりあえず介護講座に妻と出る　四郎
とりあえず今日は黙ってみてやろう　きみ子
とりあえずしておくことの箇条書き　實
とりあえず手ぶらで走る火事見舞　周信
とりあえずあなたに首輪つけておく　(松)輝夫

人

水飲んでそれから善後策を練る　岳水

地

とりあえずここら辺りが妥協点　(川)ひかり

天

やっかいな事は酒でも飲んでから　出口セツ子

軸

予備校の願書ついでにもらっとく

初歩教室

題―終り

吐田公一

川柳塔の祖師麻生路郎の言葉の中に〝一句を残せ〟というのがある。色々な意味が含まれているが、自分の生涯にとってこの一句こそはという句を残せという意味と、一句毎に生涯をかける推敲をせよという意も含まれていると私は思う。たまたま当教室の勝間タツエさんが私の手許へ送って来られた句に、

雨の酒逢いたい人はみな遠し

とあった。見事な句で深い感銘を受けた次第。誰でも時にすばらしい句をものにすることもあるが、まだ句歴の新しい方にはそれが分らない。で時には先輩なり指導者なりに、ご自分の句を見ていただいて批評を乞うことも前進への一歩になると思う。

添削句

○終電の酒の臭いのない不況　トシエ

着想はいい。終電の酒のとのが続き不協和音の感じ。終電にとすれば――

○終盤に裏切りをみて酒に負う　邦昭

この状況には終盤より土壇場がいいと思う。

▽土壇場の裏切りへやけ酒を飲む

○茶柱に満足だった終い風呂　禮子

中七に推敲不足がみられる。

▽茶柱にあやかった日の終い風呂

○生真面目な終止黙っている男　煩悩児

終始黙っている男だけでは川柳にならない。

▽黙ってた男最後に吐く意見

○一日のドラマが終る赤い夕陽　トキ

下六がこの句の余韻を削った。

▽一日のドラマが終る夕陽落つ

○電話終えた妻の額に光る汗　正雄

単に光る汗では汗の内容（暑いのか興奮なのか……）がわからない。

▽電話終え冷や汗ぬぐう妻の顔

○勝ち残り最後に負けた忘れない　輝夫

句が切れ切れで流れが悪い。決勝＝最後の勝負

▽決勝に負けた涙を忘れない

○除夜の鐘夜空に響き胸を占む　一歩

今年の除夜の鐘は二千年を迎える鐘だけに、他の言葉を省いてもこの二千年を――

▽二千年迎える除夜の鐘が染み

○アンコール終えても拍手なり止まず　山雅子

終りと拍手をむすびつけた句は多かった。

▽アンコール終え感動の夢に酔う

○終りまで炊事洗濯する羽目に　一典

中七を家事の二音字で纏めると、五音字が生かされ作句にゆとりができる。

▽終りまで女に家事は離れない

○これで終り再出発の明り見え　郁子

原句もいいが

▽リストラも終り再出発の朝

○老になり人生ももう終りかな　美寿子

もう少し希望のある句を

▽人生の終りを飾る老いの趣味

○縞の財布もげっそり痩せて旅終る　四三郎

現在では縞の財布は流行っていない。むしろ死語に近い。げっそりも冗句

▽フルムーン財布もやせて旅終る

○終りあるから精一杯に今日を生き　セツ子

上七を少し固い言葉だが上五に

▽有終へ精一杯に今日を生き

○西空にさよならを言う明日に夢　トヨ子

「を言う」が冗長

▽西空にさよなら明日の夢を抱く

○九回の終りに咲かす子の粘り　栄翁

九回の終りが説明的

▽子の粘り勝ちサヨナラのホームラン

○意味もなくもれるため息しまい風呂　民子

上五が冗句

▽一日のため息もれるしまい風呂

○長寿の世人生終り先の先　宗　明
下五の措辞がまずかった。
▽人生の終りも延びた長寿国
○痴漢かも最終列車身構えて　美恵子
上五は言い過ぎ。表現はどぎつくていい場合もあるができれば穏やかにありたいもの
▽不審者へ不安がつのる終列車
○明日がないこの世は終り世紀末　晩翠
ここまで言い切ると味がない。
▽世紀末予言気になることばかり
○定年を飛び立つ鳥が机ふく　宏
中七を簡略して、このような場合は俚諺を利用するといいと思う。
▽立つ鳥が後を濁さぬ定退日
○惜しまれてベテラン最後幕を閉じ　君江
時事吟的に
▽惜しまれて中座最後の幕を引く
○ビデオ見てあれが終りね旅日記　茂代
中七の意味が中途半端
▽ビデオ見るこれが最後の旅日記
○今年こそ終りにしたい不況風　勲
願望はよく分ります。
▽世紀末吹き荒れている不況風
○はいおしまいと聞いて拍手のもみじの手　羊子
できれば具体的な内容を——
▽マジックが終り拍手のもみじの手
○終りがある神の持ってるプログラム　サト子
終りがあるだけではプログラムの終りと誤解を招くおそれがある。
▽僕の死が載ってる神のプログラム
○悪い癖終り待たずに帰り出す　美子
上五がいま一つ
▽終いまで待たずに帰る義理の会
○落葉掃く凡てが終りの幕引かず　てる子
ひとり合点の句といえる。
▽世に未練ないが幕引きまだ早い
○遺言に宇宙葬でと書き加え　つよし
宇宙葬とはちとオーバーでは?下五の表現はうまくまとめられている。
▽散骨にする遺言を書き加え
○終章に妻との苦節書いておく　よしこ
終章であるから苦節よりは—
▽終章に妻へ感謝とある日記
○エンディング浸る間もなくコマーシャル　靖雄
着想もいい。軍配は原句に
▽エンディング浸る間もなし家事多忙

佳　句

終りまで旅と道楽道連れに　賢治
事故多発終りにしたい手抜きミス　章司
子育てを終え老春は花盛り　要子
遺産なく借財もなく幕を閉じ　志重
赤字線これが終りの電車とか　敬之介
無事任期終り明日からただの人　彰雄
そして又鍋底みがき今日終る　てる代
妻の愚痴終らぬうちに寝てしまい　(鳥)玲子
自分史の終章ゆとり持って書く　ひさ乃
胸三寸終りの科白だってある　(西)八重子
散歩道孫の歩幅で日がくれる　美也子
終の日のあれこれ話し合う夫婦　梓
ああ無情わたしの前で売り切れた　純子
終列車始発列車の客も乗せ　和可
トラブルもあっさり終ると精がない　円女
花金の仕事を終えた屋台酒　賢
未練なく終りになった米作り　よし子
終りまで聞かぬ話を早とちり　芳江
幕引きのミスで舞台が終らない　泰雄
追伸の終りにそっと金に触れ　徳三
髪切って終りにしたい夏の恋　知華子
終着は図太く生きて土になる　政子
終バスが通って鍬の腰のばす　山平
(御地の終バスは早いのかな)　(三)八重子
大役を終えて安堵の酒うまし　幸枝
限りなき終りはふいにやってくる　彩子
終電車今日の疲れを置いて降り　禮子
解けぬ輪を一つ残して愛終る
(愛と憎しみは紙一重)

私の句

倶会一処終の住み処となる高野

国民文化祭・ぎふ'99開催

第14回国民文化祭・ぎふ'99川柳大会は、10月24日に岐阜県郡上郡八幡町の郡上八幡総合文化センターで開かれた。事前投句者は一般2343名、小中学生1751名、当日出席者544名。大会各賞は次のとおり。

本社同人の中原諷人氏が文部大臣奨励賞に輝いた。

◎一般の部

文部大臣奨励賞

花になり実になり踊り抜く系譜　鳥取　中原　諷人

国民文化祭実行委員会会長賞

鮎供養済めば鮎焼く膳が待ち　宮城　佐藤　明子

岐阜県知事賞

人情が迷子になった世紀末　愛知　小久江明子

国民文化祭岐阜県実行委員会会長賞

青年の主張ずぼっとど真ん中　広島　大石　新平

岐阜県教育委員会教育長賞

英雄の光と陰を見た歴史　岐阜　大久保卓次

八幡町長賞

城下町いくさ嫌いの古のれん　青森　西山　金悦

国民文化祭八幡町実行委員会会長賞

戦争がどこかで紅葉真っ盛り　兵庫　小松原爽介

八幡町教育委員会教育長賞

竹の皮で包むとうまい握り飯　岐阜　平野あずま

㈳全日本川柳協会会長賞

移植する苗に大樹の夢がある　大分　宮崎衣美子

岐阜県川柳作家協会会長賞

一望に千里呑み込む天守閣　山口　大渕　達也

◎小中学生の部

文部大臣奨励賞

鮎もまた傷つきながら川のぼる　鳥取　乾　優香

国民文化祭実行委員会会長賞

真ん中にどうどうと行くぼくがいる　岐阜　田中　鉄矢

岐阜県知事賞

お城から今日も元気をもらってる　愛知　相羽　美晴

国民文化祭岐阜県実行委員会会長賞

腕まくり父が踊りの輪の中で　愛知　鳥居　和美

岐阜県教育委員会教育長賞

真ん中へぼくより先に友の絵馬　愛知　杉浦　哲郎

八幡町長賞

車いすぼくもゆっくりおしてやる　岐阜　笠野　陽介

国民文化祭八幡町実行委員会会長賞

学校も春から夏のかおになる　鳥取　原　ゆかり

八幡町教育委員会教育長賞

たかゆき君てんこうしたよかなしいな　愛媛　井原　森生

㈳全日本川柳協会会長賞

お城から見ると花火が目の高さ　岐阜　三輪　紗弓

岐阜県川柳作家協会会長賞

花びらが優雅に踊る川の上　広島　伊藤　梓

鹿野町に文部大臣奨励賞二つ

本社同人の文部大臣奨励賞受賞者は林荒介政岡日枝子・鷲見正子の三氏。三人とも鳥取県であり、今回も鳥取県の中原諷人さんが受賞した。しかも、小中学生の部の乾優香さんも同じ鹿野町、一つの町から同時に二人の文部大臣奨励賞とは…。鹿野町及び鳥取県の川柳に対する熱意、レベルの高さが窺える。

諷人さんおめでとう

鹿野みか月会長　森山　盛桜

このたび、第十四回国民文化祭・ぎふ'99において、当会の中原諷人さんが文芸祭川柳部門で、文部大臣奨励賞に入賞されたことは誠に喜ばしい限りです。

また、彼は長年を母校の町立鹿野中学校で川柳を教えており、今回、川柳クラブ員ではないが一年生の乾　優香さんが文部大臣奨励賞、二年生の原　ゆかりさんは国民文化祭八幡町実行委員会会長賞を受賞し、こういう形での受賞は前例の無いことです。

この件は、十月二十七日付の日本海新聞が大きく取り上げ、広く県民の皆さんに知って頂くところとなりました。

前述の三名、ジュニア部での入賞の内示に諷人さんの特選入選も加わって、自家用車で家族共ども大挙して十月二十三日の岐阜行。私も県視察団の一員で（尤も螢さんの代理）、由多香県川柳会長に荒介・瑞枝ご夫妻、亜弥さん、艶子さん達と貸切バスに揺れて岐阜。

当日発表句を加え、特選二十七句の頂点に諷人さんも入賞して、表彰式における三人、とりわけ諷人さんの緊張感に満ちた顔が印象に残る。今回の受賞句は、独特の感覚で捉えた彼の息遣いが聞こえる佳句だと思います。

狙って取れるものでありませんが、しかし、決してまぐれで取れるものでもありません。

川柳に対する情熱と真摯な姿勢が実を結んだと言えましょう。益々の活躍を祈りたい。

生涯を踊り抜くでしょう

中原　諷人

第3回国民文化祭ひょうご'88（神戸市）で入選楯を二つ頂いた事が病みつきにという訳でもないのだけれど、この時の国民文化祭のイメージが脳裏に焼き付いて離れない。

「日の丸の白地に文字を書くなかれ」の作品が文部大臣奨励賞を受賞。北藤七星氏の作品だが、授賞報の届く目前の他界で、家族の方の代理受賞。琵琶による受賞句吟詠など盛り上がる好演出もあって感動したことがある。

第8回いわて'93（花巻市）の文部大臣奨励賞は政岡日枝子先輩に輝き、私は第8回国民文化祭実行委員会会長賞（四位）の受賞であったが望外に嬉しかったことを憶えている。

第9回みえ'94（津市）・第12回かがわ'97（高松市）なども愉しい思い出を綴ってきた。

そして本年、第14回ぎふ'99（八幡町）で久しぶりの入賞。三万五千句を遙かに越す出句数を篩にかけた受賞のせいか唇に電流を感じるほどの感動であった。長良川の鮎は鯨ほどに化けていた。賑やかな大漁節である。

母校の中学校クラブ講師は昭和63年5月からと記憶するも流れは速いものである。

クラブは午後四時頃からで、丁度小学生の下校時に遭う。ある日、私の歩く真似をして「あの小さいおっさん踊っているみたい…」と見せられたことがヒントの「踊り抜く」であり、自分の歩き方を今更に視つめると共に皆さんへの感謝を重ねて踊りたいと思う…。

エッセー

飛騨高山紀行

早川盛夫

久し振りの高山、それは実に二十数年振りのことである。昔、山登りをやっていた頃往き帰りによく利用した町である。ここは北アルプスへの登山駅にもなっていて、乗鞍岳、双六岳を始めとする槍ヶ岳、穂高岳、笠ヶ岳を目指す登山者でシーズン中はかなりの賑わいを見せるところである。

私が高山を訪れる時はいつも登山の時ばかりで、ここを通過点として利用していたに過ぎない。東京から夜行を使って松本へ入り、穂高岳へ登って高山へ下りる。あるいは逆に早朝高山へ着くとたいがい朝の四時か五時頃ということですぐバスかタクシーで登山口迄直行ということになる。従ってゆっくり高山の町を散索するなどということは今迄になかったことである。

でも今回は違う。山登りではないし、特にこれといった当てのある旅でもないので気儘にその辺をぶらつくことも出来る訳だ。しかも気の置けぬ幼友達と三人の至ってのんびりした車の旅である。

私の運転で犬山を昼頃に出発、四十一号線を飛騨川添いに走って、高山へ着いたのは四時近くになってから、今宵の宿は知る人ぞ知る「長瀬旅館」である。昔の遊郭の跡という高山で一番旧い老舗旅館で、数多くの文人墨客が宿泊し多くの書画を残していることでも有名だ。場所は上二之町、長い格子構えに家の前を流れる川に象徴されるまさに小京都高山の風情である。

京都をこよなく愛した城主金森長近が、天正十四年（一五八六）この地に赴任すると宮川の流れを鴨川に見たてた町造りを始め、東山には由緒ある寺院を配し、川添いに紅殻の出格子が連なる美しい町並を並べて、まさに小京都と呼ぶにふさわしい高山の町を構築していったのである。

特に宮川の東、上一之町、上二之町、上三之町は、軒を低く抑えた出格子の美しい昔ながらの町並で、家の前を清水が流れ今でも江戸時代の城下町の名残りを色濃く留めているところである。

そんな町並の一角に「長瀬旅館」がある。玄関を入りスリッパに穿き替えると、そこはもうギャラリーである。右側のケースに富岡鐵齋の衝立と若山牧水の色紙が目に飛び込んでくる。鐵齋の実に豪放な筆致で摑かれた墨蹤に息を呑む思いである。

そして牧水の色紙、

幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

若山牧水がひとり徒歩で白骨温泉を経由して上高地へやってきたのは、大正十年九月十五日のことである。

―私はいつか異様な興奮を覚えていた。これほど大きく美しく、そして静かな寂しい眺めにまたと再び出合うことがあろうか、これはいっそ飛騨へ越す予定を捨ててここに四、五日を過ごして行こう、そのためどれだけ自分の霊魂が浄められることであろう。―

その時の紀行文から察するとえらく感動して短歌を詠み、恐らく河童橋河畔にある六千尺旅館へでも泊ったことだろう。

上高地に名残りを惜しみながら平湯を歩いて高山迄行き、この「長瀬旅館」に泊ったものと思われる。

部屋に案内されると、ここが高山のど真ん

中とはとても思えない静かな庭に面し、ちゃらちゃらと小川のせせらぎが耳にやさしい。しかしこの儘部屋に寛いでいることも惜しまれ、浴衣に着替えると再び先程の玄関へ足を向ける。あるはあるはその数たるや半端ではない。

左側のケースに伊藤博文の欄間額、谷文兆の三幅対の掛物など、そして、

葡萄に種があるように
私の胸に悲しみがある
青い葡萄が
酒になるやうに
私の胸の悲しみよ
喜びになれ

高見　順

の色紙が私の詩心を掻きたてる。さらに菊池寛、野口雨情、徳富蘇峰、北原白秋、村上元三、円地文子、火野葦平、久米正雄と数えだしたら切りがない。森繁久弥などの有名芸人や映画監督など著名人のものばかり所狭しと並べられているではないか。

その中でもとりわけ井上靖は、山に関して造詣は深かったようで、というのも昭和三十一年暮れから一年間に亘って朝日新聞に連載した「氷壁」執筆の為、上高地から穂高岳へ登り、何度かこの宿に泊ったのではないかと思われる。

小説は、魚津恭太と小坂乙彦の著名な二人の登山家が冬季未登攀の前穂高東壁に挑み、トップを行く小坂がナイロンザイルが切れて墜死する事故を小説化したもので、当時この事故をめぐる様ざまな臆測が流れ、切れる筈のないナイロンザイルが何故切れたのか、事件性も取り沙汰されて世間を騒がせたものである。ザイルの衝撃実験まで行われて興味ある出来事であったが、結局最後には魚津恭太も滝谷の岩壁に落石に遭い、死を遂げることになる。

そんなことを思い巡らせながら飽きることなく眺め回していると、もう何処へも行かずこの儘この宿で過ごしてもいいという気持ちになってくる。

食事のあと庭下駄をひっ掛けて三之町から国分寺通りへ散策に出掛ける。この通りで毎年行われている川柳あんどんを見る為だ。些かほろ酔い加減の覚束ない足どりであるが、山国の冷気がかえって肌に心地よい。

新聞などで募集された入選句が約百句ほど、あんどんに書き込まれて商店街の両側にずらり吊るされている。明りが灯されていてとてもきれいだ。夏の夜を楽しむ実にいい企画だなと感心しながら下駄の音を響かせていく。

途中国分寺へ寄って見るがまっ暗で何も分からない。樹齢一〇〇〇年を越すという垂乳根の大イチョウ、文化四年に名工水間相模によって造られたという三重塔もシルエットのような恰好で眺め回しているに過ぎない。まだ八時前だというにこの時間に高山一の繁華街国分寺通りも人影は疎らである。商店のシャッターも閉まり始め、川柳あんどんもそろそろ仕舞われだした。

高山の朝は、宮川添いと陣屋前広場の二ヵ所で開かれる朝市で始まる。その朝採れた新鮮な野菜果物に、それぞれの家庭で造られる自家製の漬物などの袋詰めが戸板に並べられ、おばさん達の飛驒ことばで賑賑しく始まる。大半は旅行客で早朝からこれを楽しみに集まってくる。昨夜少し呑み過ぎたせいもあって目覚めは遅かったが、一風呂浴びてからすぐ目の前にある陣屋迄出掛けた。チョンマゲを結った俥屋さんがいたのには驚いた。こうして旅には様ざまな出合いがあり発見がある。そして何より心をおおらかに豊かにしてくれる。だから私は旅が好きなのである。山であろうと海であろうと一向に頓着はしない。

寺尾俊平さんを悼む

秋が今年は音を立て

橘　高　薫　風

寺尾俊平さんが死ぬ。

突然のようでもあり、当然のようにも感じた。常に生死を見つめてあがき続けた川柳作家であった。

寺尾俊平さんは善魔です。それ故、俊平邸が新築落成したとき、私は勝手なことながら善魔堂と名付けました。

文芸をたしなむ者は、魔物でなければなりません。芒洋たる覇気や多分の狂気のあった方がよいとの意味合いです。魔物といっても陰々滅々の悪魔では、庶民の闊達な生活や心情を表現する川柳には向きません。暢適にして鷹揚な善魔がふさわしいのです。

右は俊平さんの第二句集『風の中』の解説の書き出しの部分である。

寺尾俊平、時実新子、そして私は、川柳に手を染めた年代が同じであることから、同期の桜と称していた。神戸で仲間に「同期の桜の会」を催してもらったこともあった。

あいつには負けないぞというライバル意識とか、何らの気負いとてなく溶け合った気分で、頼めば頼み甲斐のある存在感を持ち続けてきた。

秋が来て笛は太鼓を恋しがる

これは私の句。笛は痩せた私、太鼓は太っちょの俊平さんであることはすぐにも分かる。

そして二人は弥次さんと喜多さん、あちらこちらと川柳の旅をたのしんだ。

昭和四十三年、初めて柳都川柳社の大会に出た、その往路と復路、能登半島一周と佐渡島観光をして、それぞれ次の句を成した。

てんと虫ここにも小さい輪島塗　薫　風

尺取虫が樹の上から見た海だ　俊　平

二人の句のスタイル、特徴がよく出ていると思う。このように二人になるとその個性が触発して、より明確に対応することを、一般にはライバルと言うのであろう。ライバル意識のない自然なる相棒を持つお互いは、その点でも幸いが多かった。

俊平さんは今年の二月葉文館から『海が砂漠か、砂漠が海か』と題した句文集を出した。柳誌『ますかっと』の第三雑詠の選後感の収録であるが、とてもやさしい。この欄で育った新鋭作家は全国的な存在だった。

山陽柳壇の選評も、投句者と同じ目線で物を言う語り口であった。最近、そうした若い世代の作家が、目先の利害だけで行動する軽はずみを嘆いていたが、俊平さんの川柳界への貢献は、この後進指導に成果のあったことだと思う。

陶淵明が好き、タリム盆地の砂漠の中をさまよう湖、ロプ・ノール湖にあこがれた俊平さんは、荒ぶる年の秋の最中にこの世を去る。

俺たちは、そろそろ伯夷・叔斉になろうよと述懐していたのに、定金冬二氏の葬儀に大阪へ来て、風邪を引いたらしい。

連れ添って歩いていた一人が、落し穴に落

ち込んで消えたような果敢なさであるが、本誌十一月号の巻頭言のあとの私の二句は、その死を予測しているようで、胸がつぶれる。

しのび寄る秋が今年は音を立て
芋の葉の露は仏舎利然とまるい

寺尾俊平さんを葬る

濱野奇童

寺尾俊平さんの訃報を聞いたのは、隣町の川柳勉強会から帰ったときだった。一瞬まさかと耳を疑った。あの元気者の俊平さんである。過去何回か、窮地を脱出され、「元気だよ」と、にこやかな顔を見せてくださっていた俊平さんのことである。今年の西日本川柳大会にも、お元気なお姿を見せてくださった俊平さんである。

十月十日、鳥取県川柳大会の席で、四度目の救急車でのご入院を耳にした。今度はという不吉な予感が走る。

俊平さんは、体格もよく活動的で、外見は極めて健康そうであるが、昭和四十年代後半から奥さんと交替に何回か入退院を繰り返しておられた。その病軀を押して、病気のことなど微塵も見せぬ川柳活動を続けられていたのだ。

平成七年末のマスカット誌に「むしろ大宅の病死に憶い濃き冬ぞ」と、三島由紀夫事件を思い起こされた後緊急入院、何日間かの人事不省の日を送られた。取り巻く誰しもがもう駄目かと思わされた大病であった。お見舞いに上がったときの嘘のようなお元気なお顔と声に、俊平さんは不死鳥だと思った。奇跡的に回復されると縦横無人のご活躍。閻魔も兜を脱ぐ俊平さんの活動だった。俊平に死など無いと思っていた。「大丈夫ですよ」と、あのダミ声を聞かせてくださるに違いないという希望的な思いにいつしか変わっていた。その、俊平さんの訃報である。

一臍と言う名で活動されていたころは、厳しい人だった。口角泡を飛ばしての一途な柳論は怖かった。後に丸山弓削平さんから、「俊平は『君見給え菠薐草が伸びている』の、路郎先生の句を見て川柳にのめり込んだ」と言うお話を聞いたが、弓削平さんに心酔しておられた関係もあって、弓削川柳社のよき理解者であった。西日本大会には、第二の故郷へ帰る気持ちだと、毎年参加して下さっている。そして盛会を何よりも喜んで下さっていた。入賞されると、入賞楯を高々と挙げて喜びを露にされた。黒縁の眼鏡の中の細い目に、柔和なお心が覗く。柳論とは別に温かい包容力を持つ人だった。

柳界から柳界の顔が、相次いで消えて行く中で、また、ただ岡山だけでなく惜しい人を失った。俊平さんもついに矢折れ刀尽きてしまった。俊平もやはり人の子だった。同じく川柳の鬼、定金冬二さんのお葬式に参列されてからお疲れを出されたとのこと。冬二さんを失ったことが大きなショックだったのだろう。

「背を伸ばし母の見ている方を見る」

弓削の川柳公園の高台の句碑越しに背を伸ばし、口角泡を飛ばして柳論を交わされることだろう。

俊平さんどうぞ安らかにお眠り下さい。

合掌

諏訪柳々さんの逝去を悲しみ

波多野五楽庵

昨日奥様から柳々さんが亡くなった、と言う電話を頂き誠に我が身を切られる痛さに身をゆだねております。

先月頂いた電話のつらそうな声に同じ病を持つ者として慰めはしたものの、ワクチンをする度に熱が出て一週間は悩まさせられている、と聞くと病に戦っている心と、とかく敗けようとする柳々さんの気持ちがひしひしと伝わって来て言葉もありませんでした。平成六年から川柳塔社同人になられた柳々さんは毎月の例会に休む事なく、掘り炬燵のようになっている「川柳道場」の一角で黙々と作句を楽しんでおりました。今や柳々さんの指定席になったお席にもう座る事がない、と思えば万感胸にせまるものがあります。

平成七年、八年と続けて大阪本社の大会に奥様と一緒に出席され大阪の皆様に歓待されていた柳々さんは夢またの夢になってしまいました。平成九年に発刊された柳々さんの百句集の中にこんな事を書いてあります。

「柳々さんは八十キロを超す偉丈夫でありながら童心のように繊細な心の持ち主なのである。政治経済を学び政治家になろうと希望を持ったが夢破れて教師になった。中学校では特殊学級担当、これが面白く止められなくなる。以後担当はしなかったが、かならず特殊学級の授業に行きました。ものを具体的に考えるという事はどういう事かを初めて知りました。とあります。特殊学級を担当した先生ほど子供を愛し、教育を愛していた事は私も知っております。

柳々さんは教育のかたわら土、日曜日は勿論長期の休み、年次休暇を利用して弘前の図書館通いが始まります。そこで『藩日記』三千三百冊を通読しました。柳々さんは教員の古文書仲間四、五人と一緒に始めたのですが、気がついたら私以外皆エライ人になっていました」と、決して毀誉褒貶にとらわれない柳々さんの面目がそのまま表現されています。

平成七年、些細な事で校長と衝突し

あやとりの糸のもつれを斧で断つ

の句を残して退職してしまいました。

物言わぬ代わり聞く耳持ちません

こんな句を見ると校長先生と衝突をしても一歩も引かない気骨がありありと目に浮かびます。

しかし、本当は赤ちゃんのように純真な心の持ち主なのです。

極楽も吹雪いてますかお母さん

奥様から子供のように愛されている柳々さんを見ているといつも素晴らしいご夫婦だ、と感心しておりました。今奥様を一人残して旅立たれる柳々さんを思うとき、奥様に一杯甘えたうらやましさと、毎日心配のしどうしで御生活なさった奥様のお心の中はいかばかりだったのか、涙なしに語ることは出来ません。あまりにも早く旅立つ柳々さん、御相談相手にはなれなかったことを後悔しながら最後のお別れをします。（平成11年9月30日記）

悲しみやもみじひとひら散るごとく　五楽庵

諏訪柳々遺句

六十年生きて無様をさらけ出し

この道が終の住みかとなりにけり

極楽も吹雪いてますかお母さん

人生の序列狂わす大たわけ

秋深し湯豆腐一丁酒二合

ここまでは科学ここからは心ナァ妻よ

発地柿壇

毎月25日締切・30句以内厳守　編集部

川柳塔みぞくち　小西　雄々報

年末にリンゴが届く梨送る　鈴枝
団欒へ梨柿栗と食べくらべ　静江
皇室に誇れる梨に汗光る　公美枝
母からの梨の便りが届く頃　弘子
乾杯はちょこ一杯の梨ワイン　智恵子
送られた梨箱囲み笑顔見る　信敬
手土産は迷わず梨と決めている　和代
産地から今年も梨を貰う幸　豊枝
入園料ほどは梨狩り食べられず　正光
進物の味を気にして梨選ぶ　久子
デザートの梨で会話がよくはずむ　康女
歪んだ梨が吠えても他人振り向かぬ　雄々

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

近すぎて妻の温みを忘れてる　マツエ
過去問えば白黒もある人生譜　まさる
やんわりが骨の髄まで効いてきた　かおり
番犬のつもりチッチャな犬も吠え　あきら
人情の温い分まで気を配り　文仙
笑ってる顔に嫌味が言い辛い　輝夫
正論を吐けばこの場が収まらぬ　坊太郎
ぜいたくは敵を守って疎まれる　ひかり
世の中で怖いは女房一人です　放任
助手席に母新米を積んでくれ　玲子
物忘れするが君が代忘れない　治延
谷川のメダカを追った日を思う　吟笑
逆らってから諦める孫の知恵　貞月
育ち盛り大き目ばかり親は買い　勝
今日も天気干したり入れたり男の子　チカエ
カアさんに怒られる谷通知表　なみ子
良く育ち親を追越す丈となり　正雪
戦争を知らぬ若手が良く育ち　いさむ

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

古賀メロディー影を慕いて思い出す　治三郎
影武者が一人歩きをして困る　泰雄
妻の視野から夫が消える倦怠期　スミ子
ネクタイを外しただけで変わる視野　宏章
神の視野いつも外れたクジを買う　英一
テレカにはデートの数の穴があき　満寿蔵
傷口が大きくなってゆくカード　しげお
ドナーカード持って思案がまだ揺れる　靖巳
ひまわりのその後ゴッホの絵の中に　典子
久方の立ち話する国訛り　一笛
家裁出てからその後は会った事がない　白渓子
少年Aのその後気になる記事拾う　稲子
わたくしが死んだらあとは御自由に　あやめ
大騒ぎの割にケロッと元の鞘　求芽
やんわりとたしなめているナースの目　高栄
やんわりと言うたぐらいできまっか　東雲
秋風がやんわり包む野の仏　〆女
やんわりと引き分けにする母の知恵　節子
やんわりと話して解かすわだかまり　波留吉
谷あいの村が守った四季の彩　かおり
筆まめな母の便りが途絶えがち　庸佑
老いの部屋もったいないで狭くなる　マツエ
火の車幾度凌いだ竹しゃもじ　活恵
右に左に揺れる自分が嫌になる　吉之助
生意気な仏は地獄へ回される　晴美
出窓からレッスン中のピアノ降る　義一
刺のある言葉へ鎧外せない　艶子
ケータイがケラケラ笑っている夜道　重人
喜寿金婚あっと言う間の通過駅　秀夫
春夏秋冬秋はことさら人を恋う　諷云児

岸和田川柳会　長谷川呂万報

ごゆっくりと言いつつのれん仕舞われる　美智子
急ぐのはよそう終点目の前で　鹿太郎
思い出がこぼれぬうちに急ぎ足　一弥
たそがれに恋は帰りを急がない　洞庵
急ぐまい平均年齢まだ遠い　冨志子
うやむやにさせてくれない妻の勘　基
戦争の責任うやむやにはさせぬ　みつ江
うやむやの遺書を残して逝った父　一斎
うやむやなままで下っ端首になり　金太
うやむやなせりふうけている落語　狸村
金以外の助け舟なら考える　白光子

死を救う奇蹟の援助レスキュー隊　辰郎
援助など望みませんと子は巣立ち　路子
援助してほしいいらない老いの意地　苑子
掘る土へ何万年の歴史出る　信博
憶測で帯が苦しく目に写る　東雲
返還の領土の憶測甘かった　東吉
憶測が膨らむ匂い入り封書　蛙城
幾つもの夢が迷っている楽屋　和歌子
楽屋うら人に見せない不況風　昭二
すっぴんのB面がある楽屋裏　洋
種途切れ楽屋噂をする高座　笑二
楽屋すずめ今じゃ芸能レポーター　弘子
幕引いてホッとひと息する楽屋　盛之
県警の楽屋尻尾が見えかくれ　呂万
楽屋話口の堅さで女将売り　甚一
幽霊が煙草吸ってる楽屋裏　萬的
楽屋裏見せない母の苦労知る　さよ子
楽屋入り枝雀のこわい顔がある　ダン吉

サークル樺樣　小林一夫報

どう爪を立てても妻に敵わない　靖巳
不機嫌な果実　ガングロ鼻ピアス　楓楽
今は動かず後列で爪を研ぐ　希久子
すする茶へ一つこぼれる萩の花　あずき
爪立ってみてもたかだか二三寸　正坊
爪丸う切って落語を聞いている　義子
ナルシスト爪の先まで磨きたて　雅子
マニキュアを落して帰る母の顔　智恵子
爪切りながら一部始終を聞かされる　澄子
爪研いでいるとは見えぬ笑顔なり　いわゑ

三幸川柳教室　三宅保州報

飾らないことが人気を生む秘訣　マリ子
芸能人人気の裏にいて孤独　栄之進
人気絶頂されど一寸先は闇　初子
人気絶頂視野の狭さに気付かない　美子
皮肉にも閉店セール超人気　嘉平
人気より金に傾くヤジロベー　秀男
ロコミの効き目行列作らせる　百合子
手作りに人気があると手前みそ　和代
人気出た日からマスコミ敵になる　公子
人気落ちても踊り続けているピエロ　美智子
人気出た方へと回る風見鶏　三千子
老いらくのキスに微かな塩の味　正一
升酒の塩で何杯でも呑める　和子
酸欠の街でしわがれ声を聞く　章子
蛞蝓よ許せお塩をかけまする　みね
父の日も塩うく服で鍬を振る　鉄治
ほどほどの幸せ手塩皿に盛る　碧
青瓜が優しくなった塩加減　起世子
見渡せば魚眼レンズは敵ばかり　健三郎
ムニエルになって正体ない魚　朱夏
壁いちめんの魚拓はお墓かもしれぬ　桂香
いわしにも目ん玉あれば骨もある　正匍
祝い事鯛でなければならぬ国　豊太郎
水切れた魚が私の夏姿　当代
カナ釘流の母の文句が手厳しい　千秀
私の岐路支えてくれた名文句　満洲子

佳句地十選（11月号から）

相馬一花

汗かきも顔に出ないと損をする　亀与子
妻の手のひらで踊ってばかりいる　磊
腕組みをしたら私も哲学者　富湖
国宝と気付いてからの褒め言葉　街湖
バーゲンに定価で買った服がある　潮華
潤滑油たった二合でよく走る　幸子
猫よりも女のツメがおそろしや　和歌子
だめだめと言って女は飲み続け　弥生
昔なら飛び越えました水たまり　松風
古傷に触れそう話題切り替える　庸佑

長生きに文句も溜まる介護法　町子
文句ひとつ言わない母の深い皺　保州
上を見て比較するから出る文句　さち子
母さんの文句いつでも愛がある　登美代

南大阪川柳会　吉川寿美報

むかついて啖呵を切ってもう引けず　庸佑
今夜咲く月下美人を盗まれる　柳伸
呼んでおきながら私の席がない　度修
携帯でむかつく話やめてんか　太郎
無臭だからダイオキシンが怖くなる　萬的
無味無臭忘れ上手になって老い　正博
嘘のない夫婦で部屋は無臭です　ひさ乃
老いて子に従い無臭になっている　慶一
定年で無臭になった主義主張

日の丸は無臭と信じ仰ぎ見る　遠野文秋
無臭のものがこの世にはない犬の鼻　久峰直子
すきの無いスーツ着こなす無味無臭　寿美志華子
鼻づまり季節料理をまずく食べ　たもつばっは
羞じらいを零して歩くお振袖　楓楽咲
娘らの帰郷待ってるちらし寿司
こんな所で娘に声をかけられる
充電に三食ひる寝里がえり
嫁かせたい嫁かせたくないちちろ鳴く
同居して始めて知った娘の情け
群れて咲く淋しがりやの彼岸花　朝子
群れに居る安堵おんなじ円を描き　柳宏子
コンビニにひとり暮しが群れている　幸子
弥次馬の群れのひとりは私です　千里
雑魚の群外は危険と知っている　東雲
群れを出た私の場所が消えている　凡子
蜘蛛の巣を芸術にする朝の露　雅文
ゴキブリに逃げる夫と叩く妻　道子
虫すかぬ奴だが笑顔見せておく　なぎさ
リストラの犠牲テントの群の中　叙子
秋の虫やがて静かに土になる　章久

川柳塔まつえ吟社　恒松町紅報

手の内を読まれぬ前に林檎むく　登志子
にこにこと漫画読んでるお父さん　きみ子
メモ読んで今日のお菜が一つ増え　保子
少年は大志を抱きマンガ読む　茂美
手の内を読ませてくれぬ金満家　友子
ゆっくりと漫画の本を読む娘　静江

突然にわたしを呼んだ秋の風
ど忘れの名前に会釈返しとく
病院で僕の名前が出ぬように
顔浮かび名前忘れた遠い人
名を知らぬ星の一つがよく光る
名前呼ぶことも久しい花手桶
政治劇踊らせ上手影の人
炭坑節なら私も踊れます
老妻の踊り鏡に笑われる
消費税勝手に踊り出さないで
独り芝居踊りつづけている頑固
札束が踊ると風も向きを変え
金で買う苦労なんかは知れたもの
苦労の味ようく知ってる握り飯
苦労から開放された落椿
孫五人苦労いとわぬ妻の脚
父さんの苦労話は背なでする
母老いて苦労話をもうしない
木せいの香りが噂消してゆく
小袋に大きな噂詰めて出る
噂が気になり青空を見つめる
七十五日次の噂が待っていた
噂も下火閑古鳥が鳴いている
一対の湯呑が聞いたいい噂

畔太泡
午朗
初子
秀子
邦代
日出子
博子
房子
小鹿
早苗
桂子
すみこ
与根一
彬

川柳ささやま　酒井靖子報

残業へ月がにっこり顔を出す　純子
心して嫁した門です五十年　恵美
水吸った大根が好き冬が好き　多美子
たけし
煩悩児
昭二
久枝
米子
登美子
芳枝
静恵
叮紅

隣まで親切が開く雪の道
水やれば応えてくれる花愛し
こだわりを水に流して悔いている
避けられぬ道と悟って歩き出す
浄土への道はしばらく閉めといて
苦も楽も夫婦で越えた峠道
耐えたのに優しくされて出る涙
お宝は守り袋のミニほとけ
ミニ人形買われて遠い旅語り
わき道にそれたばかりに農を継ぎ
欲ばった荷物が重い帰り道
一度だけ貰った宝石ミニサイズ
悩みごと水に流して雲晴れる
朝の水もらいそこねた花の乱
保育器に世界へ翔んだ子の記録
金よりも忘れています水の恩
うれし涙老眼鏡が邪魔になる
ライバルへ涙は固い意地となり

美智子
八重子
とみ子
つや子
かほる
すず子
かつ子
美紗子
美緒子
泰子
房江
君代
毬子
ヒサ子
冨美
素水
可住
靖子

西宮北口川柳会　亀岡哲子報

失ってひとり相撲が強くなり　文
人間喪失 時にはそんな酒もある　周信
失せ物が思わぬとこで出た不思議　春蘭
失ってから大切な人と知り　静子
神様の振ったタクトにさからえぬ　能子
頼るものないから神様仏様　柳宏子
いつまでの助走か空は碧く澄む　たず子
だんじりが走る祭は最高潮　房子
みんな走るさきにタレントいるらしい　義子

走らずに並んで歩こう老いの坂　比ろ志
議員減建前本音走馬灯　松　煙
転ばずに走れば乗れる終列車　哲　子
同年配なぜかライバル意識する　江　美
手作りのバザーで同じ物がない　正　坊
同じ道進む覚悟の登り窯　トミヱ
同郷と聞いて訛りが急にでる　嘉代子
同じ釜の飯が育てて来た絆　正とし
同罪の舟を二人で漕いでいる　諷云児
秋の夜のたまに手枕してみたい　晴　美
産みわけて神の掟をなんとする　美智子
忙しい妻がきっちり花を生け　曙　蝶
無駄だとは知りつつ彼の影を追う　紫　香
遺産分け顔も見せない人も来る　〆　女
一日の雑念払うてんこ盛り　澄　子
とりあえず歩いて景色変えてゆく　朋　子
松茸の味を忘れた夫婦箸　鹿　太
苦労した翳を見せない苦労人　武庫坊

うぶみ川柳会　上田　宣子報

すげ替えが俄にできぬ首である　ひろこ
領海をぎりぎり勝負する漁船　忠　良
勝つことがたまにあるのでやめられぬ　雅　女
万感がじりじりせまる原爆忌　睦　子
勝手連に担ぎだされてから先生　天　雀
俄雨押されて入るパチンコ屋　一　枝
肩書で優待席がうめてある　葉士人
戒名へお布施の額が書いてある　黙　光
蟬が鳴くじりじり地球焼くように　ユリ子
俄雨立ち読み客に目が足りぬ　天　人
差し上げるお布施に心包み込む　あづま
勝つことに拘泥り過ぎて憎まれる　健　一
鶴の織る布をお布施といたします　和歌子
プラスマイナス喧嘩した俄雨　螢
優しくて厳しい父と言えますか　良　雄
勝敗はどうだっていいさりながら　登美枝
住職も気持でよいというお布施　孝　男
優しさをうけて楽しい一人旅　くにお
初盆にお布施忘れて落ちつかぬ　一　夫
優秀な子が故郷に母一人　華　子
作戦にのったふりして負けて勝つ　静　生
わたくしにできる笑顔というお布施　宣　子

尼崎尾浜川柳会　田辺　鹿太報

野良猫が気軽にご飯食べに来る　江　美
リストラへ家族の顔が見えかくれ　ま　さ
けしかける妻が居るから靴を穿く　鹿　太
趣味ひとつ寄る年波を追い払い　モトコ
検査官横見てくれよ無免許だ　哲　嗣
スリルある橋を渡った幾山河　幸　子
さわやかな二人の朝へ玉子割る　美智子
古い殻脱いでスリルに酔う二人　勇次郎
命水やれば枯木もよみがえる　六　浦
一寸いっぱい気軽に誘う友がいる　夢之助
お気軽にまず一杯とママの酌　満寿蔵
鬼灯は無心スリルに朱くなる　正　治
精いっぱい今を生きてる糸トンボ　澄　子
子にゆずり気軽に乗った老いの旅　十四郎
陶工の意地一窯をみんな割る　柳宏子
お互いの住所は知らぬコップ酒　紫　香

川柳塔なら　坊農　柳弘報

自分史に書けないところ一つ持つ　民　子
話せないことを書いとく遺言書　あやめ
炎天下元気な球児の汗光る　幸　代
秋色に心の中も衣更え　季世恵
魚屋の兄ちゃん魚より元気　とし子
鉾先を制しやんわりかわされる　さと美
あの時の元気凝縮した写真　たけし
あの人は上手に元気に死にはった　真理子
じじばばの元気度計る孫が来る　節　子
朝夕の記事に追われるカタカナ語　絹　子
歓声に思わず元気盛り上がる　悟　郎
愛情の背に憎しみが付いている　天　狗
形見わけ亡き母偲ぶ色ちりめん　秋　泉
寝転んで見るまっ青な空が好き　良　一
天を突くひまわり元気炎天下　和歌子
突き刺した棒見落とした医療ミス　久　峰
秋の雲とんがる山をややそれて　春　蘭
尻込みを妻に背中を小突かれる　茂　雄
久し振り電話元気でよく喋る　我　巣
防災は何時も台風過ぎたあと　章　久
怒らして母の元気を確かめる　高　栄
台風の動き読めないまま不気味　眞生夫
あら波を越えて夫婦の色になる　孝　子
背信の女赤いハイヒール　洋　子
突き上げた拳に風の子の未来　秋　雄

野に下りて男保護色脱ぎ捨てる　和夫
台風直撃いのちをじっと抱きしめる　道子
一目散に海へ向かって孵化の亀　卓
突き上げてくる哀しみよのど仏　美千子
少年は十色の風に立ち向かう　笑風

川柳大阪　坊農　柳弘報

父の背に操る糸をつける母　高2 圭
現役後の予定寝るだけ寝たるねん　多香
孫増えて上がらぬ金利恨む日々　隆司
ややこしい唄をうたうな若者よ　信酔
グチ言わず操り人形今日も舞う　照月
イヤリング心の風に操られ　芳香
秋の野の優しき風にささやかれ　楽子
現役で合格いばる向かいの子　稔
パソコンを操る孫に老いを知り　河南子
操られ野村監督大奮戦　喜楽
現役の内です無理の通るのも　かよこ
ロボットと能力競べさされてる　川童
何十年音を刻んだ古時計　青道
現役の引退を待つ天下り　雅巣
神前で誓った日から操られ　叭笑
姑をうまく操る嫁の知恵　鉄心
ふる里を恋うる脳裏に祭り唄　洛酔
趣味があるだから現役頑張れる　柳昌
ややこしくしてる貴方のその言葉　美花
野心捨て甲羅に合った穴を掘り　希久志
四苦八苦ミサイル発射せんといて　本蔭棒
からくりを操る飛驒の匠わざ　一風

八十でまだ現役の肌のつや　まつお
リストラの風に現役員になる　一歩
聞かせたらいかん女が聞いていた　ダン吉
OBを視る現役の目が温い　金太
現役というプライドが邪魔をする　柳宏子
夕焼けの中で野菊は気取らない　笑風
現役の靴はいっつも光ってる　重人
土に生き土に野良着の似合う父　柳弘

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

父さんが旗ふってくれて一等賞　シマ子
どっちにも渡したかった優勝旗　ますみ
均等法二本の旗が家に立つ　宏
先頭の旗がよそみをして困る　剛治
見栄張ったばかりに裏がみんなばれ　信博
無位無冠張り合う友はつくらない　柳弘
張り切り過ぎて空回りする時計　千里
野の菊を手向けて丘の無縁墓　春蘭
手洗いの野菊ひっそりおもてなし　柳伸
菊日和鋏の音もゆたかなり　一風
一本の菊莫山の書が似合う　弥生
人間が実って低い低い腰　欣之
苦節十年初心を通しきる快挙　とみを
営々の努力実って秋叙勲　洋
満月が妻の陣痛早めたり　隆盛
先頭の走者に疲れ見えてきた　太郎
チャンスかも鼻のあたりがむずがゆい　扶美代
二度と来ぬチャンス逃した回り椅子　柳宏子
その時のチャンスに使う隠し球　東雲

チャンスかも知れぬ素直に応じるか　宏子
チャンスにも石橋叩いていた不覚　勝美
肩の張る話は済んださあ飲もう　三男

かわはら川柳会　上田　俊路報

一粒に豊作願い種覆う　寿子
百円であれもこれもと願いごと　ふじ子
身勝手な願いと神もにが笑い　秀子
難民を見るたび願う平和の日　登生
少年の顔に打算のない願い　泰良
秋日和姉妹で旅の予定たて　一薫
生活の予定くずした低金利　静子
あれこれと予定をすれど先おくり　余吏子
予定した山の頂まだ見えず　正子
予定数出して感謝の礼肥ふる　悦子
予定表妻の出る日がふえてゆく　聴
出る幕の予定知ってる彼岸花　俊路

ほたる川柳同好会　田辺正三郎報

片隅に炎を燃やす彼岸花　敞子
大阪の片隅に住み半世紀　喜美子
片隅で母の形見がよく眠る　保子
片隅の花に引かれて秋ひとり　桂子
逃げ道のない片隅にある救い　久子
合併し社史も倉庫の片隅へ　柳童
荒波を片隅で受け世紀末　まみ子
片隅で慣れぬダンスの誘い待つ　見清
片隅の仁王力を添えてくれ　千里志
片隅にいてもやっぱり光る人　肋骨

汗と涙どちらで消えた火の車　馬洗
夫を試す涙も時に見せている　昭子
病む友の涙腺緩んできたらしい　祥風
叱る母頬の涙に温い愛　竹二
胴上げに鬼の涙を見てしまい　蛍柳
どんな夢見たのか枕濡れている　ただし
したたかに涙を武器に女生き　よしろう
泣けるのは三度男はつらいもの　勝
涙もろく母は小さくなってゆく　雪子
習うべき時に遊んだツケが今　直次
習いごと本ばかり増え日が過ぎる　吉太郎
習わねど手抜きのコツはマスターし　正三郎
習わずに知らず覚えた酒の味　実
もう年だスポーツマンも散歩です　正安

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

不景気な顔しておれぬ孫が来る　ちよえ
老春を謳歌するとはいかないが　鈴江
誰が振る景気の旗は雲の中　はるみ
不景気な顔で年金せがまれる　かつ子
世の中に逆らってみたい昨日今日　聖子
景気など気にしていない父の背な　恵美子
不景気もどこ吹く風の家が建ち　好栄
不景気はどこかと匂う百合の花　博利
列島の景気占う逆さ富士　清泉
不景気だ海水浴でもしてくるか　白汀

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

涼しさを少し下さい萩の花　和子
いらいらと秋の扇を手放せず　ヒサコ
いらいらとしてる刑事の足の裏　夢之助
いらいらすると花の笑顔が消えている　比ろ志
夕焼けに下弦の月のはずかしそう　愛
宇宙旅行月は孤独がよいという　渉
気負うことなくて今夜の円い月　しづ子
虫の声夜道に月と影二つ　節子
告白は月がすがたを消してから　静
天変地異りんご四角に実るやも　キク子
白桃のつるりと愛をふりほどく　芳子
秋の空西日が落ちて虫時雨　一笛
予期せぬという弁明を聞くウラン　久子
生真面目に写経の足がくずせない　日出男
爪伸びる一週間は早いのか　年代
ストレスを流してくれる川がある　恵子
台風がそれて鼻毛が伸びてくる　武庫坊
介護保険読みながら朝の牛乳　薫
逃げ道に亡母が置いたか次郎柿　美子
猫じゃらしいつまでたってもじゃれている　千恵
秋祭りのぼり見て知る今の私　正子
残暑とや昼寝も出来ぬロスタイム　義芳
コオロギがぼくの余命を問うている　光穂
殻脱いだつもりが同じ殻着てる　沙置子
指で押した空気によろめいている　定男

川柳塔唐津支部　松涛庵正剣報

絆切る鋏を造る人は誰　あき
キャンプの夜みんな疲れて眠れない　實
晴耕雨読ファイトの沸かぬ定年後　輝夫
いまも尚あなたの席は空けてます　勝視
ピコグラム単位がやがて生命とり　水笑
名月に台風なんて間が悪い　タミ
野良猫を追って転んで叱られた　幸夫
コンバインの後を雀がフォローする　晴翠
ゴキブリの神輿担いだ蟻の列　高明
男の名妻の寝言の高笑い　四郎
とりあえず出雲へ送る船出式　虹汀
臨界にまた出遅れた危機管理　正剣

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

それなりの姿のままで枯れてゆく　和子
嵐のあと割れたお皿を接いでみる　幸枝
母老いぬ子や孫よりも早く寝る　武子
わたくしの穴をせっせと掘っている　喜与志
青い風に青いドレスが染まる秋　汲香
恥ずかしさをどこで探すの乱気流　睦子
羞恥心忘れて弾む秋の空　かつ乃
美しくありたい今朝の更衣　きみ子
服を選るわたしひとりの夢を見て　保子
婆ちゃんの果実ジュースはすぐ出来る　茂
丁寧に皮を剥いてはさしあげる　きみゑ
入院に果物ナイフ用意する　野草
衣食住足りて不景気子は知らぬ　盛桜
衣に恥じぬ人格を積まんとす　みさ子
幾重にも衣重ねていたこころ　初子
煽てにのって身の滅ぶこともある　節子
雲晴れて月に見られる間の悪さ　房子
合間見てストレス捨てに旅に出る

苦も楽も思う間もなく歳をとり　菊野
間が悪い逢いたくなって遠まわり　智恵子
間が抜けて手拍子あわぬ歌になる　久枝
自由化にしどろもどろのミカンなり　弘子
空っぽの頭に果実落ちてきた　小鹿
氏素性いわぬ雑木の果実なり　隆風
果実酒も甘く宴を盛り上げる　八重子
お蔭さまで果実を輝かせている　諷人
熟れ過ぎて酸っぱくなると嘘がばれ　実満
記念樹になるやも知れぬ柿植える　孔美子
挫折した果実へ温い樹のしずく　富久江
柿の実の自己中心の味が好き　螢

川柳塔ふくべ　橋本多哥由報

哀しいね茶髪の下に薄い愛　和歌子
古里はどちらか北の島に問う　かつみ
美しくなると言われて浴衣きる　螢
ゆかた見てやり手ばばあが品定め　石花菜
里に出た猪人と知恵くらべ　昭恵
野も山もわたしも秋の色になる　春恵
帰省する便りにゆかた用意する　信子
人間でいたい茶髪の情け汲む　寛子
夕涼み浴衣で四方山話する　単車
時ならぬシャンプー今日も午前さま　一枝
ワンちゃんのシャンプーしてる独り者　一夫
ご機嫌になってシャンプー嫁がする　多哥由

川柳会梨花　石上悦子報

ぼろぼろの羽根のトンボに己視る　和歌子
よれよれのトンボが恋をしたそうな　幸子
赤とんぼ優しい女に来て止まる　睦子
極楽トンボ住所不定の子が一人　一京
酒ものむおはぎも食べる極楽トンボ　石花菜
止り木であしたの事は喋るまい　ただし
ようしゃべる口にやいとをすえてやれ　蟹郎
宴席の隅で麦茶をのんでいる　和枝
涼風を籠に一杯届けます　亮
振りむけば想い出ばかり残る道　一枝
全没で若い者には花もたせ　東雲
瞬間に火花が散ったものがたり　圭詩朗
切り札の牛歩空しさだけ残り　忠良
頭冷やそうわたしの水の湧く森で　求芽
漁火を見ると亡母さん想いだす　一夫
気が晴れた素足で砂の私語を聞く　多哥由
逃げ水を本気になって追いかける　よしえ
職もなくふんわり浮いて食いつなぐ　行男
叱られた孫をふんわりだきしめる　久子
アドバルンふんわりひょろり何思う　高栄
ふんわりと入道雲に抱かれよう　螢
ホームレスと市長の違いどれ程の　克枝
ひとつ穴のむじなと言うが多種多様　玲子
ほめたとは言えないらしい母親似　悦子
竹とんぼ作るナイフで補導され　節子
胃潰瘍なぜか見舞が多過ぎる　美恵子
華やかな舞台の裏にある稽古　典子
ランナーを送るバントの稽古する　かつみ
ナギナタで戦の稽古した少女　きみ子
お稽古の踏台になり足になる　ひろこ

はまゆう川柳会　中後清史報

鳥だって翼の重い日もあろう　生米子
欲捨てた胸に住み着く青い鳥　太一
青い鳥探して孫は海渡る　苗子
閑古鳥泣いてスナック消えてゆく　平和
世界中鳥肌の立つ事ばかり　美佐子
悠々と舞う鳶達も目は必死　華水
アイガモもお手伝いする米作り　悦子
輸入食品大手振ってる焼鳥屋　雄造
突然のことに本音がポロリ出る　まゆみ
一言が過ぎて突然向かい風　利ぼん
突然の悲しみ癒す日の流れ　佳子
突然の不運に笑って立ち向かう　修也
突然の訃報思い出巻き戻る　慶一
突然の孫の質問口籠る　雅視
不都合は馬耳東風で惚けてる　公治
さり気なく惚けて円く年の功　恵美子
記憶には無いと惚ける古狸　てる坊
お惚けがうまくて夫婦仲がよい　国彰

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

不況策に親子喧嘩の振興券　四三郎
不況風名代ののれん吹き飛ばす　庸佑
不況にも三度の飯はちゃんと食べ　一壺
ふる里の月はやっぱり澄んだ顔　俊男
貧しきも富める者にも月は月　美喜
月も私も一人旅です秋の空　絢子
台湾で見る月きっと泣いている　ダン吉

まんまるい月に見惚れて下戸が酔う　かつみ
過去は過去恩義すっぱり棚に上げ　昇
すっぱりと香具師大根を切って見せ　専平
金を貸しすっぱり断ったお付合い　章司
すっぱりと故郷を捨てた空の青　吐来
五十年添うてすっぱり切れた縁　たけし
すっぱりやめると二日酔いのあなた　みつこ
振り向かぬ愛をシュレッダーにかける　美代子
結束に一人のエゴが壁になる　修六
子の命金より軽い親のエゴ　利武
お互いのエゴが顔だす遺産わけ　満寿蔵
エゴイスト自分勝手な地図を書く　志洋
アメリカのエゴに地球が泣いている　敏
私のどこを切ってもエゴと出る　桂子
エゴイズム味方の数が減りはじめ　重人
食卓の手抜きは主婦のエゴだろう　泰子
携帯の迷惑しらぬ青リンゴ　潮華
エゴ捨てて愛を拾った秋桜　りつえ
絶好調のエゴを大目に見てほしい　扶美代

倉吉川柳会　松本よしえ報

ぼつぼつと行こうぜ吾はまだ八十路　志郎
取り入れに間に合うように嫁がされ　悠子
鬼やんまB29を思い出す　睦子
菜園は取り入れまでに虫が食う　(山)紀美子
人褒めることはぼつぼつ小出しする　きみ子
取り入れに減反の田が泣いている　小生
出不精な父が飛行機雲見てる　智子
ハイジャックしたい娘がいる空の旅　節子
取り入れも済んで案山子に暇を出す　幸子
取り入れの手ほどき荒れた手で教え　雄々
聞かれたらぼつぼつですと答えよう　玲坊
日も落ちたぼつぼつ仕事とりかかる　久子
ぼつぼつが癖だった君駆けて逝く　十三男
芋ほりが済んでから行く紅葉狩り　一夫
金木犀が香るぼつぼつ毒きのこ　和歌子
農を継ぎぼつぼつ欲も出始めた　民枝
大夕焼里もぼつぼつ紫に　美ッ千
飛行機の座席つばさが邪魔になる　よしえ
差し上げた飴ぼつぼつと効きだした　季芳
飛行機に乗らねばならぬ一大事　康子
取り入れがすむと必ず来る縁者　(西)喜美子
ぼつぼつと支度しようか一人旅　(前)喜美子
ミサイルが飛ぶ九条がうろたえる　和枝
鮭帰るぼつぼつ腹が空いた熊　玲子
はじめての飛行機もしや怖かった　ちよ子
鮮やかな楓の根元ポチの墓　完司
臨界に達しないようぼつぼつと　石花菜
取り入れた技術をスパイされていた　かつみ
原発の遠いところで紅葉狩り　次男
二十世紀の最後の栞紅葉一枚　ゆり子

いずも川柳会　佐藤治代報

良い手紙悪い手紙も飲むポスト　ちかし
ぶつかったとき読み返す師の手紙　芳子
長々とことわりがいる筆不精　まこと
癒ったら飲みに行こうと書く手紙　寿美
友の文十行ほどの温かさ　青湖
コーヒーをのんで優しい手紙書く　文子
いい家庭らしい躾のとどいた娘　秀子
昔話の好きな家族に明るい灯　明朗
正直な子供家庭もさらけ出す　あきら
寄り添うて情けの花咲く家庭の灯　多賀子
ふれあって明るい声のする家庭　叮紅
晩学の窓から拾うこぼれ種　治代
窓一ぱい開けて女の客を入れ　与根一
駆け落ちの夜汽車の窓に灯が走る　茂美
しきたりがぎっしり詰まる蔵の窓　智子
窓越しにおはようさんと言える仲　ちえ
赤蜂の唸り聞いてる倉の窓　草丘
花は明日咲かすと誓う夏の朝　夢酔
明日より今の私に金が要る　義良
明日へ咲く花のいのちと語り合う　房子
その元気明日も明るい灯をともす　おしえ
今日は今日明日の約束などしない　多喜
明日は明日今日の介護を精いっぱい　蘭水
祈るほどに邪心指先から抜ける　昌枝
祈っては心の刺をぬいている　久子
わたくしのことだけ祈る曼珠沙華　章峰
生半可な祈りを拒む冬の天　桂子
花茗荷わたしの祈るとこに咲く　きみえ
文明は家庭の空気まで変える　正朗
長生きを祈る不謹慎かもしれぬ　れいじ

竹原川柳会　時広一路報

先生と呼ばれる声に慣れてきた　大2史子
将来を決める大事な岐路に立つ　高3千枝

てっぺんで眠る男にある至福　蘭幸
出たまんま戻って来ない福の神　喜美子
母の言う福耳今をよしとする　栄恵
明るい部屋福の字の額かけてある　貞子
福の神孫がトントン肩叩く　規代
福という言葉はいつもまん丸い　正宏
子宝という福があり風みどり　比呂子
人並みの幸福でよいわが余生　蝸牛
お抹茶に大福ついている福よ　喜久恵
幸福が逃げないように手をつなぐ　勲
養生してますかむし暑い秋だけど　太虚
子供らもお店楽しい秋祭り　美佐雄
やっと秋野山の幸よ旬の味　夏喜
願いごと叶わぬままに秋の天　一枝
物入りの招待状が来るも秋　菁居
名月をさかなに秋が深くなる　節夫
霊柩車ためらうように秋を出る　静風
このひとにだけは素直になる心　白狐
天高しこころの広いひとだった　房子
もう時効心の刺は溶けている　汎美
ノックして下さいこころ飢えてます　笑子
向かい風こころにナイフ刺したまま　厚子
時々は残業したくなるこころ　力
赤とんぼはるかな無垢になるこころ　不朽
心と顔が直結してるから困る　一路

川柳後楽吟社　従野　健一報

足腰が弱って疑い深くなり　青銅
弓を引くなら眉間を外さないことだ　草風
願望の種を子供に移植する　忠成
神風を信じた喇叭の罪と罰　道博
一升瓶二人で空けた青春譜　哲郎
子が翔んで夫婦無口になりました　桃風
あんなのを選んだばかりに裏切られ　秋月
かまきりが緑の斧を振り上げる　邦季
耐えている残暑の中へ神楽来る　博友
目の前にある幸せが摑めない　美智子
長生きはすまじきものなり痴呆症　浄美
天気予報どちらが勝つか蟻に聞く　一夫
筋力も鍛えています女形　吉則
正解へ何かがひとつ欠けている　正秀
恥知らず不便も知らず二十一世紀　信善
吹いてくる風にコスモス逆らわず　まさお
縄梯子昇りつめたらシャボン玉　直樹
エアコンもなかった昔の熱帯夜　佐加恵
難聴へ夫婦の声がでかくなり　柳五郎
喜んでいいのか時の立つ早さ　照明
にらの花庭で真夏を謳歌する　照路
母の霊胸に同行二人旅　金吾
案山子もう居眠りしたい米余り　鮫虎狼

大原川柳社　矢内寿恵子報

孫が喜ぶ顔を見たさに又はずむ　みづえ
呱呱の声喜ぶように陽が昇る　さちこ
喜怒哀楽あって人間らしく生き　あやこ
喜怒哀楽かくし切れない化粧ばけ　玉恵
よろこびへ弾んだ母の風車　辰江
リストラの子へよろこんだ里の母　妻子
喜びも悲しみも知る老夫婦　悦子
煽られて乗ってはならぬ口車　喜美子
就職を泣いて喜ぶ祖母がいる　こふゆ
よろこびを包みきれずに電話する　巴子
全快を喜び合うて踏む大地　敏子
またひとつ増えた喜び抱いて寝る　南花
喜んでいいのか孫はよう太り　たづ子
ひと皿によろこびを盛る母の知恵　ひでの
よろこびを感謝にかえて和を保つ　昭子
会うだけで喜ぶ母の丸い膝　はるみ
喜ぶ顔浮べて土産買うてみる　静子
生きている喜び煽るペンの先　絹子
喜んでくれる幸せまだ残る　和子
真直ぐに生きた喜び今日がある　地佳平
よろこびは老後を埋める予定表　あすなろ
よろこびがすくすく育つ母子手帳　はじめ
よろこびを分け合う人は雲の峰　寿恵子

城北川柳会　神夏磯典子報

熱帯夜冷たく浮かぶ初秋の月　チサ子
秋草のむらさき色に恋映す　義江
押えても頭もたげる意地悪さ　久留美
見学のモデルルームを見て飽かず　典子
どん尻をせかず慌てず横を見ず　史風
無関心な顔してキツイ事を言う　登美子
天下とる夢を見ているワンルーム　道子
無関心装いしっかり聞く噂　ひさ乃
無関心装い平和な嫁姑　トヨ子
八起き目に手を貸す妻も傷だらけ　はじめ

無関心に見えても綱は外さない　ただし
関心のない観劇で舟を漕ぎ　志華子
単純で医者の言葉ですぐ治り　昭子
炎天下ただ黙々と好きな道　小路
ルームキー置場に困る露天風呂　求芽
口数はいらぬ阿吽の老夫婦　高栄
ゆうゆうと敷居またげぬ朝帰り　達子
価値観の同じ話題に華が咲く　寿美子
炎天に心配ごとは乾かそう　あやめ
ティールームゆっくり溶ける角砂糖　一枝
無関心装う父がすべて知る　あい子
炎天下きのこ雲下は地獄絵図　政子
ラブコール彼は見向きもしてくれず　白峰
憎しみも恨みも捨てた空の青　朝子
慢心の花は噂に折れやすし　千里
夜店の灯金魚の涙知っており　順三
介護法親子で違う胸の内　倫子
炎天下律儀の汗がよう光り　柳宏子
悠々と手足のばして妻の留守　千歩
味方だと信じる人を裏切れず　公一

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

眠るのが恐い幸せすぎるから　精子
眠るような大往生に憧れる　さち子
こだわりを捨てると眠り深くなる　和重
若き日の血を眠らせてから久し　高夫
睡眠十二分起きてる時間の忙しさ　千寿子
眠るように逝ったと聞けば喝采を　三男
行雲流水すこし休眠など如何　克子

国会で眠り地元で反り返り　鉄治
国会で舟漕ぐ雑魚も頭数　利治
破られた眠りに埴輪仏頂面　あつむ
みんな寝てしまって父のする吐息　射月芳
石段の途中に捨ててある吐息　大輪
古文書の虫のつづれにきく吐息　美子
難問に吐息が滲みた答案紙　正博
あと一枚吐息とともに出るお札　紀久子
就職難へ企業も共に出る吐息　君枝
嘘一つ上手につけず吐息つく　紀美女
露草の吐息たっぷり聞く残暑　英子
次世紀へ生きるマグマを煽ってる　冨美子
火のような言葉が熟れてくる日記　寿子
時々は謀叛企むわたしの火　稚代
まだまだ死なぬ火種一つを抱いている　太茂津
うずみ火の中の慕情は消されない　呑天
暖めるだけにしましょう私の火　富湖
火の性を目立たぬようにさり気なく　忠翁
名月に恥じることなし無位無冠　保州
名月に人妻の飢え序々に溶け　健三郎
名月がでたからドラマ書き替える　輝子
名月が昇って明り消しました　豊太
ゆきひらへ母の小さな祈りの火　緑良

京都塔の会　都倉　求芽報

木蔭なし炎天おのが影もなし　春蘭
大声を元気の証拠ととってくれ　てる
子育て時の苦労話も地蔵盆　達子
夕焼けが紫になりビルが浮く　ただし

物欲減り老いの心が丸くなる　武庫坊
海鳴りにわたしも吠えてみたくなる　年代
しばしの夢を見させて虹は消えてゆく　美穂
医者通い元気でないと出来ません　満子
病院のすぐ裏に住み無縁なり　柳宏子
病院で翔ぶ日待ってる千羽鶴　百合子
病院の廊下を歩く私小説　豊次
弱点を突かれ思わず息を呑む　ルイ子
突っ込みと呆けの呼吸で笑わせる　高栄
突っ込んだ問いにカルテは伏せたまま　福子
新妻に突きつけられた花名刺　波留吉
人生を太く短く突っ走る　芳子
古傷を突かれて素知らぬ振りをする　輝美
空っぽの頭ですぐに突っかかる　吉之助
竹槍で突く訓練もした昔　飛鳥
蒟蒻よ泣かないでくれ針供養　礫典子
乱気流ときどきおこる嫁の部屋　宏子
一喜一憂 円と株とも乱高下　紫香
子離れをしてから起る妻の乱　求芽
乱雑な部屋でゆっくり翅のばす　〆女
乱れ文字友の涙の痕がある　颯云児
虫の居場所で時々起きる乱気流　正坊
男にはいちばん怖い妻の乱　白渓子
自分でもやつれているのを意識する　庸佑
やつれても弱音ははかぬ意地がある　美智子
一夜にてやつれる花がいとおしい　冬葉

川柳ねやがわ　江口　度報

こおろぎと一夜を明かす不眠症

昨日会った人と思えぬ昼の顔　あやめ
満月に恥じらいながら露天風呂　かすみ
虫すだく夜を酌み交わす友を待ち　光子
無為徒食夜の来るのが早過ぎる　順三
たっぷりと飲んだか夫のいい寝顔　一風
パソコンが秋の夜長を楽しませ　勇太朗
結論をいそご今夜は名月だ　良知
晩学の成果があがり二度の職　波留吉
過大報告された成果のシャボン玉　恵子
成果など気にせず拭う玉の汗　仁
脱サラの成果が見える力こぶ　小路
癌研究期待されてるその成果　三郎
成果などせかず根を張れネギ坊主　洋
ロスタイム生かせぬままにリストラに　重三
シュートなんてどこ吹く風の赤とんぼ　礫
初デートイエローカード持っていく　弘一
むしゃくしゃとするから喜劇映画見る　庸佑
モノクロの映画私の半世記　仁清
三本立通天閣は懐かしい　たもつ
コクトーの映画に浸るぼくの旅　亜成
小津安の映画やさしい日の日本　茜
神戸から仮設住宅トルコまで　日出子
再縁談キリトリ線が揺れている　吉之助
精一杯走って来ても残る悔い　博泉
見えすぎてついつい叱言多くなる　ルイ子
ハードルを下げた分だけ背が曲る　高栄
真っ当に生きて胸張る敬老日　時弘
衣食住足りて近頃不健康　忠央
歩け歩けと廃気ガス吸いつづけ　度

川柳高知　川竹松風報

妬きもちの裏に切ない愛がある　やすお
円満の秘訣適度に妬いている　啓二郎
祝辞言う心の奥にある妬み　正五郎
熟女とは焦げ目のつかぬ程に妬き　快風
半世紀一度も妬かず黄昏れる　幸
嫉妬妄想眠れぬ夜のコップ酒　功
妬くほどに大きくなってきた焔　孝雄
薬にも毒にもなるというお酒　京子
消費者の心をつかむ無農薬　和江
幸せが光る二人のくすり指　敏子
また一つ薬が増えた老母の夏　てるみ
錠剤のはてさてどれが効いたやら　佳風
たそがれる日々背伸びなどもういらぬ　美々
背伸びした暮し地獄が待っていた　千鳥
一流は知らぬ二流がする背伸び　良雄
長居した姑を送ってから背のび　三郎
ふる里へ少し背伸びをして帰り　松風

東大阪川柳同好会　森下愛論報

近すぎて天の恵みに気づかない　たもつ
天高く中性脂肪に赤ランプ　猪太郎
こだわりをまるごと捨てる秋の天　朝子
ダイエットするには天が高すぎる　度
プロの意地だけでは勝てぬ若乃花　柳宏子
ドラフトの一位もプロの水に泣く　晋吾
仏への彼岸団子は手づくりで　シマ子
秋更けて情け見守る泣き羅漢　愛論

路地裏の壁のうすさにある情け　千里
引退試合ご苦労さんが温かい　信治
電車賃あの交番を忘れない　外吉
美しい嘘が淋しい風を抱く　萬的
いとし子が自立し過ぎてふと淋し　美弥子
残念だ首位になったが三日だけ　幸子
淋しくていつか買い物依存症　文秋
雑魚なりの気楽さとても捨てられず　三重子
財産家に生まれなかってよかったな　太郎
闇を出て一気に天へ駆け上がる　湖風

翠洋会　児玉蛙報

フルムーンこの日へ合わす花見どき　さと美
縁故採用パイプの太さ計られる　正雄
出勤の前に袋を両の手に　東雲
熨斗袋考えぬいて入れる金　照子
アリバイの袋屋台に置き忘れ　千歩
年金でしんどい義理ののし袋　志華子
孫が来て童話の中に居る二人　凡子
握手した手袋の中嘘ばかり　宣司
百円の手袋これで三年目　絹子
月見草一夜咲いても来てくれず　叡子
大入りの袋の中は五円玉　会美
回り道する晩年の知恵袋　喜美子
大人だと思えば腹の立つ大人　義
大人にはなりたくないと孫は言う　蛙
大人もう廃業致し姥ざくら　伽羅
肥満体心も同じ太っ腹　舞夢
短気者の堪忍袋つぎだらけ　恭昌

太い眉のままがいいのに剃り込んで　千枝子
素肌美にこだわる傘寿の糠袋　周信
かんにん袋負け方は知っている　千梢
細身でもままよ図太く世を渡る　靖巳
根つめたパッチワークは母の作　春
ごみ袋暮らしのわかるごみの嵩　真砂
スピーチの要点書いた箸袋　澄子
失敗を重ね大人になっていく　正坊
年の暮れ袋小路にはまりこむ　久峰
再逮捕こんどは太い縄がいる　鬼遊

岩美川柳会　石谷美恵子報

誰に打つ大中小の釘を選る　大漁
人間の脆さナースに支えられ　季芳
小夜時雨抜け道をくる女あり　螢
父の打つ釘は急所をはずさない　静生
子を諭す金釘流の文届く　孝男
白衣の天使いつも笑顔で無頼着　一夫
背信の罰か時雨に二人濡れ　圭一郎
また会えるネオン男を活気づけ　喬水
脳天の釘が錆びだす物忘れ　忠良
蟹カレイ鱈だ港は活気づく　蟹郎
手の内もしっかり読んで釘をさす　一京
隠し釘浮いたあなたに打っておく　一瑶
社長室をノックする迄の活気　和歌子
人生の落ち目驚くほど早い　単車
爺ちゃんの好きなナースが嫁に行く　公乃
植樹した山がだんだん活気づく　芳江
母さんが元気家中活気づく　節子
驚きと感動くれる孫が居る　裕子
釘打った過去忘れ物一つある　たぬ
時雨空コスモス達がみな黙る　美恵子

川柳藤井寺　高田美代子報

汗と砂にまみれてゴール一年生　桂子
汗臭いヤツが隣へ来て喋り　重人
ぬか床を守り通した母の汗　アキ
女房に釘をさされた汗の金　敦子
父の汗知らぬ子供で飢えている　絹歌
たっぷりの黒で隠してある秘密　美代子
カリスマ性漂う人の黒が好き　婦美枝
原色を薄める一滴の水もある　昌子
原色のままで大人になりきれず　花梢
葬列にいて原色を見失う　瑠美子
ブルーでもよろしいですかけしの花　よしえ
土手行けば赤赤赤の曼珠沙華　春蘭
ひまわりの原色夏をたべつくす　ますみ
原色の森の雫はみどり色　シマ子
原色のままで吠えている青春　葉
原色の野望包んでいるドレス　大八
紫陽花の芯は原色ためている　元紀
つかれはて犬もぐったり尾で返事　喜代子
木蓮もぐったりとして狂い咲き　恒雄
ぐったりとした胃へ慈雨の生ビール　六点
ぐったりの金魚夜店ですくってき　利武
リストラの告知ぐったり肩おとす　志洋
何かあるパパがぐったりして帰り　昭子
最果ての駅ぐったりの一人旅　史郎
四十九日終えて疲れがどっと出る　和子
ぐったりして歩くと影が細長い　扶美代
見送ってぐったり傘寿の祝い客　かつみ
均等法ぐったりしているのは男　鐘造
地球一周まだ言い訳が終らない　美子
アデランス脱いでぐったり蟬しぐれ　正一

川柳塔きやらぼく　政岡日枝子報

カラス群れよからぬことを話してる　花子
ベランダで煙草吸っても家長です　八重子
旬の茸目利き良ければ毒はなし　初枝
手鏡が女の愚痴をきいている　晶子
酔いそうな金木犀の秋盛り　麗
自己主張貫き通し淋しさも　天雀
樹のてっぺん森の主役となる鳶　瑞枝
暴れん坊なだめて今日の北斗星　すみえ
約束をしっかり詰めた旅鞄　玲子
気にかかる人から届く招待状　てい子
目を高く持たねば鳥に嫌われる　千代
魚がんばれ鱗なくても生きられる　日枝子
人の輪に入り笑顔を近づける　恵子
想像を逞しゅうして一人住む　繭
CTの中で献立考える　寿々子
根の絡み世のしがらみをそのままに　春枝
下り坂影が押すからよく転ぶ　富美子
昇る陽に約束ばかり繰り返す　荒介
経過より結果聞きたい娘の見合い　笑子

横浜あおば川柳会　菱田　満秋報

クリスタル同じ酒でも美味く飲め　美柳士
一輪を挿すとコップも秋になる　純子
ゴミ箱で世をなげいてる自信の句　八重子
新人を諭す屋台のコップ酒　良子
みちのくへ紅葉が誘う旅雑誌　雅子
倹約家もらったメロン腐らせる　街湖
菊花展優雅に競う自信作　嘉信
新婚の料理雑誌の知恵を借り　広和
妻の言う通りになって傘を買い　あかり
遅咲きと信じ人生やり直す　和可
雑誌から得るゴシップに皆が寄り　省子
検診を終えて一杯コップ酒　ふみ
雑誌に出 評判の味落ちてくる　亜希子
グラビアの女が秋を引き立たせ　かづ子
首都移転カジノが先という自信　句多留
パソコンに鈍らされてる思考力　道子
雑誌から得た雑学で場をしのぎ　敏
子を産んでゆったり母の顔になる　早智
執念のペンが支える同人誌　潮華
日の丸を揚げる自信がまだ湧かぬ　政勝
中吊りで読んだ気にさす週刊誌　為佐子
情報誌写真の力借りて売れ　サト子
自信ないことばかりだが生きている　かず枝
哀愁をこぼしてすするコップ酒　裕峰
結果には触れずねぎらう部下の労　あらた
紙コップ酌がれる酒が安く見え　満秋

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

雑魚でよし自由気ままに泳ぎたい　諷云児
魚ごころ知ったかような釣り自慢　一笛
事故続き新幹線が夢砕く　悟郎
線路は続く出逢いと別れくり返し　〆女
廃線の枕木を行く秋日和　知香子
ポッポ屋の誇りを知っている時計　ただし
ポッポ屋で生きた生涯悔いはなし　正坊
時刻表繰ってるもはや旅気分　寿美子
鉄道唱歌いつの間にやら皆忘れ　故杜的
マイナスに触れず長所を褒めてやる　周信
棒グラフ プラスマイナス競い合い　慶子
マイナスにならないように淡化粧　英子
癌細胞マイナスになる夢を見る　蕗児
マイナスをプラスにかえる母笑顔　吉太郎
時差の旅 睡眠時間ちぐはぐに　求芽
母の背に安堵し切っている眠り　庸佑
肝心なとこで眠ったバスツアー　紫香
眠るのが怖い地獄に落ちそうで　柳宏子
蝶になり眠っていたい花の陰　きく子
地球儀で銃の聞こえぬ国探す　肋骨
空手だけ内緒にしとこ習いごと　正三郎
年寄りという手加減が気に入らず　しげお

富柳会　池森子報

夏終る夏が終ると法師蟬　冬虹
一点の染み自己崩壊の落し穴　勝子
敬老会いつの間にやら楽しみに　治恵
風見鶏風の行方の鰯雲　春蘭
小さ目のスプーンになった母の粥　潤子
糖尿に匙半分の思いやり　浩二
喜寿過ぎて忙し忙しと扇子風　一夫
結果からメルヘンに変るお話　和歌子
失投の結果知ってる左遷の荷　勇太
老眼鏡笑い袋につぎあてる　宏
よく笑う妻と喧嘩が続かない　満秋
もの想う匙からアイスクリーム逃げ　あかり
風紋の襞にあなたのシルエット　ひろこ
頭取という鳥あとを濁し逃げ　勇
りんどうは亡母のみちなり濃紫　夕花
ひと匙の愛を信じて橋渡る　文子
引力が絵になりリンゴ落ちました　信子
ライバルに差をつけ笑う大ジョッキ　けい子
暦の上の秋ではもはや物足らぬ　扶美代
花ばさみ骸になった夏を剪る　アキ
初初しい笑みが戸惑うお立ち台　義清
ライバルが素敵な笑顔貯える　和子
結果など考えないで汗をかく　昭水
真実も笑い過ぎると嘘になる　紅紫朗
自分史の結果に薔薇を添えておく　美代子
人の物一匙だけが欲しくなり　夕子
負けん気の結果火傷をしてしまう　花梢
リストラは俺が握った匙加減　たかし
ぴかぴかに匙を磨いている殺意　欣之
急がずに命が枯れるまで遊ぶ　森子

川柳塔おおとり　原みさを報

愛情の渋滞揺れる家裁の灯　黙光
渋滞を尻目に走るオートバイ　清子
渋滞のイライラコース変えて行き　小生

渋滞を徒歩がとぼとぼ越して行く　崇
忘れよう遠くへ飛ばす夏帽子　艶子
栄転の度に故郷が遠くなり　由多香
嫁姑スープさめても距離をおき　紀子
フルムーン遠い記憶に会いに行く　彰雄
遠くから見送る雨の無人駅　雄々
血縁も遠く離れて薄くなる　敬之介
一人立ちの我が子との距離遠くなる　庸二
冤罪を晴らす勇気の遠い過去　雅通
わが妻も遠くで見れば可成りなり　義弘
十万億土から亡母の諭す声がする　邦昭
遠い国ライト兄弟近くする　仁子
十代の花芽にそっと水をやる　孝子
しあわせなことに十指がみな動く　宏章
子に送る荷十文字に心こめ　和子
十字路に立って身のふり考える　冨貴子
お隣の普請頭によく響く　せつ子
頭では勝てず心を見て貰う　風花
もじゃもじゃの頭に金を掛けてます　千秋
常連は頭で開ける縄のれん　舎人
辞書頼る頭どんどん錆びてくる　登美
年金の勘定だけは頭冴え　伝住
君のことばかり想っている頭　みさを

川柳塔打吹　米田　幸子報

上げ潮に身を持ち崩す羅針盤　和枝
幸せは山の彼方か地の果てか　克枝
夢を抱く四畳半さえ無辺なり　芳光
この道はいそいそデートした道だ　善江
彼方から逢うためだけにやって来た　勝見
ワイフの小言黙って聞くが得策だ　玲子
婆婆だって爺爺といそいそ出てみたい　セツ子
今朝聞いたさっきも聞いた今知らん　しろう
聞く耳は持たぬ子供の耳飾り　よしえ
聞いている犬もあくびの立ちばなし　玲坊
右で聞き左の耳で抜けて行く　博丈
仮の世だいそいそ弾む毬になる　きみ子
彼方よりカラスが呼んで目が覚めた　京子
姑から不満聞かされフグになる　逸子
枯れた木にお水をやって音を聞く　一夫
笛を吹く祭も葬も夢の中　和歌子
悪口は聞かないでおくすすきの穂　順子
民の声聞くのはポーズだけでよい　秀峰
いそいそと出かけてみたが定休日　玲泉
ライバルがいそいそするとあせり気味　雄々
山彦がふたりの話聞いている　螢
表通り歩くと石が飛んで来る　完司
迷ったら狐狗狸さんに聞いてみろ　石花菜
北の島はるか彼方になりそうだ　かつみ
潮乗りが下手海月に笑われる　季芳
もう秋だ稲穂に抱負きいて見る　信子
いそいそとデーサービスを待つ笑顔　孝恵
いそいそと負けるものかと嫁姑　十三男
潮満ちて華燭の典に辿りつく　節子
古傷を山の彼方に捨ててくる　幸子

川柳クラブわたの花　吉村　一風報

手作りの愛のつまったお弁当　寿代
こまごまと誤字も嬉しい母の文　信子
オルガンも娘と共に老けている　奈良司
雀百までオルガン孫に負けられぬ　友甫
母さんの笑顔はボクのビタミンだ　朝子
台風に洗われて澄む秋日和　一道
愛してたオルガンごみにまだ出せぬ　ますみ
オルガンのリズムで母は米をとぎ　トシエ
子が入れてくれた水割り水が増え　まさと
怒り肩父と同じの影法師　いつふみ
みのりの秋また太るのか困ったな　春江
人形とやりとり続く孫娘　知佐子
オルガンを踏めば童謡ころげ出る　美代子
日の丸にいちゃもんつけてどうなるの　民子
形勢不利孫の話に切替える　明
白旗をあげて肩の荷軽くする　八寿子
オルガン弾く母さんそっとしておこう　宏
オルガンの音に唱歌が目を覚ます　剛治
いつだってチャンス無言で通り過ぎ　ミツ子
パイプオルガン荘厳な音にうっとりと　道子
病む母へ旬を届ける菊なます　君江
体形はあんこ気性は尖ってる　和歌子
オルガンのセピアの音色秋さそう　春子
ビタミンと胃ぐすり提げて飲みにゆく　一風
愚痴言えぬ亡夫が主役の菊灯　幸枝
オルガンの次にピアノを買わされた　隆盛
恋人のオルガンぼくを呼んでいる　鬼遊

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

美しい指みて顔もみた車中　香住

指人形のように操れたらなあ　夫シマ子
指切りを時効にしては駄目ですか　欣史子
酩酊しえらい約束した小指　喜美子
喧嘩して指輪嵌めたり外したり　慶子
評判のいたずらっ子が出世する　能子
評判の薬十日目から効かぬ　あずき
評判は死んだ後にも花が咲く　弘直
評判のナースに脈が早くなり　清芳

ローズ川柳会　山崎君子報

コップ酒顔も知らない父の墓　てる
ごっくんとコップ一杯目をつぶり　ミサヲ
球根と命だいじに春を待つ　キク子
野菊挿し紙のコップが嬉しそう　みつ子
喫茶店コーヒーカップも味の内　藍
うれしさにチロリチロリと鳴るコップ　哲子
絵日記の色鉛筆は秋の色　トミエ
とり落とすコップに病告げられる　貴代子
道草も愉し人生いろはにほ　澄子
鉛筆を握ると脳がうめき出す　いわゑ
まだ生きることを信じて夢を追う　武庫坊
蕾のために咲いた花から切っておく　年代
4Bもタッチをあげる雨もよう　君子
赤鉛筆ばかりがチビて風の中　義子
妻の顔見ながらそっと出すコップ　笑女

▼お願い　各地柳壇の原稿は、所定の原稿用紙、所定の様式でお書きください。

川柳塔東大阪カルチャー教室開かれる

幸先のよさを思わせる秋晴れの10月28日、近鉄布施「ビブレ」の音楽室で「東大阪カルチャー教室」の開校式を迎えた。

今日のため何度も集まって準備をした、東大阪在住の同人を中心とした世話人会の面々も、申込書での手応えはあったものの一抹の不安を持っていた。「初心の人は本当に来て下さるだろうか」「応援団ばかりだと企画した意義がなくなるし」などなど。

ところが、二時からの開校予定が一時を過ぎる頃から出席者が次々とあらわれ、受付の安永春、北村賢子さんはてんやわんやで、いっとき手伝いが要る始末。年齢はやはり男性女性共、会社や子供からのリタイア層とうかがえる。「東大阪市の広報で見ました」「ミニコミ誌のパドで見ました」「○○さんの紹介です」と、皆さん期待と新しいものに取組む漠然とした戸惑いで胸が一杯の様子。

その中に二、三混じる見掛けた顔は、もうすでに何年かの柳歴だが一から学ぼうと言う真摯な同人達である。他にはじめての出席者に付添いの理事、常任理事の顔も見える。25名定員の教室にあわてて三つ椅子を足し、28名で開校のはこびとなる。

春さん配慮の卓上の花を前に、司会岩佐ダン吉常任理事で、定刻の二時に世話人を代表して西村哲夫理事の開校挨拶からはじまる。

講師は河内天笑理事長で、今日の講義内容のプリントを用意し、並々ならぬ力の入れようが伝わる。前半は川柳六大家の話、川柳塔の歴史、句会とは、などで会場はしばしば笑いの渦に巻き込まれる。

三時から五分休憩ののち後半は添削に入る。今回の出席者から送られてきた句（匿名）を例にあげ、講師のちょっとした手直しで、句がいっそう命を持つさまを目のあたりにした。次回からは実際に作句してもらい、一句一句添削をして句作りの指導に入るので、ぜひ続けて出席して欲しいと締めくくり、定刻の四時に終了した。

最後に前たもつ常任理事の挨拶があり、11月25日（第四木曜）の再会を約し散会した。

今回はじめて借りる会場でもあり、勝手がわからずお茶の手配などに不手際があったことなど、反省点もあったがまずは好スタート出来たと、万障繰合わせて出席して下さった西田柳宏子相談役はじめ、一同ほっとし快い疲れを覚えた。（ふ）

本社 十一月句会

十一月六日(土)午後五時半
アウィーナ大阪

あちらこちらで菊花展が催され、穏やかな秋晴れの六日、九十二名の出席者を迎えた。十月から大会が続き、今日も昼は大阪文化祭があり、いつもより幾分参加が少ないようだったが定刻に十一月句会は開かれた。

お話は板尾岳人副理事長。死ぬまで健康に過ごしたいと健康法あれこれ。

先ず第一に脳に刺激を与えること。川柳をしている人は九十歳を過ぎても若々しく元気と、前の席の黒川紫香相談役の方を向いて話す。次に靴。健康は靴からと言われるほど、足に合った靴を履くことは大切。また歯に気をつける。虫歯になってからでは遅い。宣伝されている保健薬を飲むよりも、バランスのとれた食物で健康を維持したい。

川柳の作句に励んで脳に刺激を与え、靴すなわち足と歯に気をつけて、誰もが健康で長生きをして頂きたくて、私の健康法をお話しましたと結んだ。

月間賞は奥田みつ子さん(西宮市)に輝く。
(司会—ダン吉)(記名—澄子・朝子)
(受付—美代子・昭子)

席題「染める」　寺川弘一選

道譲る少女は頬を染めて行く　一歩
髪染めて散髪をしてどこ行く気　〆女
ベランメー口調が似合わない茶髪　吐来
頭の毛染めるとリストラにかかる　しげお
毛を染めて心の中を入れ替える　武庫坊
髪黒く染めれば目立つ古稀の皺　吐来
どうしたの言われただけで頬染める　義子
赤いろに染めたシャツきる敬老日　はじめ
時々は心ピンクに染めてみる　扶美代
爪染めて何もしない娘に育ち　〆女
頬染めて読んだ誓詞も色褪せる　周信
何かある妻が足の爪染めている　利昭
爪染めて今日一日は何もせん　冬葉
頬染めるうちは可愛い女の子　鬼遊
受話器取る少女頬を染めている　洞庵
朱に染めて神秘な程の深い谷　紫香
秋色に染めて嵯峨野路暮れ急ぐ　千里
山脈を錦に染める深い秋　恭昌
山染める紅葉をたずね母背負い　一風
山小屋を紅葉が染める頃閉ざす　隆盛
龍安寺汚れた心無に染める　洋
山染めた紅葉一葉を持ち帰る　伽羅
ばら色に染まって絵画展を出る　いわゑ
染め替えてみても結局元の色　房子
ユニークな嫁が家風を染め直す　靖巳
一色に無理矢理染める多数決　保州
閉ざされた心を染める色がない　みつ子
均等法男好みに染め変える　セツ子
染め抜いた屋号が生きる古のれん　千秀
旅先で一日習う草木染め　度
日の丸を血潮で染めたことがある　正坊
ちらし寿司母の自慢の紅生姜　かすみ
山寺が賑わう山が染められて　昭子
春夏秋冬銀杏が染める御堂筋　洋
いつの間にか老舗に染まってきて夫婦　セツ子
染まりたい輪の中で呑むうまい酒　隆盛
亡妻の染めたのれんに夢の文字　朋月
人
シンプルな母で着物も草木染め　一風
地
父と子を染める夕日の肩ぐるま　朝子
天
あなたの彩に染める余白はとってある　三男
軸
ご来光今日を希望の色に染め

兼題「謎」　稲葉冬葉選

小出しの謎とけて交際深くなり　満津子
謎すこし持って居るひとチャーミング　満津子
溜め息の中に小さな謎がある　螢
謎すべて解けたら夢が消えるかも　楓楽
生活費入れずやりくりしてる妻　セツ子
謎めいた言葉の裏にバラの花　シマ子

謎とけて女は長い髪を梳く　寿子
謎解きが下手なボクだが刑事です　昭子
恋敵謎めいたことばかり言い　瑠美子
いい旅をしたいと謎をかけてくる　一歩
止り木のおんなの謎が美しい　たず子
年齢不詳の女に謎が多過ぎる　希久子
たとえばの話で謎をかけてくる　はじめ
五十年添うても妻は謎だらけ　靖巳
謎のある女で人を寄せつけず　紫香
喋らないので謎ある女にされ　天笑
いつの世も美女には謎がつきまとい　義
下書きを消したところに謎がある　萬的
消費税どこに使われたんだろう　ダン吉
謎解いたばかりに崩れだす絆　富湖
謎のままにしては置けない好奇心　文秋
女には男に解けぬ謎がある　章久
謎かけてはるらし私単細胞　伽羅
左様ならの少し手前で解ける謎　しげお
謎めいた言葉残して娘は家出　利武
お互いの謎が解けないまま夫婦　鹿太
謎掛けに本音をさぐるおちょぼ口　久峰
謎とけた夫へコーヒー甘いめに　英子
二十一世紀も女は謎のままがよい　希久子
謎なぞが好きな女の赤い爪　千里
謎少し残し合ってのよい夫婦　文
髪かたち変えお化粧が濃ゆくなり　鬼遊
謎解いてなんやつまらん石にされ　月子
お茶を濁した言葉の謎を追うている　〆女
謎を解く鍵は自分の中にある　諷云児

佳

レモンティー二人の謎をきいている　舞夢
謎は解くまい解けば深みに落ちるから　寿美
ブランコを揺すれば転げ落ちる謎　シマ子
自分史の光るあたりに謎がある　扶美代
バラ百本謎解く鍵をひそませる　千歩

人

深海魚も君の気持も謎ばかり　天笑

地

謎一つ掛けて貴方の風を待つ　愛論

天

謎解きは未完で角砂糖が溶け　美代子

軸

五百羅漢の謎は五百にとどまらず

兼題「イヤリング」　山本 希久子 選

イヤリングしようか補聴器かけようか　満津子
イヤリング片方誤解受ける種　照子
シャンデリアに負けたくはないイヤリング　楓楽
恋の形見に片方ずつのイヤリング　倫子
訥弁の熱意に動くイヤリング　昭子
耳かざり遠い時間を呼び戻す　寿子
イヤリング付けてまだまだ惚けられぬ　英子
イヤリング片方だけの持つドラマ　いわる
大股に歩く大きなイヤリング　周信
一泊の旅を楽しむイヤリング　紫香
助手席へわざと落としたイヤリング　たもつ
淋しい貌にした大きめのイヤリング　美代子
セクハラを叫ぶでっかいイヤリング　ダン吉
イヤリング外して罪の顔洗う　愛論
補聴器に負けられませんイヤリング　千歩
内緒ごと聞かぬふりするイヤリング　一歩
奥様に挑戦してるイヤリング　かすみ
自画像にかき加えてるイヤリング　睦子
片方を落して女強くなる　舞夢
ピアスあけて今日の気分は風まかせ　澄子
イヤリングプラス志向の耳が好き　みつ子
福耳に逆らっているイヤリング　瑠美子
慢心の耳でゆれてるイヤリング　千里

度

イヤリング原始時代の血が騒ぐ　周信
鍬を持つ老母に無縁なイヤリング　弘一
よく笑う女ダイヤのイヤリング　文
わたくしの春古希からのイヤリング　英子
嫉妬から片方失くすイヤリング　月子
イヤリングせんでも君は美しい　比呂志
イヤリングゆっくり縦に振る答　文秋
つり皮と同じリズムのイヤリング　弘一
イヤリングはずすと余韻遠ざかる　保州
厚底の靴に不安なイヤリング　洋
大ジョッキ軽がる乾したイヤリング

佳

時代とや男がピアスペンダント　靖巳
相槌をうって下さるイヤリング　扶美代

義

イヤリング礼儀正しく右左　房子
人恋し片方だけのイヤリング　いわる
しなやかに男をさばくイヤリング

人

指輪にもイヤリングにも雨期乾期　鹿太

地

イヤリングは真珠耳たぶは桜貝　倫子
天

イヤリング君と綺麗な距離にいる　つづや
軸

イヤリング私にルビをうつように

兼題「突然」　八十田 洞庵 選

突然で緊張走る会議室　庸佑
名を知らぬ女に突然握手され　螢
笑い話のように突然社が消える　大輪
耳もとで突然美女に囁かれ　天笑
突然の客が帰ったあとの愚痴　勇太
手は抜けぬ何時も突然姑は来る　泰子
裏金に突然変わる風の向き　萬的
突然のやる気に足らぬ持ち時間　扶美代
臨界は突然事故と言わせない　英子
ある日突然私の指紋消えている　雅文
裏山の崩れは突然とは言えぬ　柳宏子
心の準備できてなかったプロポーズ　洋
出勤の途中倒産知るわが社　正雄
突然に遺言状を見せにくる　千歩
突然ということもあり遺書を書く　泰子
リストラの風が突然こちら向く　富湖
突然に操縦したく機長室　東雲
突然は山一いらい慣れて来た　保子
ポックリ寺目指して精を出す写経　朋月
突然と言えぬバケツが知っている　満寿蔵
ふいに饒舌突然無口妻の乱　希久子
遠花火突然愛を言われても　たず子
突然の客にあわてぬ鍋料理　度
突然のご指名あわてまいことか　房子
空青し突然叫んでみたくなる　いわる
手の平をパッと返したのは味方　大輪
耐えてたえて別れ言葉は突然に　富湖
突然の出合い妹にしてしまい　はじめ
警察から突然電話きた茶髪　利武
信号はあったはずだと言う主治医　たもつ
お客さん突然右折できません　千代
招かざる客泊る気の牌の音　千歩
佳

母が来る下宿にまずい女靴　正雄
よかったですね余生豊かに突然死　とし子
電話ぐらいしてよわたしノーメイク　月子
突然死に備えて三度めしを食う　ダン吉
白昼夢突然虎が爪を出す　舞夢
人

突然の話は河内弁でする　しげお
地

人妻が枠を外して逢いに来る　雅文
天

突然のチャンスに男の失語症　扶美代
軸

妻の勘投げ縄不意に飛んでくる

兼題「たくらむ」　榎本 吐来 選

目立ちたいだけでたくらむ事もなし　螢
たくらみが有りそう妻の上機嫌　満津子
ポーカーフェイスたくらみ誰も気付かない　庸佑
たくらみが優しい女演じさせ　千里
たくらみを孫がばらしてなごむ席　満寿蔵
蜘蛛のたくらみまんまとかかる小さい虫　たず子
ライバルが笑うたくらみあるらしい　倫子
たくらんでいるなと思う低い腰　大輪
屋台酒たかが知れてる謀りごと　恭昌
たくらみに乗ったと見せて裏をかく　三男
たくらみは止せ止せ秋の虫が鳴く　英子
側近のたくらみ売れぬ嫁もらう　朋月
サングラス変えてたくらみひた隠す　颯云児
親だから娘のたくらみに乗ってやる　周信
たくらみか一社以外はみなおりる　一歩
たくらみがあって敵とも手を握る　靖巳
たくらみ一つ夕焼雲に裁かれる　度
誘われた酒に浮いてる悪巧み　正雄
二千円札の魂胆何ですか　保州
悪だくみ仕掛けておいて輪を抜ける　伽羅
好きな人だからたくらみ乗ってあげ　英子
満面に笑みを浮かべている詐欺師　保州
酒一合ほどでたくらみ引っ込めぬ　文
自自公のたくらみ裏が透けて見え　萬的
好き好きと言うたくらみに負けちゃった　洞庵
ちんぴらのたくらみボスに利用され　文秋
介護保険選挙目当ての悪巧み　柳弘
同窓会なにかたくらむ発起人　はじめ
たくらみを隠してモナリザの微笑　美代子
たくらみを見抜いて母の打つ先手　シマ子
何かある無気味な笑顔に迎えられ　柳宏子

佳

たくらみを笑って見てるお母さん　あやめ
悪巧み抱いた美人の薄笑い　洋
セクハラで知事の足をば引張る気　利武
年金でたくらむことは知れている　美代子
たくらみを知らない蟻の列続く　たもつ

人

たくらみにまんまと嵌る多数決　茜

地

飛車角を捨てるたくらみあるらしい　東雲

天

たくらみを隠す男の高笑い　勇太

軸

たくらみがばれて司法の餌となる

兼題「迷う」　橘高薫風選

朝起きて顔を洗ってまだ迷い　天笑
迷いから覚めて迷いの中にいる　勇太
迷うたら玉子三つのオムライス　義子
八十路来て迷い迷って生きてます　吉太郎
ダイエットしようかLL買うとこか　満津子
迷ったら嫌いな方を起用する　充子
花びらをみな千切ってもまだ迷い　一風
どの服か迷う迷うと嬉しそう　正雄
迷うたら妻のサインを待つことに　一歩
キューピッド何を迷うてボクを射る　一歩
迷い子が父さんきっと来ると言い　朋月
占いで見てもらっても未だ迷い　千里
迷うことないさジャンボくじ一枚　柳弘
髪の毛の長さに迷っている晩秋　扶美代
迷わずに妻と言う字を書きました　かすみ
迷うてはいるが振り返りはしない　扶美代
お人好し迷うてばかりいらっしゃる　千代
黄泉の道きょろきょろ迷う不埒者　久峰
迷いから抜け出すためのお酒なり　いわゑ
迷いからさめてきれいな月に遇う　はじめ
暮れやすき秋の迷いの黒揚羽　希久子
迷う度原点回帰母の膝　周信
国会も私も迷う介護保険　英子
迷うたび違う答えが欲しくなる　弘一
名人の迷った石に泣かされる　靖巳
運勢が吉と出たので迷い出し　文
迷信を信じてしまう歳らしい　利昭
捨て切れぬ迷いさました母の喝　正坊
最後まで迷いましたと言うておく　大輪
楓も蔦も迷いの中で赤くなる　希久子
もう迷いさほども持たぬ木守柿　洋
内科医は迷い外科医は迷わない　度

佳

先頭の雁は迷いを捨てている　保子
迷うのは発展途上かも知れぬ　鹿太
墨滲むここら辺りで迷うたか　富湖
迷ってる若さに魅了されてゆく　アキ
迷うたら風呂につかって考える　月子

人

銭持って善人迷うはめになる　一風

地

花道を歩いた人がまだ迷う　弘一

天

三日月に迷いはヒョイと掛けておく　みつ子

軸

女なりパスタピラフにさえ迷い　（清記—義）

本社句会皆出席者（順不同）

本年1月から11月までの皆出席者の氏名を左記に掲載します。もし誤りがありましたら事務所へお知らせください。

橘高薫風　石森利昭　芳地狸村　和田つづや
安藤寿美子　籠島恵子　鶴田遠野　田辺鹿太
川久保睦子　春城武庫坊　江口度　榎本吐来
高田美代子　藤井正雄　大内朝子　海老池洋
平松かすみ　小林周信　清水利武　川原章久
西口いわゑ　河内月子　鍛原千里　山本義子
河内天笑　前たもつ　宮口笛生　神夏磯典子
高杉鬼遊　高杉千歩　桝本蕗児　岸野あやめ
金井文秋　西出楓楽　阿萬萬的　宮崎シマ子
吉村雅文　籾山隆盛　長浜澄子　山本希久子
一本勇太　堀端三男　三宅保州　岩佐ダン吉
中澤伽羅　榎本舞夢　石原靖巳　奥田みつ子
小池しげお　吉川寿美　玉置重人　森下愛論
川島諷云児　嵯峨根保子　出口セツ子
（55名）

今月から、本社句会の記名係に大内朝子さん、清記係に谷口義さんが参加します。
どうぞよろしくお願いいたします。

柳界展望

★第13回堺市民芸術祭川柳大会は**9月12日**、堺市立栂文化会館で開催、本社関係の受賞者は次のとおり。

傾いたままで世紀末が走る　　徳山みつこ

姑の前でも凄い甘えよう　　中川　楓

★第23回鳥取県川柳大会は**10月10日**、倉吉シティホテルで開催、本社同人の受賞者は次のとおり。

〈鳥取県知事賞〉

毎日の鏡の中にいるやがて　　土橋　睦子

〈鳥取県議会議長賞〉

気を抜くとすぐに沈んでゆく住所　　八木　千代

〈新日本海新聞社賞〉

野外劇やがてだれにも日が沈む　　原　みさを

〈大会実行委員長賞〉

やんわりと包んで諭す母の釘　　石谷美恵子

★愛知県犬山市観光協会・文化協会が主催した「お城川柳コンテスト'99」の表彰式が**10月10日**、犬山市観光センターで行われた。全国から六六六二句の応募があり、特選一席及び本社同人の受賞は次のとおり。

〈特選一席〉

国宝の天守をまたぐ夏の雲　　中田たつお

〈準特選〉

旅日記犬山城と明治村　　羽津川公乃

月が出て昔話が好きな城　　小寺　花峯

なお、秀逸一〇〇句に同人の江口度・清水潮華・田中正坊・西出楓楽・早川盛夫・菱田満秋・古川奮水・森田熊生の八氏が入選。

★第49回岸和田市民川柳大会は**10月16日**、春木市民センターで開催、本社同人の秀句は次のとおり。

てっぺんに昇ると腐臭にも慣れる　　山本　蛙城

思い出にしよう一本線引いて　　川上　富湖

履歴書も泣いて暮秋を行く鞄　　山本　蛙城

祭り囃子は敵も味方もないリズム　　寺川　弘一

★第33回東大阪市民文化祭川柳大会は**10月17日**、東大阪市立社会教育センターで開かれ、本社同人の入賞者は次のとおり。

〈東大阪市教育委員会長賞〉

草に寝て宇宙のパワーひとりじめ　　西口いわを

なお、佳作に高杉鬼遊・寺井東雲・池森子・江口度の四氏が入選。

★第50回西宮市民文化祭川柳大会は**10月24日**、西宮市民会館で開催、本社同人の受賞者は次のとおり。

相聞歌今夜の月が美しい　　門谷たず子

栗あげて松茸もらってくる隣　　出口セツ子

★第四回鶴彬川柳大賞は次のとおり。

国挙げて幸せごっこ朱鷺一羽　　横村　華乱

★第49回富田林市民文化祭川柳大会は**10月31日**、富田林市中央公民館で開催。本社同人の秀句は次のとおり。

酸欠の街です重い重い息　　池　森子

★第22回寝屋川市民川柳大会は**11月3日**、寝屋川市立総合センターで開催、本社同人の秀句は次のとおり。

ぼろくそに言う医者だけどようはやる　　吉村一風

辞書引いた後で夫に聞いてみる　　谷口　義

その人の自然な姿母の前　　谷口　義

★第46回文化芸術・芸能祭八尾市川柳大会は**11月7日**八尾文化会館で開催、本社関係の秀句は次のとおり。

海の亀はもう二十一世紀の甲羅　　池　森子

致死量と背中合せの重い息　　池　森子

サヨナラのけじめに箒目をつける　　中井アキ

★第二回「川柳句集文学賞」ごあんない　**対象**＝一九九九年に発行の遺句集を除く個人句集　**選考委員**＝野沢

新同人紹介

大谷篤子（とくこ）

―薫風・みつ子推薦

省悟（青森）矢本大雪（弘前）　**賞**＝大賞一点・佳作若干　**締切**＝**一九九九年十二月三十一日**　**発表**＝「かもしか」誌　**送付先**（句集二部）＝〇三九―五二〇一　青森県下北郡川内町浦町・高田寄生木方・川柳句集文学賞事務局　第一回の「川柳句集文学賞」は、平成六年度川柳塔賞受賞者の永田暁風氏（宝塚市）の『木馬』に輝いた。

▽出　版△

■『川柳泉尾十五周年記念合同句集』B6判160ページ。高杉鬼遊序文・北川弘子ほか挨拶。美研アート出版。

■森川まさお作品集『ぶらり気まま旅』B6判上製本228ページ。今年2月死去のまさおさんの川柳・エッセーなどを御遺族がまとめた遺作集。非売品。美研アート出版。

▽人事往来△

■10月5日・26日、薫風主幹は大阪千里公民館の高齢者を対象とした教養教室で二回にわたって、川柳の話をした。

■10月20日、「JA西大寺やすらぎ」で行われた寺尾俊平氏の通夜に薫風主幹・天笑理事長・岳人副理事長が参列、御冥福を祈った。

■10月24日、第14回国民文化祭・ぎふ'99に薫風主幹は兼題「鮎」の選者として郡上八幡町に赴いた。

■10月31日、東京都国立市のNHK学園全国川柳大会に八木千代参与は宿題「田舎」の選者として出席。

■10月31日、薫風主幹はライオンズクラブのライオンズ柳壇で難波神社行き。

▽同人消息△

■中原諷人氏（鳥取県）は10月30日、鹿野町文化団体連絡協議会から鹿野町文化功労賞の表彰を受けた。

▼おことわり▲

■**9月号**＝P77（水煙抄）上段18行目「幾山河越えて日の丸美しい」の句は米田恭昌氏の既発表の句と酷似していますので削除。

■**11月号**＝P87（水煙抄）上段20行目「頼朝の墓前でガイド物忘れ」の句は本人の申し出により削除。

▼訂正とお詫び▲

■**10月号**＝P21（川柳塔）上段15行目歯答え→歯**応**え

■P43（川柳塔）上段11行目読ける気→**続**ける気

■**11月号**＝P103（記念句会）中段7行目森居・菁居→森**井**菁居

▼訃　報▲

■近藤一途氏（元同人・寝屋川市）は10月29日、病気のため急逝。88歳。

■松川杜的氏（参与・京都市）は11月7日、病気のため死去。85歳。10日に南玉泉院で行われた告別式には薫風主幹はじめ柳友多数がお見送りした。

電話番号変更

平成12年1月1日から大阪府北部の072局番は072となり市内局番の頭に8をつけて三桁となります。

例　0720―51―2345→072―851―2345

平成11年度大阪文化祭　第51回川柳大会秀句

11月6日・大阪市北区民センター

出席　123名

まっすぐに貼って男の頼み事　竹下勲二朗

人許すこころ仏の灯が揺れる　竹森　雀舎

角を磨こうとても優しい音楽で　小西　幹斉

波は男で女を魚のように抱く　板野　美子

知事賞を壁から外す子供部屋　高岡　健太

何に惹かれて覗いてしまう深い井戸　伊佐岡よし子

手品の種そんなことかとやってみる　中村　百歩

きつねうどん食べに行こうと言える仲　立蔵　信子

句会名	日時と題	会場と投句先
高槻川柳サークル卯の花	16日(木)正午から 後悔・カレンダー・埋める やれやれ・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8　川島諷云児
川柳会梨花	18日(土)午後1時から 飾る・王・だんだん・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター　1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方　坂田和歌子
岸和田川柳会	18日(土)午後1時半から 上役・遠慮・おしゃべり 駆け引き	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610—85　芳地狸村
川柳ねやがわ	19日(日)正午から 終り・涙・犯罪・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	19日(日)午後1時半から 互選「影」・舌・にっこり	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	20日(月)午後1時から 役者・タイトル・待つ・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801　田中正坊
川柳塔みぞくち	20日(月)午後7時半から 期待・今年の出来事	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々
南大阪川柳会	22日(水)午後6時から 灸・焼却・躍動・屋号	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
京都塔の会	23日(木・祝)午後1時から 売る・答・ずぼら	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳クラブわたの花	24日(金)午前10時から 貯める・鯛・箱	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川柳塔ふくべ	25日(土)午後1時から さようなら・詰まる・楽 珍しい・「意地」	福部村中央公民館2F研修室 〒689-0115 鳥取県岩美郡福部村細川16—3 村上信子
東大阪市川柳同好会	25日(土)午後6時から 辻・聴く・義理・底	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
はびきの市民川柳会	26日(日)午後1時から 雪・パレード・あんまり・「面倒」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
城北川柳会	恒例により句会は休み	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8　神夏磯典子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

12月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	2日(木)午後1時(従来は2時) 映画・本・恵み	船橋フロムワン（船橋商店街内） 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼崎 いくしま	3日(金)午後1時から 湖・忘れる・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	4日(土)午後1時から 遊ぶ・終・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳塔 みちのく	4日(土)午後4時から 断絶・積もる・じわじわ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 唐津支部	5日(日)午後1時半から 梅・つまり・頂く	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
堺川柳会	9日(木)午後1時から ゆとり(折句)・揃う(共選)・一流	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3 河内天笑
八尾市民 川柳会	10日(金)午後6時から 鈴・嬉しい・水仙・ヌード	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 打吹	11日(土)午後1時から やれやれ・刺・欺く	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 まつえ	11日(土)午後1時半から 歳末・売れる・早い	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川柳塔 わかやま	12日(日)午後1時から 横・義理・消す・「反省」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
川柳 ふうもん 吟社	**12日**(日)午後1時から **没句川柳大会**	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2 植田一京
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から ソロバン・叱る・短い・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	14日(火)午後1時から 酒・続く・物知り	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒560-0864 豊中市夕日丘1—7—5 田辺正三郎
尼崎 尾浜 川柳会	14日(火)午後1時半から けじめ・年末・自由吟	尼崎市尾浜公民館 阪急武庫之荘北口から 市バス㊽番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太

編集後記

★今の世の中、みんな忙しくしている。特に年末は忙しいが口をつく。忙しいと心のゆとりがなくなり、何でもないことに腹を立てたり、神経をとがらせる。

★小出智子さんの「風船が破れたぐらいの事でした」「心配は海苔が湿ったほどのこと」の句のように、ゆったりした心を持ちたいものとつくづく思う。

★人には好き嫌いがあり相性もあるが、人間の風格というか、味というものは持って生まれたものがあるように思われる。すべて生まれつきにすると、修養や勉強は何の為かとなるが…。

★川柳を始めた頃、本誌の編集後記にモテる話が載っていた記憶があり、古い塔誌を繰ってみた。昭和57年7月号に谷垣史好さんが作詞家・山口洋子のエッセーを読んだ話が載っていた。

「幾つ何十になっても女にモテたい、これが男の本音だろう」というわけで、モテる秘訣があるのかと一気に読んだ結論は「モテるかモテないか、それは才能というか資質というか、持って生まれたもの以外にない。努力とか根性ではどうにもならん」とか。「川柳にも同じような壁が…」と続くが。

★『川柳研究』10月号に、寺尾俊平さんが川上三太郎の思い出として「三太郎は人の心を揺さぶる名人でもあった」「見事なほどの人間関係を巧まずして完成させる」と書かれていた。

★多くの人に敬愛されたが智子さんは平成9年、史好さんは平成5年、そして、俊平さんは今秋、虹の橋を渡ってしまわれた。（み）

ひとこと

世紀末の新世紀

コンピュータに携わっている私にとっては、二〇〇〇年を間近にし、多忙な毎日。差し詰め来年の元旦は（二〇〇〇年問題の為）出社せねばならない。

最近、色々な機会で世紀末とか新世紀という言葉を、目にしたり耳にしたりする。そこで気になることは、何故か、一九九九年が（九九が続く為か）世紀末、二〇〇〇年が（区切りが良い為か）新世紀と、勘違いされている方が多々居るようです。

一年から一〇〇年が一世紀ですので、一九〇一年から二〇〇〇年までが二十世紀なのです。ですから二〇〇一年から初めて二十一世紀が始まる訳です。

柳友の皆様は御存じでしょうけど、老婆心ながら一言。

（竹治ちかし）

▼前回は日本酒度（甘・辛）について書いた。今回は酸味について書いてみたいと思う。酒の酸は主に乳酸とコハク酸である。

▼通常、酒は〝原酒〟（アルコール分20度前後）の状態で貯蔵され、出荷のとき加水して、15～16度のアルコール分にうすめるのが普通である。

▼しかし純米酒以外は、酸ゼロの添加用アルコールでうすめられ、さらに加水でうすめられて、酸味不足の水っぽい酒となるのである。

▼酸度まで表示されている酒はそう多くはないが、最近は徐々に増えているようである。これは全く私の好みであるが、少なくとも酸度1.5以上のものが旨いと感じられる。

▼酸度1.5とは、醸造酢が4～7度ぐらいと言われているから、おおよその見当はつく。では酸度表示のある酒で、私の飲んだ1.5以上の酒銘。

▼美能野、神島、賀茂鶴、黄桜、舟来屋、男山、以上は買ったか、飲み屋で飲んだもの。若戎、聚楽大閤、御代栄、瑞泉、以上はいずれも頂戴したもの。

▼都合により、この稿で私は退くこととなりました。深甚なる謝意を表して、お別れといたします。（金）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**2月号**）　地名　　雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人　・　**誌友**　マルで囲んでください。

本社12月句会

とき　12月7日（火）午後5時半
ところ　アウィーナ大阪　4階
天王寺区石ケ辻町19-12　電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題「ピエロ」　海老池　洋選
「ばら」　高田　美代子選
「憎い」　都倉　求芽選
「惜しむ」　西出　楓楽選
「結ぶ」　橘高　薫風選

席題　1題　当日発表（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円
（会費・投句料、変更しました）

本社1月句会　7日（金）予定

兼題　「コント」「盛る」「蓋」「抜ける」「世界」

作品募集

2月号発表（12月15日締切）

川柳塔（8句）　橘高薫風選
水煙抄（8句）　河内天笑選
愛染帖（3句）　波多野五楽庵選
茴香の花（3句）　宮西弥生選
「梅」　鴨谷瑠美子選
「つまり」　森茂美選
「頂く」　高橋岳水選

課題吟（3句）
初歩教室「流れる」（3句）　吐田公一担当

3月号
課題吟「ふだん」「紺」「カード」
初歩教室「本」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・茴香の花欄・一路集（課題吟）および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

夜市川柳募集

第7回「種」　門脇かずお選
ハガキに3句　12月末締切
投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

定価　六百円（送料84円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）

平成十一年十二月一日発行
編集兼発行人　橘高薫
印刷所　美研アート
〒545-0005　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六　ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六六一―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可

（各書の内容見本進呈）

川柳表現辞典

田口麦彦著・46判上製箱入
税込価三五七〇円送料340円

四年間の歳月を費して、現代川柳三〇万句より六九二七句を選び、一五四二語の項目、解説内の八三九語をあげて、語の意味、難解な言葉、新語等を説明。実作例句で川柳表現の方法と技術を示した。

川柳技法入門

田口麦彦著・川柳の作り方
定価（税込）一八三五円送料310円

川柳上達の技術を九二五句の引例で分りやすく説明。添削・推敲は一句の完成まで、風刺・ユーモア・リズム・比喩・イメージ形成等

時事川柳入門

田口麦彦著・基本と方法と技法
定価（税込）一八三五円送料310円

現在を17音で切りとる諧謔精神と作り方の方法・技術を説明。新聞雑誌投稿句、サラリーマン川柳の即興性など引例九五三句で解明。

現代川柳入門

田口麦彦著・実作教室、慶弔句
定価（税込）一九八〇円送料310円

川柳の基本から作句の心構え、自由に人間と社会を詠む方法を現代の言葉で現代的に例句をあげて説明。全力で書きおろした入門書。

川柳の書き方

松橋巨山著・川柳書マニュアル
定価（税込）三八七三円送料340円

はじめて筆を持つ人から、中級の技術まで修得。自由に色紙・短冊扇面・団扇・掛け軸が書ける。一七〇の手本と図表、下敷き六枚付

〒170-0003 東京都豊島区駒込6丁目6-23　飯塚書店　電話 03(3918)2090　振替 00130-6-13014

雑誌　05703－12